
ドラゴンクエスト? そして現実へ...

あちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ そして現実へ…

【Nコード】

N6325X

【作者名】

あちゃ

【あらすじ】

DQ?の世界に『友と絆と男と女』のリユカが迷い込みました。チャライノリでなんとか生きて行く…そんなDQ?です。

又ルい作品ではございますが、ご了承下さい。

今作品の前に私の「ドラゴンクエストV～友と絆と男と女」をお読み頂けると、より一層楽しんで頂けるはずです。

よろしくお願い致します。

プロローグ

<アリアハン>

「勇者オルテガの娘アルルよ、よく来た！面を上げよ」

ここはアリアハン城内、謁見の間。

玉座に座るアリアハン国王を前に、少女が一人傳いている。

少女の名は『アルル』

10年前、魔王バラモスを倒すべく一人旅立ち、火山で死亡した『オルテガ』の娘である。

「昨今、魔物の活動が活発になってきていると言う！世界を救う為、人々を救う為：そして志半ばで倒れた父オルテガの為、勇者アルルよ！魔王バラモスを成敗して来るのだ！」

「は！微力ではありますが、全力を尽くします！」
少女は力強く答える。

「うむ！：オルテガと同じ轍を踏まぬよう、ルイーダの酒場へ行き旅の仲間を集めよ」

国王は立ち上がり謁見の間を出て行く。

大臣の一人が少女へ近付き、幾ばくかのゴールドと装備の入った袋を手渡し退室を促す。

アルルは城を出るとすぐに先程手渡された袋の中身を確認する。

中にはこん棒2本、檜の棒1本、旅人の服1着、50ゴールド…

「何これ！？シヨボ！」

思わず大声を出してしまった自分に驚き、慌てて人気のない裏路地へ逃げ込むアルル。

「はあ〜」

アルルは深い溜息と共に、再度手渡された袋の中身を確認する。

「何度見てもシヨボイわね…」

満を持してアリアハン王国が、世界へ旅立たせる勇者へ贈る祝儀としては溜息の出るレベルである。

「誰か途中でちよっぱねたんじゃ無いでしょうね!? 装備品はともかく、50ゴールドって…その100倍あっても良くない?」

アルルは愚痴をこぼしながら人気のない裏路地から川沿いの小道へと移動する。

幼い頃より『勇者』として使命を帯びた人生を歩んでいたアルル。

剣術も魔法も鍛錬を怠った事はなく、同じ年頃の少女としてはかなりの手練れではあるものの、魔王討伐にたった一人で赴くつもりは毛頭無い。

従って国王に言われるまでもなく、旅の仲間を求めルイーダの酒場へ赴いているのだが…

《この旅は辛く過酷な旅であろうから、最低でも仲間はあと3人はほしい!でも50ゴールドじゃあまともに装備を揃える事も出来ない!1人ぐらいいは装備品の有無に拘わらず、強い仲間が必要ね!居るかしたら、そんな都合がいい人?》

アルルが一人先の展望を考え歩いていると、前方の空間に奇妙な穴が出現した!

「な、何よ!あれ?」

地上3メートル程の何も無い空間に何処へ通じているのか分からない穴!

好奇心から穴の側に近付くと…

ドサツ!!

穴から何かが落ちてきて、穴は閉じてしまった…

「いたたたた…何だよ…乱暴に吸い込んで、乱暴に吐き出すって!しかも此処、何処だよ!?何で僕がこんな所に来なきゃいけないんだよ!!」

穴から吐き出されたのは、一人の青年だった。

20代半ばの青年は、紫のターバンを巻きマントで体を覆っているが、その体軀は歴戦の強者を醸し出している。

手には竜を形取った杖を携え、顔立ちは整った美青年である。

そして何より吸い込まれそうな程透き通った瞳が印象的な青年だ。

その青年がアルルに気付き、視線を向け優しく心地よい声で話しかける。

「やあ、こんにちは」

10人の女性が居たら、10人とも見とれるであろう青年に、アルルも例外なく見とれ呆けている。

「見ていたら分かると思うけど…僕、違う世界から来たんだよね！でも、怪しい者じゃないよ！出来れば帰る手立てを探したいんだけど…その前に、此処どこ？」

プロローグ（後書き）

どうもあちゃです。

またやります。

次話の「裏プロローグ」も同時投稿。

二つ読んで初めて一つのプロローグです。

応援よろしく願います。

ご感想お待ちしております。

見切り発車なので間隔開くかも…

裏プロローグ

<グランバニア>

魔界の魔王ミルドラスを倒してから7年の歳月が流れた、ここ格蘭バニアでは国民に絶大な支持を得ている国王が、今日も気ままにメイドをナンパしている。

「やあ、エルフィーナちゃん。今日もキレイだね！今夜あたり僕とどう？」

とても国民に絶大な支持を得ているとは思えぬチャラさで、メイドを口説く国王…

「リュカ！いい加減にしなさい！また愛人増やすつもり！？」

「やや！？違うツスよ、ビアンカさん！！これは僕流の挨拶ツスよ！」

王妃に叱られるも、全く堪えない男…それが格蘭バニア国王リュカである。

リュカとビアンカの間には3人の子供がいる。

長男のティミー17歳、長女のポピー17歳、そして次女のマリイ7歳。

ポピーは半年前、友好国のラインハットの王子コリンズの元へ嫁いだ為、現在はティミーとマリイが正式な格蘭バニア王家の血筋である。

現在ティミーは身分を隠匿し、城の兵士として働いている。

またマリイも城下の学校へ平民として通っている。

そのティミーが国王直属の近衛として配属されてから半年、今日も執務室で父親にからかわれていた…

「ねえ〜ティミー…いい加減彼女作れよお…一人で良いからさあ〜」

「僕の好みの女性が居ないんです！ほつといて下さい」

以前から繰り返されたやり取り…しかし、娘の一人が嫁ぎ親元を離れた事もあり、以前よりしつこく彼女を作る事を進める父…

そんな何時もと同じやり取りに、何時もと違う事態が訪れる。

「あれ？何だこれ！？」

それは、執務机に山積みになつた書類の中から出てきた1冊の分厚い大きな本である。

その性格に似合わず綺麗好きなりユカは、整理整頓はきっちり行っていた為、机の上に置かれた見慣れぬ本に違和感を憶えていた。

「何だよ！誰だよ、勝手に置いていったのは！？て言うか、何処から持ってきたんだよ！？」

そう文句を言いながらも、本を開き読み始めるリュカ。（基本、読書好きである）

本には前書きがあり、そこには…

【人生という物語には各々主役が存在する。主役は別の主役と出会い、そしてまた新たな物語が紡ぎ出されて行く。この物語はそんな物語の一つである。】

そして次のページにタイトルが…

【そして伝説へ…】と…

「何だ！？随分と面白そうじゃないか！！」

リュカは書類の山には手を付けず、本の続きを読もうとしている。

しかしページを捲り終えた瞬間、大声で激怒し始めた。

「何だこりゃ！？続きのページには何も書かれて無いじゃん！！バカにしてるの！？偉そうなタイトル付けやがって！」

ページを何枚か捲り、全てが白紙である事を確認したリュカはタイトルページに戻り、徐にペンを手にする。

「何が【そして伝説へ…】だよ！現実なんてこんなもんだよ！！タイトル直してやる！」

リュカはタイトルの【そして伝説へ…】にペンで2本線を引くと、自らタイトルを書き直した…【そして現実へ…】と…

すると本が突然輝きだし目の前のリュカを吸い込み始めた！
慌てたリュカは手近にあった物を掴み難を逃れようとしてみたが、
掴んだ物が常用している『ドラゴンの杖』だった為、杖ごと一緒に
吸い込まれてしまった。

<アリアハン>

ドサツ！！

リュカは地上3メートル程の所に開いた穴から吐き出され、受け身
をとることなく地面に落ちた。

「いたたたた…何だよ…乱暴に吸い込んで、乱暴に吐き出すって！
しかも此処、何処だよ！？何で僕がこんな所に来なきゃいけないん
だよ！！」

そこは先程まで居た執務室とは明らかに違う。
まずそこは外だった。

そして目の前には16・7歳くらいの少女が驚いた表情でリュカを
見ている。

「やあ、こんにちは」

どう見てもそこはグランバニアとは違い、過去の記憶から別世界へ
迷い込んだ事を察したリュカは、目の前の少女を脅かさない様に話
しかける。

「見ていたら分かると思うけど…僕、違う世界から来たんだよね！
でも、怪しい者じゃないよ！出来れば帰る手立てを探したいんだけど…
その前に、此処どこ？」

青年と少女の冒険の物語が始まろうとしている。

旅は道連れ（前書き）

やっとこさ、本編突入！

色々書きたい事はあるんだけど…

まあ、ともかくもお楽しみ下さい。

旅は道連れ

<ルイーダの酒場>

そこは大勢の人々で溢れかえっていた。

まだ昼前だと言うのに、酒を飲んでくたを巻く冒険者達で…

「貴女か噂の勇者様ね。ルイーダの酒場へようこそ。ここは出会いと別れの間よ」

酒場の女主人『ルイーダ』が妖しく美しい表情で二人に話しかける。何故この二人が連れ立ってこの様な場所に来たかと言うと…

アルルの真剣な思いと、リュカのいい加減な思いが合わさり化学反応を起こした結果である。

簡単に言うと、自己紹介を終えた二人は互いの状況を説明、助力を願ひ互いに承諾。

アルルの願ひは「見るからに旅慣れした屈強な戦士（風？）の男に魔王討伐の手助けをしてもらおう事」

リュカの願ひは「ともかく帰りたいけど、どうして良いのか分からないから、どうせなら美少女と一緒に居る方が楽しいし一緒に付いて行こうかな…」

である。

互いの思いの温度差に気付くことなく、状況は変化し更なる仲間を求めルイーダの酒場へやって来た…

「あの、魔王討伐に旅立つてくれる冒険者は居ますか？」

「さあね…そこらに居るんじゃないかねえ」

アルルの真剣な眼差しも感銘を受けることなく一瞥して終わるルイーダ。

「あははは！昼真っから飲んだくれる連中が役に立つのか？まあ…

使い捨ての盾ぐらいにはなるか！あはははは！」

酒場を見渡したリュカが腹を抱えて笑い出す。

リュカの透き通った声はこの喧噪の中でも、人々の耳に届く声の為、酒場内は一斉に静まりかえる…

血の気の多い冒険者達の中、一人の男がリュカの前へやって来る…リュカの身の丈程あるう戦斧を肩に担ぎ、リュカより頭2つは大きい男…

「聞き捨てならねえな！俺は最強の戦士ボーデン！テメエーの様なヒョロ男なんざ、瞬殺してやんよ！！」

「あ…あんまり自分で最強の戦士って言わない方が良いよ…ものつそい格好悪い！」

自称最強の戦士の矜持を傷つけるには十分すぎる発言だった。

「き、貴様ー！！」

自称最強の戦士は手にした戦斧をリュカに向け振り下ろす！

その場にいた誰もが軽口を叩く男の無惨な死体を予想した…

だが現実には、左手の親指と人差し指で戦斧の刃部分を掴み、顔色一つ変えず受け止めている男と、顔を真っ赤にして戦斧を振り下ろそうと藻掻いている大男の姿だった。

周囲の誰もが目を見開き驚愕する…

昼間から飲んだくれてはいるが、実際にその男はかなりの強さではあるのだ。

大男の戦斧は微動だにせず、押し切る事も、引き抜く事も出来ない。

「ぐおおお！は、放しやがれええ！！」

顔を真っ赤にして呻く大男に気付いたリュカは、

「あ、ごめん。忘れてた」

と、手を離す。

その瞬間、全体重をかけ戦斧を引き抜こうとしていた大男は支えを無くし、後方へ大きく吹っ飛んだ！

大男は2メートル程離れたテーブルの上に背中から落ちる…

大量の酒が並んだテーブルを酒瓶やグラスと共に押し潰し、大男の

意識は遙か彼方に飛び去った…

静寂が包む中、緊張感の無い声が響き渡る。

「あー…この中で我こそはって言う人いない？魔王バカボンを倒す旅に協力してくれる人は！？」

「バラモスです！魔王バラモス！！」

「ん？ああ…それぞれ…！で、どう？」

周囲を見渡すリユカ…

しかし先程までの喧噪はなく、酔いの覚めきつた自称冒険者達は俯き眩くのみ…

「アンタ…俺達に死ぬと言うのか…」

「言つてないよそんなこと。僕も死にたくないもん」

「魔王バラモスなんて倒せるわけ無いだろ…！だから俺達は現実を忘れる為に、酒を飲み憂さを晴らしてんだ…」

静まりかえり俯く自称冒険者達の中を掻き分ける様に二人の人影がアルルとリユカの前へやって来た。

二人のうち一人は少女で、身長は170に満たない僧侶風の美少女。もう一人は少年で、身長は更に低く160あるかないかの魔道士風の美少年。

「お、俺はウルフ。まだ駆け出しだけど魔法使いだ！」

「あの、私はハツキです。その…見習いですが僧侶として頑張ってます。」

「俺達、絶対足手纏いにならないから連れて行ってよ！」

「私達孤児なんです！バラモスを倒す為なら頑張ります！」

ハツキはアルルと同年齢…ウルフは更に2・3歳年下であろう…二人の真剣な眼差しがリユカに襲いかかる。

「僕に言わないで！僕に決定権は無いから！アルルに言って！」
リユカはたじろぎアルルに丸投げする。

アルルは少し引いたものの、笑顔で快諾。

奇妙なバランスの4人パーティーが結成された…

<アリアハン近郊>

「なあなあ！アンタ職業は何なんだ？さつき大男を吹っ飛ばしてたし、やっぱり戦士なのか！？」

好奇心旺盛の少年ウルフが、リュカを質問攻めに行っている。

まだ城下を出て、それ程経過はしていない…

「さっきの大男の事なら誤解だよ。僕はあの人を吹っ飛ばしてないよ。振り下ろされた斧を掴んだら、放せって言っただけなんだ！そしたら勝手に吹っ飛んだ！」

リュカは嫌がることなく優しく話しかける。

「それに職業って何？今は見ての通りしがない旅人だけ…」

「え！？リュカさんは職業の事を知らないんですか？」
思わずハツキが質問する。

「リュカはこの世界の住人じゃないのよ！」
堪らずアルルが二人に説明をしてあげる。

・
・
・
「へー！じゃあアンタ別の世界から来たんだ！？」

「別の世界って…何だか不思議ですね…」
ウルフとハツキがそれぞれ感想を述べる…

「あんまこと変わんないよ！」

「じゃあアンタ職業は決まってるのか！？以前は何してたんだ？」
「うん。以前は王様でした」

「アンタ馬鹿なのか？そう言う冗談は面白くないんだよ！」

「さつきから気になってただけだよ…止めてくれない！それ…」
「え！？何？」

「僕、きつと多分ウルフより年上のはずだと思っただよね」

「自身持つてくれ、100%年上だから」

「うん。じゃあ、『アンタ』って呼ぶの止めて！僕『リュカ』って名前があるからさ！」

「あ！ごめんなさい。リュカさん！」
慌てて謝罪をするウルフに、怒る風でもなく優しく微笑み頭を撫でるリュカ…

しかし、ゆつたりとした雰囲気は長続きはしない！

アルル達の前に3匹のモンスターが立ちふさがる。

青く半透明なゼリー状のモンスター…スライムである！

アルルは直ぐさま銅の剣を抜き放ち1匹のスライムAへと斬りかかる！

ハツキは手にしたこん棒を振りかぶり、飛びかかってきたスライムB目掛け打ち下ろす！

ウルフはメラを唱え、スライムCへ打ち放つ…が、命中したもののトドメは刺せず、スライムCは手近にいたアルルへ襲いかかる！

スライムAを倒したばかりのアルルは隙だらけで、スライムCの攻撃をまともに食らってしまった！

「きゃー！！」

とは言え多少はメラが効いてたらしく、スライムCの攻撃は大事には至らず、アルルは手の甲を擦り剥いただけで即座に体勢を立て直した。

そして一閃！

最後のスライムをアルルは倒し戦闘は終了する。

「アルルさん！大丈夫！」

ハツキは慌てて近寄りホイミを唱えて傷を癒した。

「ありがとう、ハツキ」

「ごめん！俺がメラをもっとしつかり当てていれば…」

ウルフは申し訳無さそうにアルルに近付き謝罪する。

「そんな事ないよ。ウルフのメラはちゃんと当たってたわよ！あのスライムがタフだっただけよ！気にしないの！こっやってチームプレイで倒したんだから！」

みんな互いの健闘を称えあっている…一人を除いて。

「リユカさん…何やってんの？」

倒したスライムが消え去った跡に落ちてあるゴールドを拾い集めりユカは爽やかな笑顔で報告する。

「スライム3匹で6ゴールド！僕の居た世界より倍だよ！」

戦闘に参加せずゴールドを広い漁るリユカに、何も言えなくなる3人であった…

旅は道連れ（後書き）

これでいいのだ！

反対の賛成の人は居るのかな？

ワシは魔王なのだ！

青春の憤り

<アリアハン近郊>

アルル一行はアリアハンより北に位置する『レーベ』を目指し進んで行く。

途中、スライム、大カラス、一角ウサギなどのモンスターに襲われ戦闘を余儀なくされる！

アルル、ハツキ、ウルフは傷付きながらも勝利を重ね、この新米パーティーの戦い方を実践を持って学んで行く。

そして日は傾き黄昏が空を覆う頃、パーティーリーダーの少女が言葉を発した。

「って言うかリュカさん！貴方も戦って下さい！」
「そうなのだ！」

4人パーティーにも拘わらず戦闘を行っているのは3人…

リュカは戦闘に加わる意志すら見せていない。

「え〜！僕、争いごと嫌いなんだよねえ〜…」

「好き嫌いじゃないんだよ！俺達チームなんだからさあ…リュカさんは強いんだろ…一緒に戦ってよ！」

「僕、強くないよ！『勇者』とかそんな大層なもんじゃないし…でも逃げ足には自身があるから、ヤバくなったらみんなを担いで逃げ出すよ！」

右手の親指を立てて爽やかな笑顔で答えるリュカ…

二人の少女はリュカの笑顔に魅了され顔を赤く染め上げる。

夕日に照らされてなければ気付かれていたであろう…

「それよりさあ…もう日が暮れるよ！一旦町へ戻ろうよ！」

「何言ってるんだよ！早くバラモスを倒して平和な世界にしなきゃ！」

「イヤイヤ！今日は冒険初日だしさ…そんなに慌てても失敗しちゃうよ」

「そうよウルフ！リュカさんの言う通りよ！今日は一旦アリアハンへ帰りましょ！」

「ハ…ハツキまで…」

世の中、女性の意見は採用されやすい。

そして少女の心を魅了したリュカの意見は採用される。

ウルフは少しふて腐れながらも、姉的存在のハツキに従ってしまうのである…

実のところアルル達は町からそれ程離れてはいない。

町を出たのが遅かった事もあるが、冒険初心者の為進行が遅いのである。

<アリアハン>

日も沈み殆どの商店が店じまいをした頃、アルル達はアリアハンの城下町へ帰り着いた。

「私の家はすぐそこなのよ。あんまり広くはないけれど、みんなが寝泊まりする事は出来るから…きつとお母さんも喜んでくれるわ！」
アルルが皆を自宅へ誘う中、リュカは足を止めアルルの提案を拒否する。

「あ…僕は町の宿屋に泊まるよ！」

「何ですよ！？そりゃ、大したお持てなしは出来ないけど…わざわざ宿代を払う事ないでしょ！？遠慮はしないでよ！私達仲間でしょ！」
アルルは今までに出会った事のない、この魅力的な男性と少しでも一緒に居たく、必死に我が家への宿泊を薦める。

「分かった分かった…正直言うとな、町で女の子ナンパしてから宿屋へ泊まるつもりなんだ！」

「え…ちよ…な、何考えてんの!？」

ハツキもウルフも頷き呆れる。

「明日から本格的に旅立つのよ！今日はゆっくり休んで英気を養わなければならないのに！そんなの…ダメよ！！」

「うん。それは大丈夫！僕、戦闘しないから！」

言い切るリュカ。

「戦闘はしろよ！」

突っ込むウルフ。

「ともかくダメなものはダメ！」

「そうよ！ナンパなんてダメです！」

我が儘なアルルとハツキ。

「う〜ん…困ったなあ…」

リュカは悩み、そしてアルルに質問する。

「じゃあさ、一つ聞くけど…アルルのお母さんて美人？」

「……………宿屋へ泊まって下さい！！」

そしてリュカは夜の町へと消えて行く…

日も昇り、一人別行動の仲間を迎えに宿屋まで赴く3人の若者達。

昨晚この宿屋に泊まった客は一人だった為、迷うことなく目的の客室を見つける事が出来た3人。

しかしアルル達3人は、リュカが居るであろう客室の前で躊躇い戸惑っている。

理由は…聞こえるからである！

安普請の宿屋な為、客室内の音がただ漏れなのだ！

そして、その客室内からはベットの軋む音と女性の喘ぐ声が聞こえてくる…

「何…あの人！？本当に女ナンパして部屋に連れ込んだの？」

呆れる少女二人とは別に、リュカの行いに怒りを感じる少年。

真面目な旅であるにも拘わらず、常に不真面目な大人のリュカが腹

立たしく思い、思わず客室の扉を勢い良く叩き開けるウルフ！

「アンタいい加減にしろ…よ…！？」

一言で言うと、竜頭蛇尾。

ウルフは威勢良く怒鳴ったのに尻つぼみで言葉をなくしていった。室内にいたのはベットに仰向けで寝そべる裸のリユカ…

そしてリユカの上で裸で腰を振る一人の女性…

ウルフと女性は目が合い互いに硬直する。

「シ、シスター・ミカエル…」

絞り出す様にウルフが呟いた…

「きゃー！！！！」

室内に響き渡るシスター・ミカエルの叫び声！

慌てて扉を閉めるウルフ！

・
・
・

それから1時間…

ウルフは茫然自失で喋る事が出来ない。

アルルはシスター・ミカエルの事をハツキから聞く事に…

シスター・ミカエルはアリアハンの教会で勤めるシスター。

髪はキレイで長いブロンド。瞳は青く肌は褐色。小柄ながら胸が大きい。

教会が運営する孤児院で子供達に人気のシスターである。

そしてウルフの憧れの女性でもある…

やっと服を纏い客室から出てきたリユカ。

その後ろから躊躇いながら出てくるシスター・ミカエル。

シスター・ミカエルはハツキとウルフに誰にも言わぬ様懇願する。

リユカは若者3人に、先に外で待つ様促すとシスター・ミカエルにキスをして一時の別れを告げる。

「ミカエルさん。またアリアハンに来る事があつたら貴方の元へ現

れてもいいかな？」

「はい。リュカさんに会える日を楽しみにしてます」
そして二人は再度キスをして別れた。

このやり取りを物陰から覗く3人の若者。

「いや〜…メングメング！マジ僕の好みだったからさあ〜…ちよ〜
燃えちゃってさ！全然寝てないよ！」

シスター・ミカエルと別れたリュカはアルル達と合流し、ヘラヘラ
状況を説明する。

「おい！！シスターとは何処で知り合っただよ！！」

憧れの女性の閨事を目撃してしまったウルフは、半ば八つ当たり気
味にリュカへ言葉を叩きつける。

「何言ってるの！？シスターに出会うには教会に行くしかないでし
よう？」

ウルフの怒気を含んだ言葉に、不思議そうな顔で答えるリュカ：

「リュカさんは教会でシスター・ミカエルの事をナンパしたんです
か！？」

シスター・ミカエルの事を知っているハツキは信じる事が出来ず、
思わずリュカに問いつめてしまう。

「あ…あり得ない…あの真面目なシスター・ミカエルが…」

「ふざけんなよ！！アンタ、シスター・ミカエルに何て事してんだ
よ！！シスターに謝れ！！謝れこのヤロー！！」

「ふざけているのは君だ！ウルフ…」

ウルフの悲痛な叫びに穏やかに話しかけるリュカ。

「もし僕がミカエルさんを力任せにレイプしたのなら、ウルフの言
い分は尤もだけど…僕は口説きはしたが、強制はしてない！今のウ
ルフの言い分はミカエルさんの自由意志を軽視している事になる」
リュカはウルフの目を真っ直ぐ見つめ優しく語り続ける。

「ミカエルさんは自由なんだよ…自分で考え、自分で決めて行動す
る事が出来るんだよ。それを忘れちゃダメだよ！」

リュカに先程までのチャラさはない。

だからこそウルフの憤りは大きくなる。

「うるさい！黙れよ！！お前みたいなチャライ男が、シスター・ミカエルの事を偉そうに語るなよ！！」

そうリュカに吐き付けると、逃げ出す様に町の外へ出て行ってしまった…

「ちょっと！一人で町の外に出ては危険よ！！」

アルルの叫びも思春期の少年の心には届く事は無い…

まだ碌に冒険をしていない魔王討伐一行…

まともに冒険の旅は出来るのだろうか…？

青春の憤り（後書き）

やっちまったよ、この男！

どうすんだよ！

純真無垢な少年少女に悪影響だよ！
なんでこんな奴が主役なんだよ！

おとし

<アリアハン近郊>

ウルフは走る。

ひたすら走る。

逃げる様に走る。

いったい何から逃げているのか…

旅の仲間からか…

憧れの女性を寝取った男からか…

それとも憧れの女性の自由意志を蔑ろにした自分からか…

もう、何故走っているのか、何故逃げているのか分からないでいる。

そして…ここが何処かも…

気が付けばモンスターに囲まれていた！

大がらすや一角ウサギ、そしてオオアリクイに…

ウルフは慌ててメラを唱える！

メラは一角ウサギに命中！

しかし隙を突かれオオアリクイの爪がウルフの腕を切り裂く！

あまりの激痛にその場に倒れ込むウルフ…

そしてウルフ目掛け突撃してくる大がらす！

何とか身を振り大がらすの攻撃をかわす！

直後、一角ウサギの角がウルフの太腿に突き刺さる！

ウルフは死の恐怖を憶えた。

自分一人では戦う事も逃げ出す事も出来ない…

大がらすが再度ウルフの瞳目掛けて突撃をしてくる！

今度は避けられない…

死ぬ！そう思った瞬間！

「バギ」

強烈なつむじ風が巻き起こり真空の刃がモンスター達を切り裂いてゆく！

「ふう…間に合って良かった」

声のする方を見ると、優しい表情のリユカが近付いてくる。

「……………今の…アンタがやったのか…？」

「まあ、一応…」

リユカはウルフの側にしゃがみ込むと腕と足の傷の具合を確認する。

「リユカさんて魔法使えたんですか!？」

リユカの後ろから現れたアルルが驚き質問する。

「う〜ん…まあ、一応…」

ウルフはリユカから目が離せないでいた。

リユカのバギはウルフが知っている…見た事があるバギとは桁が違っていた…

「ベホイミ」

ウルフの傷が完全に治る。

痛みも跡も残らずに！

「べ、ベホイミって高度な治癒魔法じゃないですか!?!?そんな魔法まで使えるんですか!?!？」

更に追いついたハツキも驚きを隠せないでいる。

「え〜と…まあ、一応…調子が良ければ…？」

森を出て街道に戻り一旦落ち着いた一行は一斉にリユカへ質問をぶつける！

「何であんなに威力のあるバギを使えるんだ!?!」「何で魔法を使える事を黙ってたの!?!」「僧侶でも相当修行を積まないと使えないベホイミを何で使えるんですか!?!？」

等々…

「落ち着いてみんな…一人ずつ答えるから」

「じゃあ俺の質問。リユカのバギは威力が凄すぎる!何で?」

「分かりません!次、アルル」

「何で魔法使える事黙ってたの？」

「言ったら戦闘に参加しろって言われるから！絶対参加したくないもん！次、ハツキ」

「ベホイミってかなり修行しないと使えないと思います。どうして使えるんですか？」

「気付いたら使えてた！以上、質問タイム終わり！！」

リユカは強制的に質問を打ち切る。

「ちよつと勝手「そんな事よりウルフ！！」

真剣な瞳に切り替わるリユカ。

「ウルフ！一人で町の外に出たら危ないだろ！アルルもハツキも心配したんだぞ！」

「う…：そ、それは…だって…あの…」

リユカは少し屈みウルフと同じ目線で見つめ続ける。

「…：…：ごめんなさい…：…」

「うん。良い子だ！」

リユカはウルフの頭を少し乱暴に撫でる。

本来ウルフは子供扱いをされるのが大嫌いであるのだが、相手がリユカだと何故か怒りが湧いてこないのである。

「ごめんな…：ウルフ…：ミカエルさんに惚れてるなんて知らなかったからさあ…」

「い、いや…：そ、そんな…：惚れてるって言うか…：その…」

ウルフは顔を真っ赤にして俯く…

そして、それを年上の女性二人がニヤけながら見守る。

「僕にも経験があるんだ…：憧れてた女性の閨事を目撃しちゃった事が…」

「本当に！？」

若者3人は、思春期特有の興味心からリユカの話に耳を傾ける。

「僕が幼い頃住んでいた村に、フレアさんと言うものっそい美人のシスターが居たんだ。でもある日フレアさんと見知らぬ男が、物置小屋でエッチしている所を見ちゃってね…：シヨックだったなあ…」

「それで…リュカさんはどうしたの？」

まさに同じシチュエーションのウルフは、心のモヤモヤを打ち払いたいが為に続きを急かす。

「うん。男の方に石でもぶつけてやろうと思って後を付けたんだけど、見失っちゃってさ…それ以来そのヤローには会った事ないよ」

「じゃあ…そのシスターとはどうしたの？」

「最初は気まずくてさ…余所余所しくしちゃってさ…そうしたらフレアさん…涙目で僕に謝って来たんだ…『私リュウ君に嫌われる様な事しちゃったかな？』『ごめんね。謝って許して貰えるか判らないけど…』って…」

「え！？シスターの方が謝っちゃったの？」

「そうなんだ。僕、最低だよ…こんなにも優しいフレアさんの心を傷つけてしまったんだ…フレアさんは何も悪くないのに…」

アルル、ハツキ、そしてウルフはリュカの切々と語る過去に胸が苦しくなる思いで聞き入っていた。

「だからウルフ！どんなに憤りを感じても、大好きな人にその感情を見せてはダメだよ」

《そうか…シスター・ミカエルはリュカさんの優しさを一目で見抜いたんだ…だから好きになっちゃたんだ…俺もリュカさんみたいな男になれる様頑張ろう！！》

ウルフは多少の誤解を脳内で補正し、リュカを目標の男へと昇華させてしまった。

果たしてウルフに幸せは訪れるのでしょうか………？

昨日とは違い、戦闘（リュカ抜き戦闘）にも慣れてきた一行は日が暮れてしまった事もあり、野営の準備を行っている。

戦闘以外の事となると俄然張り切る男リュカ…伊達に幼少期より旅慣れしてきた訳ではなく、テキパキと野営の準備を進めて行く。

野営などした事のない若者3人は、ただ呆然と見続ける事しか出来ず、アルルは思わず…

「戦闘も張り切って戦ってくれと助かるのだけど…」
まあ…言うだけ無駄であるが…

全ての準備が整い、焚き火を囲い食事を始める。

そして今更ながらリュカが疑問を口にした。

「ところでさ…今、何処に向かっているの？」

「言ったでしょ！レーベよ」

「そこに何があるの？」

「……………リュカさん…私達の旅の目的を理解してる？」

「うん…概ね…」

ほぼ理解していないリュカにアルルが優しく説明してくれた。

「私達は魔王バラモスが何処に居るのか分かってません。ですから、世界中を旅してバラモスの居場所を探し出そうと思ってます。その為にはこのアリアハン大陸から出なければなりません。そしてこの大陸の東に『いざないの洞窟』があります。その奥にはロマリア大陸に繋がる『旅の扉』があります。いま、そこを目指しています」
「へー…じゃ何でレーベに行くの？」

「アリアハン城からいざないの洞窟まで戦闘をしなくても1週間はかかります。その間ずっと野宿はイヤでしょう？だから立ち寄りるんです」

「そっか…レーベには…美人が居るかな？」

《ここに居るじゃない！》

アルルは叫びそうになりながらも冷静な瞳で見据える事で大惨事を回避する事が出来た。

そして夜は更け、各々眠りの体勢に入る。

アルルとハツキはリュカが、寝ている自分の側に来るのではないかと期待を持って横になった為、この晩は一睡もする事が出来なかったらしい…

果たして二人の乙女が、女に変身する日は来るのであろうか…
そして、その担い手は…

レーベ

<レーベ>

アリアハンの城下町を出て3日。

夕方と呼ばれるにはまだ早い時間、アリアハン大陸にある小さな村『レーベ』に一行は到着した。

レーベ…この村には目を引く大きな建物も、人々が集まる酒場も無い、極めて質素な村…それがレーベである。

アルル一行はひとまず宿を確保してから村内を見回り出す。

若者3人が、武器屋や道具屋を見て今後の旅に必要な物を購入している中、若干1名は若い村娘をナンパする為、さほど広くない村を探索し歩いている。

「何であの人なんなに元気なの…?」

「俺が知るかよ!アルルの方が付き合いは長いんだろ!」

「数時間の差よ!」

リユカのバイタリテイに疲れ切った3人は、早々に宿屋へ戻り旅の疲れを取り去る事に専念した。

翌朝…

まだ人々が起き出さない時間に、目が覚めてしまったアルルは、外の空気を吸いに宿屋から近くの広場まで散歩に出かける。

そこで見た物は…朝靄の中佇む一人の青年の姿だった…

紫のターバンを巻くその青年は、広場の中央に佇み周囲に寄ってきた小鳥達と楽しそうに会話をしている。

その幻想的な光景に見入っていた少女に気付いた青年は、優しく微

笑み少女に語りかける。

「やあ。おはようアルル。今日も可愛いね」

「お、おはようリュカさん…早起きなね」

アルルも分かっではいるのだ！

リュカにとつて『可愛いね』や『キレイだね』は日常挨拶の内なのだ…

それでもこの素敵な青年に、素敵な笑顔で言われると期待をしまう…その言葉の裏を…

アルルはまだ出会って数日のリュカにどうしようもない恋心を抱いてしまっている。

少しでもリュカと一緒にいたい…一緒に会話をしたい…そう思うも、これまで年頃の女の子としての生き方をしてこなかった為、何をしたいのか、何を話せばいいのか分からないのである。

そして永遠とも思える沈黙の後、絞り出した言葉が…

「リュカさん！私に剣の稽古をつけて下さい！」

その日から早朝…可能な限り…アルルとリュカは手合わせをする事となった。

無論、リュカは最初は断つたのだが…アルルの若さ溢れる気迫と、リュカ元来の面倒見の良い性格から、済し崩し的に了承してしまったのである。

キン！ガツ！キン、キン！ガツツ！！

小さな村に早朝から響き渡る金属音。

アルルの銅の剣と、リュカのドラゴンの杖とがぶつかり合う音。

状況は素人が見ても一目瞭然。

リュカの圧勝である。

全力で打ち込むアルルに対し、涼しげな表情で全てを去なすリュカ…

「はあ、はあ、はあ…」

両膝に両手を乗せ肩で息をするアルル。

「今日はもういいだろ？疲れちゃったよ」

疲れるところか汗一つかいてないリュカ。

「『ずるい』」

そして二人の手合わせを見つめ、不平を言うハツキとウルフ。

「アルルだけズルイです！私もリュカさんと手合わせしたいです」

「俺も！」

「ちょ、僕もう疲れたから…あ、明日からね…明日の朝からにしようよ！」

結局、パーティー全員と朝の特訓をする事になったリュカである。

<アリアハン大陸>

一行は東に位置するいざないの洞窟を目指しレーベを出立する。

途中、何度と無くモンスターの襲撃に会い、戦闘を繰り返す。

無論、3人で…

しかし3人共理解し始めていた…リュカの圧倒的な強さを…

そしてリュカの強さに頼る事の恐ろしさを…

魔王討伐を目的とするアルル達にとって、リュカ一人に依存しては強敵を相手にした時にパーティーとして戦闘が出来なくなるのではないかと言う事の恐ろしさを…

だが…同時に安心もしている。

本当に危険に陥った時はリュカが助けしてくれるであろうと…

根拠はないが3人共、そう信じているのである。

毎度の如く、野営の準備になると張り切るリュカ。

しかし若者3人も手慣れたもので、薪を集めたり食事の準備をしたりと、冒険者として成長していつてる。

そして手慣れてくると生まれるのが余裕で、余裕が出来る则会話も

と言う、我欲丸出しの思考に到達してしまった少女二人。

「じゃ、じゃあ……もし元の世界へ戻れなかった場合は、この世界で新たな家庭を築くつもりですか？」

アルルの希望を込めた質問に……

「イヤ……帰れない事は無いと思うよ……なんだかんだ言っても僕の周りの人々が躍起になって僕を連れ戻そうと画策するだろうから……僕の周囲には結構凄い人々が居るからね！」

リュカの答えにかえって闘志を燃やす少女二人。

そんな空気を読めない男二人は、リュカの思いで話で盛り上がる。

「……………でね、プサンはね……………」

そして夜は更ける。

アルルとハツキはどのようにリュカの心を掴むのか……

あのチャライ男の心を掴む事が出来るのか……

……………ムリっぽくない？

レーベ（後書き）

一応アルル達の装備を紹介します。

アルル

銅の剣

旅人の服

ハツキ

こん棒

旅人の服

ウルフ

檜の棒

布の服

リュカ

ドラゴンの杖

王者のマント

アレ？

紹介する程じゃなかったね。

こつ言つの不要ですか？

行き止まり

< いざないの洞窟 >

小さな湖の畔にいざないの洞窟への入口は存在した。

アルル達は警戒しつつも洞窟内部へ下りて行く。

暫く進むと何も無い行き止まりの空間に出た。

そして、そこには一人の老人が：

「あの…お爺さん。この洞窟には他の大陸に抜ける事の出来る『旅の扉』があると聞いて来たんですが…それは何処ですか？」

アルルが躊躇いがちに訪ねると：

「お前さん方：『魔法の玉』はお持ちかな？持っていないのであれば、これより先へは進めんよ。出直してきなさい」

「あ、あの！魔法の玉って何ですか？」

「…ふう…そんな事も知らなくてここまで来たのか…」

《ムカー！！何なのこの爺は！人が下手に出てりゃつけ上がりやがって！》

「あ！僕、聞いた事あるよ。確かレーベにある様な話だった…かな？」

アルルが老人に対して暴言を吐き出す直前、リュカが遮り話を始める。

「リュカさんは何でそんな情報を持つてるんですか？」

「うん。レーベで女の子をナンパしてたら教えてくれた。でも『僕の方が凄いなだよ』なんて事言ってたので、詳しい事は知らない」

一行はリュカの言葉を信じ、取り敢えず洞窟を後にする。

洞窟を出た所でアルル達は多数のモンスターに囲まれてしまった。

バブルスライム3匹、魔法使い4体、サソリ蜂3匹…

「ぐつ！ちよつと数が多いわね！」

「愚痴つてもしょうがないだろ！ともかくやるしかない！」

「バブルスライムは私が『ニフラム』で何とかしますから、他をお願いします！」

「じゃあ、私が魔法使いでウルフがサソリ蜂ね…いける？」

「やるしかないだ、魔法使いは僕が相手をしよう」

「…え！？」

普段、戦闘に参加しないリュカが自ら戦いを申し出た！
つまりそれ程この状況はピンチなのである！

「ほら！呆けてないで…行くぞ！」

慌てて各々の相手に攻撃を開始する。

ウルフが新たに憶えた魔法、ヒヤドで1匹のサソリ蜂を凍り漬けにすると、アルルが直ぐさま2匹のサソリ蜂を切り倒す。

ハツキもまた、憶えたてのニフラムでバブルスライムを消し去る。

その間、時間にして1分弱…

各々の相手を倒しリュカの戦闘を見学しようと振り向くと、戦闘前と同じ状況で立っているリュカが…

しかし、魔法使い4体は既に倒されていた…

《い、いつの間に…リュカさん、強すぎて参考にならない…》

3人共、全てではないにしろ戦闘中リュカの動きに注意をしていたのに、戦った痕跡を残さぬまま4体もの敵を瞬殺してしまったリュカに驚きを隠せない。

「さあ…一旦レーベに戻るんでしょう？誰かルーラとか使える人居る？」

「ル、ルーラなんて高位魔法、使える訳ないよ！それにルーラは術者一人しか移動出来ないんだから！」

ウルフが少しの憤慨を込めて説明してくれる。

リュカの居た世界ではロストスペルであったルーラだが、この世界では普通に存在する様だ…

しかし、かなりの修練を積んだ者にしか習得できない高位魔法で、

基本的には術者のみの有効範囲らしい…

「じゃ、サクサク行きますか！レーベまで5日くらいかかるし…」

5日という具体的な数字に、げんなりする若者3人…

アルルは情報収集の大切さを骨身に染みて理解する事となった…

<レーベ>

辺りが暗闇に覆われる頃、アルル一行はレーベに到着した。

早速宿の確保に向かったのだが、生憎部屋が埋まっっていて大部屋を1つしか確保出来なかった。

兎に角疲れを癒したアルル達は大部屋で了承。

部屋に着くなり深い眠りに旅立った……リユカ以外は…

朝、アルルが目を覚ますと…リユカが居ない！

また外で小鳥と戯れているのかと思ひ広場へと向かう。

しかし居ない…

村内を見回ると村外から帰ってくるリユカを発見する。

「リユカさん、何処行つてたんですか！」

慌てて近寄り声をかける。

少し驚いた表情をするリユカ。

そしてリユカからは微かに女性物の香水の香りが…

「ちよ、ちよつとそこまでお散歩？」

《散歩な訳ない！きつと女と会っていたのよ！でも何処で？村の外に居るの？いえ、考えられない…じゃあ何処で？きつと聞いても答えないだろうなあ…》

腑に落ちない点多々あるが、アルル達は朝の鍛錬を終え村内で情報収集をする。

程なく魔法の玉を制作していると言う老人の家を突き止めた。

向かう一行：

コンコン

アルルは丁寧なノックをして住人を呼び出す………が、出てこない。

「留守……かしら？」

「いや……気配はするよ。人嫌いって言われてたからね……居留守だよ！」

ゴンゴンゴン

今度はリュカが力任せにノックする。

「おい、爺！居んのは分かってたんだ！大人しく出てこい！出てこないとドアぶち破って乗り込むぞ！」

ゴンゴンゴンゴン……ガチャリ！

鍵が開く音と共にドアが開き老人が顔を出す。

「やかましい！！いったい何の用じゃ！！用が無いなら帰れ！！」

「痴呆症ですか？用があるからノックしたんです。用が無ければこんな爺の面など見たくない」

この間、リュカの表情はいつも通りの優しい微笑み……若者3人はあからさまに引いている。

「……………で、何用じゃ！」

「うん。魔法の玉を頂戴」

「何で見ず知らずのお前等に魔法の玉をやらにやならんだ！」

リュカと老人の険悪なムードは続く……（老人の一方的な険悪ぶりですが）

「魔王バラモスを倒す為には必要なんです。お願いします、ご老人！」

堪らずアルルが口を挟む。

「ふん！お前等なんぞにバラモスが倒せるのか！？無駄な事に儂の発明品を渡すつもりはない！」

「そんなのやってみなければ分からないだろ！最初から諦める奴は嫌いだ！」

……
長い沈黙が続く……

「良いじゃろ…交換条件を達成したら魔法の玉をくれてやる」

「あ、ありがとうございます！」

「例を言うのはまだ早い！達成してからにせい！」

「んで、条件って？」

「儂はな『盗賊の鍵』という物を作ったのだが、『バコタ』という盗賊に盗まれてしまったのだ。それを取り返してこい！この玄関もその鍵で開く！取り返したのなら勝手に入って来るが良い！その時は魔法の玉をくれてやる」

ボタン！ガチャリ！

一方的に条件を言って、また引きこもる老人。

「勝手だなあ」

行き止まり（後書き）

あちゃ「今日はリュカさんに質問です。何でルーラを使える事を黙っていたのですか？」

リュカ「だって言ったら良い様に利用されるじゃん！ちよーめんどくせーじゃん！タクシーじゃねえっの！！」

あちゃ「はい。基本、自分の能力を明かさないめんどくさがりやの主人公、リュカさんでした！」

では、次話もお楽しみに！

空白の二昨晚（前書き）

今作品での勝手に設定。

ルーラ及びキメラの翼は、使用者単体に効果がある魔法（アイテム）です。

ですので、4人がキメラの翼で移動する場合、キメラの翼が4つ必要になります。

今後そのつもりでお読み下さい。

空白の一昨晚

<レーベ>

アルル達は宿屋へ戻り作戦会議を行っている。

「さて、何とか魔法の玉の所在を掴んだけど…今度はバコタね！」
アルルが切り出す。

「バコタって言えば、アリアハンで名を轟かす盗賊だろ…捕まえるのは難しくないか？何処にいるのかも分からないし…」

ウルフが溜息混じりで意見を言う。

「バコタならアリアハン城の牢屋に居るよ」

リュカが状況打開の一言を発する。

「…な、何でそれを知ってるの!?」「」

驚き詰め寄る3人…

「まあまあ…さっさとアリアハンへ行こうよ！ほら、『キメラの翼』も用意しておいたから」

アルル達は納得しきれないまま、リュカに促されアリアハンへと舞い戻る。

<アリアハン>

一行はアリアハン城下を城に向かい歩いて行く。

すると前方からうら若いシスターが一人駆け足で近付いてくる…胸を盛大に揺らしながら…

「あ！シスター・ミカエル!!」

嬉しそうに声を上げるのはウルフ。

しかしシスターはリュカに抱き付き話し出す。

「リュカさん！昨晚はありがとうございます。それと…楽しかった

です……」

シスターは頬を赤らめ語り出す。

不満顔のウルフ。

シスターからは、今朝リュカから漂ってきたのと同じ香水の香りが……

《まさか……わざわざキメラの翼を使ってアリアハンへ戻ったの？
キメラの翼だって、ただじゃないのよ！……でもおかげでバコタ
の情報が手に入ったし……でも……》

やはり納得のいかない3人を伴い、シスターと別れ城の地下牢へと
向かうリュカ。

「あー！テメーは昨日の晩の！！テメーのせいで掴まっちゃったじ
やねえーか！」

リュカは鉄格子越しにバコタと対面する。

「何言ってるんだよ！ミカエルさんの財布をすったのが悪いんだろ！」
どうやらリュカは、昨晚シスター・ミカエルとデート中にバコタと
遭遇し、財布を盗む現場を押さえた様である。

「まあいい……そんな事より、盗賊の鍵を返してよ。本来の持ち主か
ら依頼を受けたんだ！」

「あ……？盗賊の鍵？……ああ！アレなら『ナジミの塔』の爺に騙
し取られたよ！」

「ナジミの塔？なんだそれは？馴染みの店みたいなものか？行きつ
けか？……じゃあ、その店の場所を教えるよ！」

「店の名前じゃねえーよ馬鹿！そう言う名前の塔があるんだよ！」

「変な名前！バコタの次くらいに変な名前……！」

「うるせーよ！サッサと行けよ！そして死ぬ！」

「なんだ？悪い事して掴まったクセに、反省の色が見えないぞ！お
仕置きしちやる！」

そう言うところリュカは鉄格子の隙間から左手を入れバコタに向かって
魔法を唱える。

「バギ」

ヒュウ、ドゴー！

「うごっ……！」

リュカから発せられたバギには殺傷能力は無い、強力な風の固まりがバコタにぶち当たった！

「ほぐれ、バギ、バギ、バギ！」

「がはっ！……ごほっ！……ちよ、ごめんなさい！も、止めて……うごっ……！」

「うん。勘弁してあげる。悪い事したら反省するのが常識だからね！もうダメだよ、悪い事しちゃ」

「凄……魔法を改造しちゃった……」

只今バギの魔法を懸命に修練中のハツキは、リュカの魔法の才能に心底憧れ、恋心と合わさり、とんでもない感情へと変化し始めている……

大変危険な兆候です！

「んで……そのナジミの塔って何処にあんの？」

「は、はい……アリアハンの西の小島に……あ！でも大丈夫です！更に西の岬に洞窟があって、そこからナジミの塔へは繋がってます！」

「うん。ありがとう。じゃあ、僕達行くね。もう悪い事しちゃダメだよ。出所したら、全うに生きるんだよ」

リュカのバギが堪えたのだらう低姿勢なバコタの情報を元に、件の洞窟を目指すアルル一行。

<ナジミの塔への洞窟>

ジメジメと嫌な雰囲気を放つ洞窟を、度重なる戦闘に勝利しながら突き進む一行。

イヤ……言い直そう……度重なる戦闘に勝利する3人と戦闘をしない1人の一行……

更に言えば戦闘しないだけでなく、終始歌を歌いモンスターを呼び寄せるリュカ！因みに曲目は『YOUNG MAN』である！

「ちょ、戦闘しないのはいいとしてもさ、歌うのは止めてよ！」
肩で息するウルフの悲痛な叫び。

「あははは！以前、息子にも同じ事言われた！」

「息子さんも苦勞してるんですね…」

「でもさ…若い内の苦勞は買ってもしろって言うじゃん！良いんじゃないね？」

本人が聞いたら間違いなく激怒するであろう発言をするリュカ。

会った事もないリュカの息子に、心底同情するウルフ。

「じゃあ…そこまで言うリュカさんは、どんな苦勞をしてきたんですか？」

単に歌われるより静かに語らせておく方がマシと思ったアルルの発言は、思わぬ重い話を引き出す結果へと繋がった。

リュカの幼少期の苦勞話…

目の前で父親を…自分が人質になった為殺された話から奴隷時代の10年間…

口調は軽く、爽やかに話すものの、洞窟内と言う雰囲気と話の内容がマッチしてしまい、号泣し始める3人…

アルルにしては、幼い頃より同年代の女の子と遊ぶ事も許されず、勇者としての重荷を背負わされ、この世で最も不幸だと思っていた…

ハツキとウルフも同様に、幼い頃から孤児院で生きてきた自分ばかりの不幸だと思いこんでいたのである。

しかし、それでも…親を目の前で殺された事も無ければ、鞭で打たれ過酷な労働を強要された事も無い。

果たしてリュカと同じ人生を過ごしたら、リュカと同じように明るく爽やかな性格になっていたであろうか？

そう思った時、リュカに対する尊敬の度合いが飛躍的に上昇してしまおう若者達…

道を踏み外す事の無いよう祈りたいものである…

空白の一昨晚（後書き）

ルーラ&キメラの翼の件…

クレーム等は受け付けません。

容認をお願いします。

だって…ルーラはともかくとして、キメラの翼って都合良すぎなんですよ！

安価であんな凄い能力って…

困るんですよ！

ナジミの塔

<ナジミの塔>

リュカの過去話に目を真つ赤に腫らす程泣いてしまった若者3人と、そんな事気にもせず歌いまくりモンスターを寄せまくるリュカ達の一行は、洞窟を抜けナジミの塔の1階まで到達する事が出来た…半日以上使って…

外には黄昏が訪れ、アルル達も疲労のピークに達した為、体を休ませる事に意見は一致した。

「うゝん…何処か身を寄せて休める所は無いかな？」

元気だけは有り余っているリュカが率先して塔の1階部分を探索して行く。

すると、また地下へと下りる階段があり、その先から人の気配が漂ってくる。

もしかしたらバコタが言っていた老人が住んで居るのかと思い、リュカは3人を抱き抱えるように連れ込んだ。

「いらっしやい」

しかし、其処に居たのは老人と呼ぶにはまだ早い、中年の男性が一人…

にこやかな顔でリュカ達の到来を歓迎する。

「……………あの…ここは何ですか？」

「ナジミの塔特別施設の宿屋だ！お一人2ゴールドでいつでも大歓迎だ！」

「失礼を承知で聞きますが…何でこんな所で経営を？」

さすがのリュカも慎重に質問を続ける…

「良い質問ですねえ！」

ミスター・ニユースか貴様は！と言つツッコミをぐつと我慢するリュカ。

「此処ならライバル店もなくて良いと思っただけど…ライバル店どころか客自体が居ないんだよね！盲点だったよ」

《ヤバイ、コイツ馬鹿だ！まともに相手しない方がいい！》

「大変ですね…4人泊めてもらえますか？」

「もちろんだとも！4人で8ゴールド。前払いで良いかい？」

「食事は…期待しない方が良いでしょう？」

「馬鹿にしちゃいけないよ！こう見えても若い頃は料理人を目指して修行したんだ！周りは海に囲まれているし、庭では野菜も作っているんだ！私の料理だけを目当てに来る客も居るくらいなんだよ！」

《じゃあ普通に町で経営してもやっていけるだろうに…》

「へー…じゃあ、食事付きでお願いします。…あと幾ら払えば？」

面倒事を嫌うリユカは突っ込まない。ただ流すのみである。

「大丈夫！宿泊料に入っているから」

ウインクする店主に苦笑いのリユカ…

ともかくは疲れを癒す事が出来るのはありがたい…

思いがけずベットで睡眠をする事の出来たアルル達は、朝から元気にナジミの塔攻略へ出立。

「あの宿屋…料理の腕前は一級品だったね」

リユカの感想に全員頷く。

「絶対、営む場所…間違えてるよね！」

またも全員頷く。

さて気を取り直してナジミの塔攻略！

この塔は2階以上の階に外壁が存在せず、吹き曝しの空間が存在する。

強烈な海風吹き込むそのエリアは、大変危険で気を抜くと外まで放

り出されそうになる。

3人共リュカにしがみつく様に塔内を移動して行く。

「しかしハツキは結構胸が大きいね！今度、直に見せてもらいたいよ！」

リュカ以外の男性が発した言葉なら、間違はなくハツキの鉄拳が炸裂していたであろう。（意外にハツキは腕力があるのだ！）

しかしリュカの発言となると対応が変わる。

更に体を押し付けリュカの腕に胸を押し当てる。

程なく風の吹き込まない空間へ入りアルルとウルフがリュカから離れる。

しかしハツキはリュカの腕にしがみついたまま離れない。

「…あの…ハツキさん？…離れて…」

「でも…リュカさん、オツパイ好きでしょ！？」

「うん。大好きだよ！でもね…今は歩きづらいから…離れて…」

そしてハツキも、渋々離れる…

リュカに責任は取れるのでしょうか……………？

『フロツガー』や『人面蝶』と言ったモンスター達と幾度も戦闘をし、アルル達は最上階へと到達した。

其処には一人の老人が…

狭いが整頓された綺麗な部屋…

老人が一人で暮らしているとはいえ、明るい内装の部屋。

リュカは思わず叫ぶ。

「何だ此処！何でこの塔は人気なんだ？そんなに暮らし易いのか？」

「ふおおおお…人嫌いの老人からすると暮らし易い事この上ないぞ！」

老人はリュカの発言に気分を害した風もなく、楽しそうに笑い出す。

「あの、ご老人…実は…」

アルルが意を決して老人に話しかける…が、

「これじゃー！」

アルルの言葉を聞く前に、懐から1本の鍵を取り出しアルルに見せる。

「僕は夢でお前さん達に盗賊の鍵を渡すのを見たんじゃ…ほれ、持って行くが良い」

「ありがとうございます」

「うむ。礼はいい…早う世界を平和にしてくれ…」

アルルは力強く頷くと老人の元を後にする。

これで魔法の玉を手に入れれば、世界へ羽ばたく事が出来る！
打倒バラモスという目標へ近付く事が出来る！

アルル達の決意は強まった！

アルル、ハツキ、ウルフ、3人はそれぞれ強まった決意を胸に、塔を下りて行く…

リユカは…面倒事に首を突っ込んだ事に少々後悔をしている…
何でこの男がもてるのか些か疑問である？

<レーベ>

バン！

「爺！約束通り盗賊の鍵を取り戻してきたぞ！玉よこせ！」

勢い良くドアを叩き開け不躰に叫ぶリユカ…

「騒がしいのお…ほれ、魔法の玉ならその箱の中に入っとる。

勝手に持つて行け！」

そう言い顎で部屋の隅にある箱を刺す老人。

アルルは箱に近付き開けようとする…が、開かない！鍵がかかって
いる。

「あの！開かないんですが！」

「鍵がかかったままじゃ開く訳が無かるう！開けて取り出せ！」

「……………あの…鍵は？」

「何じゃ！？取り戻したんじゃ無いのか？それで開けてサッサと立

ち去れ！」

「ん？ちよつと待て爺！それじゃ何か…この鍵が無かったら魔法の玉を取り出す事が出来なかつたのか！？」

「それがどうした！？」

「だったら最初から言えよ！『鍵を盗まれて魔法の玉を渡せないんですう』って！」

「ふん！どつちでも同じじゃろ！魔法の玉も手に入ったんじゃ、サツサと去れ！目障りじゃ！」

「このクソ爺…言われんでも立ち去るわ、ポケエ！ほれ、鍵返すよ！」

リュカは老人の目の前に盗賊の鍵を晒す。

「いらんわ！元より世界を救う者達に渡すつもりで造つたんじゃ！持つてけ、馬鹿ガキ共！」

「……………爺さんアンタ……………」

リュカに先程までの剣幕はなく、老人を見つめる。

「もう用は無じやろ！こんな所で時間を潰してないでサツサと世界を平和にして来い！」

アルル達は老人に追い出されるように家から出る。

「あのお爺さん…結構良い人…みたいですね…」

ハツキの感想にリュカは、

「口が悪い、ムカつく！」

そう少し笑いながら答える。

随分と回り道をしたが、やっと魔法の玉を入手した一行。

これでいざないの洞窟の奥へ入る事が出来る…はず。

世界へ羽ばたける事を信じて、今日はレーベの宿屋で疲れを癒す。

リュカを除いて…

…あの男は今夜もコツソリ、アリアハンへ戻っていた…

そして夜は更け、朝が到来する…

ナジミの塔（後書き）

気が向いたのでアルル達の年齢を紹介します。

アルル 16歳

ハツキ 17歳

ウルフ 13歳

リュカ 25歳？（石化時代を加算すると33歳かな？）

ところで、アルル達の性格って、どんなのがしっくりきますか？

旅の扉

< いざないの洞窟 >

かなりの時間を浪費して再度この行き止まりへと戻ってきたアルル達。

此処で番をしているかの様に佇む老人に、魔法の玉を見せつけるアルル。

「どうよ！今度は持ってきたわよ！」

「ふむ…では、魔法の玉を其処の壁にセットして玉から伸びる紐に火を点けなさい」

アルルは言われた通り壁に魔法の玉をセットする。

「火は俺が点けようか？」

ウルフが申し出るが、

「ううん、大丈夫よ！私もメラを憶えたから」

そう言うともメラを唱えて火を点ける。

ジュ~~~~~

そしてリュカが何となく感づく。

「……………なあ、爺さん…あの玉を使った所を見た事はあるのか？」

「壁が崩れて無いだろう！今回が初めてだ！」

「……………！！ヤバイ！！！！アルル、早く魔法の玉から離れる！」

リュカは慌ててアルルに近づく！

そしてアルルの身体を抱き寄せ魔法の玉を背に蹲る！

「みんなも伏せろ！！！！！」

ドガンンンン！！！！！！

強烈な爆発音が洞窟内へ響き渡る！

・
・
・

「み、みんな無事？」

耳鳴りが止まない状態のハツキが無事を確認する。

「お、俺は大丈夫……」

「俺も……大丈夫じゃ……」

そして尤も爆心地に近かったリュカとアルルに視線を向ける……

リュカはアルルに覆い被さるようにして動かない……

慌ててハツキとウルフは駆け寄る！

「大丈夫！？しっかりして！」

「わ、私は大丈夫……」

リュカの下にいるアルルが無事を告げる。

そしてリュカもノツソリと起きあがる！

「……ふ……」

「……ふ？」「……」

リュカが何かを言おうとしている……

「……ふ……ふざけんな！何が魔法の玉だ！爆弾じゃねえーか！……だつたら『魔法の爆弾』とか『爆弾の玉』とか『爆』の字を付けとけよ！……だいたい魔法は全然関係ねえーじゃねーか！……」

リュカの怒りは収まらない。

「……だいたいテメークソ爺！……どういふ物かも分からないで偉そうにしてんじゃねー！死にかけたぞコノヤロー……！」

一緒に被害にあった老人にまで怒鳴り出す。

「ま、まあまあ……落ち着いてリュカさん！」

宥めるアルル。

「ほ、ホラ、リュカさん……道が開けましたよ！」

宥めるハツキ。

「リュ、リュカさん……先を急ぎましょう！新天地には美女が居ますよ……！」

宥めるウルフ。

リュカは怒りが収まらないながらもウルフの『美女』の言葉に反応し、新たに開けた道へ進み出す。

グッジョブ、ウルフ！

いざないの洞窟内部は、所々穴が開いており危険極まりない造りになっている。

そんな洞窟内を進行中、アルルがお礼を言い出した。

「リュカさん。さっきはありがとう。おかげで怪我一つしませんでした」

「うん。アルルが無事ならお礼はいいよ…」

「リュカさんこそ怪我は無いですか？」

「ああ大丈夫：このマントはね『王者のマント』って言ってね、結構丈夫なんだ！『王者』なんて僕には似合わないけどね」

「そんな事無いです！リュカさんにとっても似合ってます！…その…か、格好いいです」

「ありがとう。でも以前、友人が：『王者？お前は違っただろ！』って言ってやがった！」

「その友人て…男の人ですか？」

「ああ、ヘンリーって言う空気の読めない馬鹿だ！」

友人が男だと知って何故か安心するアルル。

そんなやり取りを聞いていてヤキモチを妬くハツキ。

「リュカさん！そのマントは凄いマントなのかもしれないませんが、一応怪我がないか見せて下さい！私が治療しますから！ほら、背中見せて下さい！！」

ハツキは此処ぞとばかりにリュカの服を捲る！

そして強引にリュカの服を捲り出てきた背中を見て言葉を無くす…傷だらけ…リュカの背中では傷だらけなのである。

それも全て古傷…鞭で打たれ、木材で殴られた傷…

「ごめんなあ…酷い背中だろ！？君達若者に見せる背中じゃ無いよね…」

言葉を無くし固まる3人に優しく謝るリュカ。
リュカの過去を聞き、酷い時間を過ごしたと想像をしてはいたが、
証拠の傷を見て考えの甘さに落ち込む3人…
そんな3人を見て元気づけようと歌い出すリュカ。
そして戦闘が始まり、落ち込む余裕を奪い去られる。

幾度かの戦闘をこなし洞窟内を奥に進むと、3人に別れたエリアに
到達した。

進むべき道がどれだか分からない…

「俺は左が怪しいと思うな！」

と、ウルフは左。

「私は真ん中が正解だと思います」

と、アルルは中央。

「うーん…取り敢えず右から攻めませんか？」

と、ハツキは右。

自動的に決めるのはリュカ。

「別に僕はどの道でもいいよ。違ったら引き返せばいいんだし…」

「いいえ、リュカさんが決めて下さい！」

「そうだよ！戦闘は拒否ってんだから、こう言う所で活躍してよ！」

「さあ、選んで下さい！ウルフかハツキか私か！」

「え…じゃあ、ハツキの選んだ道」

リュカは考えることなく選択する。

「何でハツキなんだよ！」

「そうよ！私、勇者なんですよ！」

「リュカさんは私の事が好きなんですよ！ね！？」

不満顔のアルルとウルフ、満面の笑みのハツキ。

そしてめんどくさそうな顔のリュカ。

「別にさあ…好きとか嫌いとかじゃ無くて…オツパイの大きい人を
選びました。以上！」

リュカは不平を言う3人を無視して、自分の選んだ道へ突き進む。暫くすると行き止まりになっており、其処には旅の扉と呼ばれる青く美しく渦巻く装置が存在した。

「うん。やっぱりオツパイの大きさと物事の真実はイコール関係にある」

リュカの意味の分からない納得に、納得のいかないアルルとウルフは他の通路の確認を要求する。
しかし、

「めんどくさいからヤダ！」

と拒否られ、サツサと旅の扉に入ってしまったリュカを追いかける事で断念せざるおえなかった。

旅の扉を抜け洞窟より外へ出た一行は、辺りが夜の帳に包まれている事に驚いた。

「あれ？もう、夜！？早いなあ……」

「本当ね！そんな長時間洞窟内に居たつもりは無かったけど……」

「夜動くのは危険だし、野営の準備をするか……」

リュカの提案は採用され、一行は野営の準備に取り掛かる。

新たなる土地に足を踏み入れた事への感動もなく、ただひたすら休む事だけを考えるアルル達……

リュカの影響か、それとも天然なのか……

別世界より？（前書き）

リユカがDQ3の世界で大活躍(?)をしている間も、DQ5の世界でも色々な事が起こっております。
これはそんなお話です。

別世界より？

<グランバニア>

リュカが本へ吸い込まれてから2時間程が経過したグランバニアの国王執務室では…

リュカの息子のテイミーと叔父で国務大臣のオジロンが、眉間にシワを寄せて黙り込んでいる。

「……………はあ……………困ったもんだ……………」

長き沈黙の後、溜息混じりで口を開いたのはオジロンであった。

「リュカは厄介事を呼び込む体質らしい…」

「あの人が居るがぎりトラブルの種は尽きないでしょう…」

リュカは一応グランバニアの王である…

他国で大臣等が自国の王に対して、このような物言いをすれば不敬罪として処罰されるであろう！

しかしこの国の王はリュカである…

例え本人の前で言ったとしても『あはははは、1個も言い返せない』と言うだけで終わるだろう。

それが良いのか悪いのかは分からない。

それでも、この国の王であるリュカが行方不明になってしまったのは一大事なのである！

バン！！

乱暴にドアが叩き開けられ、王妃のビアンカが入室してきた。

「リュカが本に吸い込まれたというのは本当！？」

一言で言えば不機嫌…それが今のビアンカの表情だ！

「情報が早いですね、母さん。誰が言い触らしたんですか？」

「マリーよ……」

マリーとはリュカとビアンカの次女の事である。

そのマリーがビアンカの後ろからヒョコつと顔を出す。

「はあ…マリーは誰から聞いたの？」

可愛い…既に嫁いだ妹より遙かに可愛らしい妹に、優しく問いただすティミー。

「うん、あのね…私、お父様にご本を読んでもらおうと思って、この部屋の前に居たの。そうしたらお兄様が大声で叫んでいるのが聞こえてきたのよ。だからお兄様が原因よ」

「……………母さんもマリーも他の人には言っていないですか？」

「はい！お兄様！」

「言う訳ないでしょ。それより私の事は陛下と呼びなさい！貴方、一介の兵士なのよ！貴方が身分隠して兵士になるって言ったんでしょ！自分でバラしてどうすんのよ！」

「す、済みません。王妃陛下」

「お兄様怒られちゃったね。元気出して」

ティミーはこの妹が愛らしくて仕方ない！

もう一人と違い、性格が父親に似なかった事を喜ばしく思っている。

「マリーもお兄様と呼んではダメよ！コイツはただの下っ端兵士よ！」

「はいお母様。よろしくね、下っ端さん」

ただ少し…言う事にトゲがあるのが難点だ…誰に似たのやら…

「さて、そんな事より…状況を詳しく説明して下さい」

「……………と言う訳で、気付いた時には国王陛下は本に吸い込まれてました…」

「その本には、その後誰も手を付けて無いのね？」

「はい。吸い込まれたく無いですから…」

ビアンカはティミーの言葉を気にもせず、本のページを捲り始める。

「あーちよつと…母さ…陛下！不用意に触っては危険です！」

「触らなきゃ調べられないでしょ！雁首並べて唸ってても、リユカは戻って来ないのよ！」

ペラペラとページを捲り本を調べるビアンカ…

「何これ！？殆ど白紙じゃない！」

「はい。国王陛下もその事に憤慨しておりました」

「で、リユカは勝手にタイトルを書き換えたのね…」

ビアンカはタイトルページに戻るとリユカが書いた『そして現実へ…』の文字を指で撫でる…

そして再度次のページを開き、中途半端に書き綴られた本文を黙読する。

その光景に違和感を感じたティミーはビアンカに近付き本を覗き込む。

「母さん…失礼…王妃陛下。国王陛下はタイトルの続きページには何も書かれて無いと、憤慨してました…ですが、今この本には内容が書かれています。中途半端ではありませんが…」

「良い所に気付いたわね。さっきから見てるけど、少しずつ文字が増えてるわ…この本！」

「え！？それって…」

「そうよ。今まさに物語が進行中なのよ。そして進行させているのが…リユカ…」

それは驚愕の事実である！

人間が本に吸い込まれ、その人間が物語を紡ぎ出して行く…

「読んでご覧なさい。登場した人物の描写を…」

ティミーは2ページと書かれていない内容を読みだす。

「確かに…この口調もあの人らしい…」

ティミーには文字を読んでいるにも拘わらず脳内で、あの緊張感の欠落した声が響いていた。

「でも…それなら心配する必要は無いのでは？この物語が完結すれば、戻って来るとは思いますか…」

「貴方はこの物語の結末を知ってるの？」

ビアンカの冷たく厳しい口調に、皆緊張する。

「い、いえ…結末は…」

「リュカが物語りの途中…いえ、最後でもいい…死んでしまったらどうするの？此処までを読む限り、魔王討伐という冒険の物語よ！」
ビアンカは恐怖と不安の混じった声で呟く。

思わずティミーはビアンカの顔を見つめてしまった…

青く美しい瞳にはリュカに対する心配と不安で満ち溢れている…

「では救出しないと！」

オジロンが声を震わせ叫ぶ！

「ええ、そうね。異世界へ行く方法を探さないと…ティミー、貴方はこれから特使としてラインハットへ行きなさい」

「特使…？ラインハットへ？」

「どうせ国王不在は知れ渡るわ！だから正式に世界中へ通達します。こうしておけばグランバニアへ侵略しようとしている国に対しての、対抗措置を取りやすいでしょ」

「しかし…可能な限り秘匿した方が…」

「オジロンの心配も分かるけど、何時知れ渡るか分からないと動きづらいのよ！バレないようにと制約がつきまとうから！」

「なるほど…」

「で、王妃陛下は私に何をさせたいのですか？」

「まずラインハットに知らせて軍事、政治両面で支援をしてもらいます。ラインハット以外に此処まで期待できる国はありません。それからポピーを連れてきて下さい」

「…ポピーを…混乱に拍車がかかりませんか？」

「貴方がルーラを使えばあの娘には頼りません！」

「…なるほど…ルーラ…ですか…」

「ポピーに接触したら、直ぐさまマーサ様をグランバニアにお連れして下さい。異世界への門を開くのにマーサ様のお力が必要になるかもしれません…」

テキパキと指示を出すビアンカ…

ティミーはそんな母を見て《このまま女王に就任してくれればいいのに…》と、とんでもない事を考えてしまっていた…

別に父の事が嫌いな訳では無い！

しかし、あの父の部下として日常を送っていると、時折イヤになっ
てしまうのだ…

それがリユカという男である。

「それと！…もう一つ重要な事があります」

「そ、それは？」

「この本の管理です！」

「……………何故…それが重要なんですか？」

オジロンは有能である。

ただそれは政においてであり、軍事や陰謀事には向かない。

「この本が燃やされたらリユカがどうなるのか分からないわ…」

「……………なるほど…では、どのように管理しますか？」

「この部屋ごと管理します。私とスノウとピエールで指揮します。
配下はモンスターのみで構成します。私達3人の許可が無い限り、
オジロン…貴方でもこの部屋への入室は禁止します！よろしいです
ね！？」

こうして緊迫した状況のまま事態は進んで行く…

どちらの世界でもリユカだけが緊張感無く事態を受け入れている。

一番の当事者なのに、一番他人事の様…

ロマリア(前書き)

これは、いよいよロマリア編採入です。

ロマリア

<ロマリア>

アルル達がロマリアへ着いたのは、空が黄昏に染まる頃だった。ロマリア大陸のモンスターは、アリアハンとは比べ物にならない程強く、一行の進む速度は上がらない。それでもアルル達にたいした怪我が無いのはリュカのスカラのおかげだろう…

「やっと着いたわね…」

「…敵…強いですね…」

「疲れた…早く宿を確保しようぜ…」

アルル達若者3人は、少し離れた所で町娘をナンパしているリュカを無視して宿屋へ入る。

各人、荷物を置いたらロビーに集合。そして近くの酒場へ食事に出かける。

すると其処にはリュカが居た。

先程ナンパしていた女性とは、違う女性を伴ってイチャイチャ食事をしている。

「何であの人あんなにもてるの?」

思わずウルフはアルルとハツキに訪ねてしまう。

「……だって…格好いいじゃない!」

アルルの言葉に頷くハツキ。

男としては少し納得のいかないウルフ…

「…にしても、リュカさんの好みって胸の大きい女性?」

「その様だな。あの人も、さっき口説いてた人も胸大きかったな」

「しっかり胸だけはチェックしてんの？エロガキね、ウルフは！」
ハツキのツツコミにむくれるウルフ。

「でも、だとしたら何で私には手を出さないの？」

「胸だけ大きくても、その他がガキっぽいからじゃないの？」

ハツキの嘆きに間髪を入れず突っ込むアルル。

「だとしたら、胸まで父親に似てしまったアルルには、永遠に興味を示さないでしょうね！」

「……………」

険悪な雰囲気になる少女達。

居た堪れないウルフ。

3人が黙々と食事を続けていると、軽そうなノリの青年2人がアルルとハツキに声をかけてきた。

「ねえねえ！君達この辺じゃ見かけないけど何処から来たの？」

と、男A。

「この先にスゲー旨いカクテル出す店あんだけど、一緒にいかない？」

と、男B。

彼らの名誉の為に記載しておく。

彼らはそこそこ美形である。

10人の女性に声をかけたら8人は誘いに乗るぐらい美形である。しかし彼らの不運は、彼女らの男性基準がリユカであることだ。

「失せる、不細工！」

ちよいきれ気味のアルルの発言。

「一緒に居る所を他人に見られたくないの！離れて下さい！」
イラついてるハツキの発言。

懐からゴールドを取り出し、勘定を終え店を出るウルフ。

店内の喧噪を見ないようにして酒場の扉を閉める…

その後の事はよく知らない…

怖くて2人には聞けない…

ただ分かっている事は、酒場が営業停止になるほどボロボロになっ

たにも拘わらず、少女達にはかすり傷一つ付いていない事である。

「そなた等がアリアハンから来た勇者達か？」

「はっ！私は勇者オルテガの娘、アルルと申します」

ここはロマリア城の謁見の間。

傳くアルル達の前に、ロマリア王とその王妃が玉座に座っている。

「よいよい…こう言う畏まったのは苦手だな…全員面を上げよ。楽にせい」

その一言を待っていたとばかりに傳くのを止めるリユカ…

その行為に、さすがに驚くロマリア王。

「ま…まあ、何だ…我が国も勇者達一行に援助をしたいのだが、そうもいかん。恥ずかしい事に我が国も苦しくてな。それに、そなた等が本当に魔王を討伐できるか分からぬから…」

「いやいや、王様！何も小遣いやるだけが援助じゃ無いでしょう！通行許可を与えてくれるだけで良いツスよ！西へ東へフリーパスってね」

本当に他国の王と謁見しているのか、疑いたくなるような口調のリユカ。

「貴様ー！！それが陛下に対する口の利き方か！！」

もちろん激怒する家臣。

「何だよ！王様が楽にしると言ったから、楽にしてんじゃん！アレだよ、君…王様が許可したのに、家臣がキレると王様の度量の狭さをアピールしている事になるよ。僕、他の国に行ったら言っちゃうよ『楽にしると言ったから楽にしたら、ブチ切れた小者が納める国だった』って…ベラベラ喋るね！」

リユカは元の世界で、この様な態度で外交問題を悪化させた事が何度もある。

「ふおふおふお…面白い！お主、名は？」

「リュカです」

「うむ、リュカよ！余もざつくばらんに話そう。実はな…勿体ぶつたのは、やってもらいたい事があつたからなのだ！その為に『援助できん』などと言ってしまったのだ…」

「まあ、こう言うのは駆け引きですからね」

「我々に出来る事であれば何なりと！」

リュカのやり取りに胃が痛くなってきたアルルは、リュカが何か言う前に引き受ける事を了承する。

「うむ。カンダタと言う盗賊団が我が国の『金の冠』を盗んだのだ！それを取り返して来てほしい」

「見事取り戻せたなら、褒美を取らせましょう」

王妃がリュカを見つめ妖しく微笑む。

「別に人の女に興味ないから、褒美と言われても…ぐふっ！」

とんでもない発言をするリュカの鳩尾に、アルルの拳がめり込む！

「ご褒美を戴くまでもなく、全力を尽くさせて頂きます！では、早速行って参ります！」

蹲るリュカを引きずるように、アルル達は謁見の間を後にする。

「信じらんない！私、胃が痛くなつたわよ！」

「まあまあ…落ち着いてアルル」

「そつだよ。リュカさんらしかつたじゃん！」

早々に宿屋へ戻った一行は、リュカを囲み騒ぎ出す。

「リュカさん！不敬罪って分かります！？重いですよ！！」

「言葉の意味は知ってるけどさあ…でも、僕の国ではあんなもんだよ。不敬罪になつた奴いないよ」

「何ですか、そのネジの緩い王様は！」

「あはははは、1個も言い返せない」

笑っている場合じゃ無いはずなのに、大爆笑のリュカ。本当、ネジ

が緩いのかもしれない…

「なあ、アルル。安易に金の冠奪還を受けたけど、カンダタって奴が何処に居るのか分かってるのか？」

「こ、これから情報を集めるの！」

ウルフの冷静な指摘に、焦りまくって答えるアルル。

「僕知ってるよ」

そして何故か情報だけは持っているリュカ。

「此処から北西の山脈の向こうに『シャンパニーの塔』があって、其処がアジトらしい」

「……………情報源は？」

聞くまでも無い事なのだが、聞かずにはいられないハツキ。

「うん。昨晚、一緒に食事した娘がベットで教えてくれた。因みに山脈越えはきついから、一度北の『カザーブ』という村に寄ってから迂回した方が良いってさ！」

「じゃ…じゃあ、目的地は決まったわ！出発は明日早朝ね！今の内に装備を揃えておきましょう！」

若者3人は装備を一新する為城下を彷徨い、リュカは今宵のお相手求め城下を彷徨う。

新たな装備は手にはいるのか…

新たな情報は手にはいるのか…

新たな命を紡ぐのだけは勘弁してほしいものである…

ロマリア（後書き）

次回、新キャラ追加です。

5人パーティーになっちゃうけど、

まあ…細かい事は目を瞑って下さい。

商人

<ロマリア領>

首都ロマリアから北へ進むと、木々の生い茂った険しい山道が続く。昨今ではモンスターのみならず、山賊も出没する危険な道。アルル達は襲い来るモンスターを撃滅しながら突き進む。彷徨う鎧や軍隊がに、キラビーなど…敵は強くアルル達は苦戦の連続である。しかし若さのおかげか、一戦毎に実力は向上している。

日も暮れかけ野営の準備に取り掛かると、不意にリュカが辺りを気にし始めた。

「悲鳴が聞こえた!」

「……え!?」

リュカの一言にアルル達も耳を澄ます。

・
・
・

「何も聞こえないわよ…」

「いや…美女の悲鳴だ!」

「何で悲鳴だけで美女だと分かるんだよ!」

ウルフのツツコミを無視して、森の中へ走り出すリュカ!

「ちょ、待ってよ!」

慌ててリュカを追いかける3人。

「キヤー!!!!!!」

「ガタガタうるせー! いい加減観念して犯される! 気持ち良くして

「やつからよお」

4人のごろつき風の男達が、1人の女性を押し倒し手足を押さえ付けている。

「あんた等ウチのボディガードやる！そう言う契約やったやん！」

「馬鹿かねえーちゃん！あんな端金で雇われると思ってるのか？」

「ぎやはははは！謝礼はオメーの身体だよ！」

男の一人が女の服を破り取る！

「キヤー！！！」

「へへへ、顔はガキっぽいが体は最高だな！」

破り取られた胸元から、かなりの大きさの胸がこぼれ出る。…………

巨乳です！

「イヤー！！」

「ここは通常の街道からはかなり外れてんだ！人なんかこねーよ！

騒いでねーで、大人しく楽しめよ。最高の時間にしてやつからよ！」

男は徐に女の上に被さり行為を始めようとした、その瞬間……

女の上で四つん這いになっていた男が、大きく吹き飛んだ！

そして他の3人も訳も解らず身体に強い衝撃が走り、後方へ吹き飛

ぶ！

「美しいお嬢さん。無事ですか？」

衣服がボロボロの女性に、自分のマントを羽織らせ優しく問いかける男、リュカ。

「あ……ああ、平気や……犯される寸前やったけど、まだ処女や。」

それを聞いて優しく微笑むリュカ。

女の方もパニックからか、リュカの魅力なのか分からないが、必要な情報まで伝えてしまってる。

そしてようやく追いついたアルル達3人。

「本当に美女の悲鳴だったんだ……」

呆れ感心するウルフ。

「しかしよくこんな遠くの悲鳴が聞こえたわね！」
呆れ驚くアルル。

「美女の悲鳴だったからね！そうじゃなきゃ聞こえないよ」
「悲鳴に美女も何もないでしょう…」
呆れ疲れるハツキ。

そこへ、ごろつき4人集が復活し戻ってきた。

「テメ〜！不意打ちとは卑怯じゃねーか！」

「か弱い女性を、男4人がかりで襲ってるヤツらに言われたくない
！」

「うるせー！ぶつ殺してやる！」

「おい、よく見りゃいい女を2人も連れてるじゃねーか！」

「へへへ…おい、にいちゃん！命が惜しかったら女置いて消えな！」
ごろつき4人集は各々武器を手に近付いてくる。

「お前等こそ、武器を捨てて消え失せろ！相手するのが面倒だ！」
「てめー、ぶつ殺してやる！」

「それ、さつき聞いた。他にボキヤブラリーは無いの？」

リュカの安い挑発に、カツとなった1人が襲いかかる！

しかし次の瞬間、男の頭はリュカの杖に吹き飛ばされた。

頭部の無くなった体から、勢い良く血が噴き出し辺りを染める。

ごろつき4人集は、ごろつき3人集となり目に見えて怯んでいる。

「テ、テメ〜…お、俺達が誰だか知っててやってんのか！」

「え！？何？有名人なの？じゃあ、サイン貰おうかな！…ペンが無いから、お前等の血をインク代わりにするけどね！」

脅し文句と共に、1歩踏み出すリュカ。

「お、俺達は、カンダタ一味だぞ！カンダタ親分がオメー等をぶつ
殺すぞ！」

腰が引け、声が裏返る男を見てリュカは更に脅しをかける。

「さつきお前等が言ってたろ！ここには人が来ないって。」

「だ、だからなんだよ！」

「誰がカンダタ親分にチクルの？お前等全員ここで死ぬんだから、チクルないでしょ！」

リユカが満面の笑みでごろつき3人集に近付く。

そして……………

「ホンマ、危ない所を助けて頂きありがとう。ウチはエコナ。まだ駆け出しやけど商人や！」

一行は当初の野営場所へ戻り、自己紹介から始めた。

エコナは大商人になる為、世界を旅し修行している駆け出し商人だ。

「ほな、おたく等が勇者様ご一行なん？」

「まあ…便宜上は…」

「ほんなら、ウチも一緒に付いていつてええか？ウチ、目的地があるわけじゃないねん！ただ世界中を巡って、見識を広めたいねん！」
「それは構わないけど、私達の旅はとても危険なものよ！それでもいいの？」

「心配無用や。さつきみたいに4人がかりじゃムリやけど、ウチとて多少は戦えるんや！…それにリユカはんと一緒の方が安全そうやん！」

先程リユカの強さを目の当たりにしたエコナ。

「まあ…そんな訳や。よろしゅうたのんます」

「ところでリユカはん。ウチ、服がボロボロやん…代えの服も無いし、カザーブまでマント貸してほしいねんけど、それじゃリユカはんも困るやん」

「いや、別に「ほんでな、二人抱き合っていればマントを二人で使えると思っねん！」

エコナはここぞとばかりにリユカに色目を使い、落としかかる。

リユカを無料のボディーガードに仕立てるつもりだ。

「いいね！も、ぎゅーっと抱き合っついていようか！」

「良くありません！私の代えの服を使つて下さい！」

「アンタのじゃ胸がきつそうで着られへん」

差し出されたアルルの服を見て言い切るエコナ。

「じゃあ、私を使つて下さい！絶対着れます！」

ハツキは強引に服を渡してエコナをリユカから引き離す。

《男はここにもう一人居るのに、何で俺は相手にされないんだ？》
ウルフが女3人のやり取りを憮然と見つめていると、マントを返してもらつたりユカが小声で話しかける。

「ウルフ。女の子に相手してほしいのなら、自分から声をかけないとダメだよ。待つてたつて何も起きないよ！」

はたしてウルフは、どんな大人になるのか楽しみである。

商人（後書き）

新規参入キャラの口調について…

今回より新キャラ『エコナ』が登場しましたが、

彼女は大阪弁風の口調をしておりますが、

あくまで『風』…つまり似ているだけです。

「そんな喋り方ない！！」とか「バカにしてるのか」などと言うクレームは、

一切受け付けております。

何度でも言いますが、大阪弁風だけで大阪弁ではございません。

また、方言をバカにする目的で書いてるつもりはございません。

万が一その様に感じられたのなら、それは作者の表現力（力量）不足によるものです。

御不快感をあたえた旨、深く陳謝致します。

蛇足ですが、

エコナはフレアさんレベルです。（例のアレが！）

カザープ

<カザープ>

「前も後ろも山ばっかー」
リュカが勝手な歌を歌いたくなる様な村：カザープ。
リュカの歌通り四方を山で囲まれている。
アルル達は着いて早々、エコナの装備を揃える為、武器屋や道具屋をハシゴする。

「なあなあリュカはん！これなんてどう？ウチに似合う？」

「うーん…折角胸が大きいんだから、もっと胸を露出した服はどう？僕はそっちの方が好き」

「ほな…これは？」

休日のショッピングモールでキャツキャウフフとイチャつくバカッブルの如く、リュカとエコナはショッピングを楽しんでいる。
それを恐ろしい形相で睨むアルルとハツキ。

更にウルフは女の扱い方の手本としてリュカの言動をメモしている。

(大丈夫か？)

「早くしなさいよ！日が暮れちゃうでしょ！」

「ウチ等には気をつかわんでええよ…アルル達は先に宿へ戻ってて下さい。ウチ等はウチ等で勝手にやりますから」

「うん。自由行動ね」

そう言っつてリュカとエコナは別の店に入っつて行く。

二人きりにしたくないアルルとハツキは、渋々ついでに行く。

ウルフは…言っつまでもない…

一通りの物を揃えたエコナは、リュカを伴い村の酒場でディナーデートを敢行する。

だがアルル達も一緒の為、どう見てもただの食事会である。

大して広くない店内には、若いカップルが先客として食事をしている。

5人はテーブル席に座る。

「ウチは取り敢えずビール！みんなは？」

ほぼ座ると同時にエコナは叫ぶ。

「私達は未成年です！お酒は飲みません」

「ウチかて18や！気にしたら負けやで。リュカはんは飲むやろ？」

「お酒嫌いだからいい！」

リュカは表情を渋らせ拒絶する。

「リュカはん、飲めへんの？」

「うん…飲めるけど、強くないし…良い思い出が無いから…」

「何や？そのヤな思いでつて！酔って上司殴ったん？」

下世話な話に興味津津のエコナ。

エコナ程では無いが聞きたがつている他3人。

「うん…実はね…僕に初めての子供が産まれた日に、以前から準備されていたパーティーがあったんだ…しかも僕が主賓の……本当はパーティーなんて出たくなかったんだけど、出ない訳いかないじゃんで、イヤイヤ出席して無理矢理酒飲まされて、気が付いたら気絶してて奥さんが魔族に攫われてた…」

リュカの話は続く…

身内に居た裏切り者の事、その後8年間の石像化、生まれたばかりの双子は8年間も両親が居なかった事…

孤児として育ったハツキとウルフ、そしてやはり孤児のエコナはリュカの子供に共感を覚え涙する。

アルルもリュカの人生の壮絶さに言葉も出ない…

「おいおい…泣くなよ…今はもう幸せだよ。みんな…」

「そか…子供は親と一緒に暮らすのが一番幸せや！」

「うん。そうね！早くバラモスを倒して、世界を平和にしないとね！」

「あの…すみません…」

アルルの言葉を聞いた隣席のカップル（女）が、不意に話しかけてきた。

「バラモスを倒すという事は…貴女達は勇者様ですか？」

「べ、便宜上は…」

たじろぐアルル。

「ではお願いがあります。ここより北に行った所にある『ノアニール』と言う村をお救い下さい！」

・
・
・

カップル（女）の説明では、10年程前から村人が皆眠ってしまう呪いにかかっているらしい。

何故呪いがかかっているのかは分からない様です。

カップル（女）は幼い時に父と共に村を出たが、弟が村で長き眠りについている…

「お願いします！どうか弟を…」

泣きじゃくりながら懇願するカップル（女）…

「わ、分かりました…ひとまず調査を試みますから…」

辟易するアルル…

一行は逃げる様に宿屋へ戻り、作戦会議を始める。

「どうすんだよ。カンダタから金の冠を取り返す途中だろ！」

「分かっているけど…ほっとけないでしょ！」

「じゃあ…どちらから先に行きますか？」

「そんな簡単やん！寝ぼすけ共にはもう少し寝ててもらって、先にカンダタや！カンダタは遠くに逃げてしまう可能性もあるかもし

れへん」

「じゃあ決まりね！明日早朝にシャンパニーの塔を目指します」
話が決まった所でリュカが口を開く。

「どうして僕の部屋で作戦会議してるの？」

「だって…他の人の部屋じゃ、リュカさん会議に出席しないでしょ？『僕は決まった事に従うよ』って言って！」

「うん…そうだね。でも、僕が居たって会議に参加しなければ同じじゃない？」

「そんなことはないわ！後で説明するのは面倒なの。一緒に居れば説明を省けるでしょ！」

「なるほど！納得しました。…もう会議終了だよ。解散だよ」

「ええ…お疲れ様…」

「じゃあ、僕…散歩してきます」

「ちよつと！明日は早いよ！寝不足じゃ困るんだけど！」

「あはははは、大丈夫だよ！僕は戦わないから！寝不足OKでしょ！じゃあね〜」

各自が自分の部屋に戻る中、リュカだけが宿屋から外出して行く。

阻みたいが阻む手立てがないアルル…

恨めしそうにリュカの背中を見つめ、大きく溜息を吐く…

自分の部屋に呼ぶ事が出来れば、どんなに嬉しいかと…

翌早朝…

一向に起きてこないリュカとエコナを起こすべく、3人は二人の部屋に突入する。

リュカの部屋はもぬけの殻…

仕方なくエコナだけでも起こそうと、部屋を大きくノックして中に突入すると…

裸のエコナが裸のリュカに重なる様にして寝ているではないか！

「な…な…何してるんですか!！」

「やあ…おはよう…もうちょっと静かにしようよ…周りに迷惑だよ」

「ホンマにねえ…もうちょい静かにしてほしいわあ」

この状況を見られても気にしない2人…

それどころか優雅に目覚めのキスをしてから仕度を始める2人…

「いいなあ」

ハツキが小声で羨ましがる…

間違った道に進んでいる事に気付いてほしいものである…

カザーフ（後書き）

またかよ、この男！
状況分かってんのかよ！！

シャンパニーの塔（前書き）

久しぶりにリュカがぶち切れます。

シャンパニーの塔

<カザーブより南西>

潮風が心地よい平原をモンスターの雄叫びが轟く。

毒いもむしにギズモ…

襲い来る敵も強力になって行く…

しかしアルル達も成長著しい！

アルルがメラを唱え、ハツキが憶えたてのバギでとどめを刺す。

敵の数が多ければ、ウルフがギラを唱え蹴散らす。

新メンバーのエコナも、鉄の槍で敵を葬り去って行く。

5人パーティーで、1人何もしないのは何時もと同じ…

それでもエコナの参入でフォワード要員が増え、パーティーバランスが向上した事は喜ぶべき事だ。

「お！？見えて来たでー！アレがシャンパニーの塔や」

カンダタ一味が根城にしている塔…

強い潮風に晒されながらも、威風堂々とそびえ立つその塔に、一行は進入する。

<シャンパニーの塔>

塔の内部は何処からともなく腐敗臭が漂っている。

「この匂い…何？」

アルルは顔を顰め、ハツキはいまにも吐きそうだ。

怪訝な表情で進むリユカは、塔の片隅の部屋で不愉快な物を発見する。

其処には大量の死体が無碍に放置されている場所…

「な、何これ…！」

「何でこんな死体があるんだ？」

100体は超えているであろう死体の山…

既に白骨化しているものから、腐敗の著しいもの…

先程捨てられた様な死体まである。

死体の7割はロマリアの兵士と思しき恰好だが、残りはどう見ても兵士ではない。

中には衣服を引き裂かれ、レイプされた形跡のある女性の死体や、年端もいかない少女の死体…

「酷い…」

あまりの光景に言葉を失っていると、部屋の奥から人の息づかいが聞こえてくる。

「奥に誰か居る様だ…」

リュカが声のする方へ進み行く。

其処には更に不愉快な事を行っている男が1人いた。

まだ6・7歳の少女を犯す男…

その少女も今は息がない…

だが、つい先刻まで生きていたのである…

多くの男に犯され息絶えた少女を、ここに捨てに来た…そしてこれで最後とばかりに欲望を少女の死体へぶつけている…この男のしているのは、そんなところだろう！

「いい加減にしろ！」

リュカが男の脇腹に強烈な蹴りを入れる！

「ぐはあ！」

大量の血と共にその日の食事を全て吐き出し男が唸る。

「な、何だ…デメ〜！？」

「うるさい！貴様に名乗る名前はない！カランダタはこの上に居るの

か!？」

「へへへ…お前等もロマリアに頼まれた連中か…サツサと上に行つてぶつ殺されてこいよ!そっちの女3人も犯されまくって死体になつたら俺が抱いてやるぜ!」

リユカは徐に男の頭を鷲掴みにすると、そのまま力を込めてゆく! 「うぎやああああ!」

(ぐしゃ!)

腐ったリングゴを握り潰すかの様に、リユカは男の頭を握り潰した! そしてリユカは黙って歩き出す。

アルル達は慌ててリユカに続く。

リユカの怒りが伝わってくる為、無言のままついて行く。

塔を上へ進む中、カンダタの子分達がリユカを見つけ襲いかかつてくる。

アルル達は素早く臨戦態勢をとろうとするが、剣を抜く間もなくリユカが敵を蹴散らし、戦闘が終了する。

目の前で目撃しても、リユカが何をしたのか分からない程一瞬で…

《何なのこの強さ…強いとは思っていたけどこれ程とは…》

アルルだけではない…他の3人もリユカの強さに驚かされるばかりだ…

最上階へ着いたリユカ達は、まさに歪んだ欲望の宴を目撃する…

2人の女性を15人が代わる代わる犯しているところだ!

「あ…?何だテメー!何処から入って…ぐはっ!」

15人いた裸のブ男達は一瞬でこの世から消え去り、奥の部屋からカンダタらしき大男が姿を現す。

「な、何だこりゃ!?!?どういう事だ!」

「お前がカンダタか?」

「そう言うテメーは誰だ!?!」

「そんな事どうでもいい…金の冠を返せ!そうしたら一瞬で殺して

やる！」

室内の状況を見定めたカンダタは、慌てて奥の部屋に引き戻りドアに鍵をかける。

リユカは勢い良くドアにタツクルするも、意外に丈夫でなかなか突破できない！

「リユカさん退いて！」

ウルフがリユカに退く様に指示する。

「イオ」

そしてドアに向けイオを唱えた！

（ドカーン！）

ドアは吹き飛びリユカが突入する！

まず正面に見えたのは、窓の外で両手を縛られ宙吊りになる裸の女性…

その女性の頭には金の冠…

女性の両手を縛り吊すロープは、室内を通って部屋の反対側の窓辺に立つカンダタの手に…

「おっと！俺様はキメラの翼を使って逃げさせてもらおう！俺の事よ、女を気にした方が利口だ！じゃあな！」

そこまで言つとロープから手を放しキメラの翼で飛んで行く…

女性は支えを失つたロープごと地上に落下し始める！

慌ててロープを掴むリユカ！

「くっ！何てヤローだ！」

女性は2メートル程落下したが、リユカのおかげで大事は免れた。

ひとまずは女性達に衣服とキメラの翼を渡し、各々先に帰らせた。

「カンダタ…逃がしちゃったね…」

「でも、金の冠は取り戻したわ！これでロマリア王に報告できるわ

よ

アルルは出来る限り明るい口調でみんなに話しかける。しかしリュカは、一人静かにカンダタの逃げた空を見つめ物思いに耽る。

アルルもハツキもエコナも…何を話しかけていいのか分からない…でも、何時ものリュカに戻ってほしく、全てをウルフに押し付ける！

《な、何で俺なんだよ…》

「な、なあリュカさん…俺…リュカさんが怒るの初めて見たけど…1階に居た女の子とは知り合いなの？」

振り返ったリュカの表情は何時もの優しいリュカだった。

「僕にもあのくらい歳の娘が居るんだ…とっても可愛いんだよ」
優しくウルフの頭を撫でるリュカ。

自分の娘と重ねてしまい、激怒する姿を見た少女達…

その底知れぬ優しさに、更に恋心を深めて行く。

悪循環であるにも拘わらず…

裸の付き合い

<ロマリア領・北部>

アルル達はリュカを囲み武器を構えている！

「はぁ！」

アルルは剣で一閃！

（キン！）

「甘いよ」

しかしリュカに難無く弾かれる。

「メラ」

「バギ」

ウルフのメラもリュカのバギで相殺される。

「いくで！」

「おっと！」

エコナが鉄の槍で突くも掠る事すらしない。

「マヌーサ」

ハツキがマヌーサを唱えるも、呪文の効果は全くない。

・
・
・

「うん。みんな強くなったね！ただもう少し連携して攻撃した方がいいよ」

4対1でリュカを攻撃したにも拘わらず、リュカは息を切らさず何時もと同じ口調で語りかけてくる。

アルル達は激しい運動量のせいで、喋る事も出来ず座り込む。

リュカはアルル達に頼まれ、完全な実践形式での手合わせを行った。手加減無し（アルル側）の手合わせだった為、魔法も当たれば怪我

を免れなかっただろうし、物理攻撃も当たれば大怪我をするレベルの手合わせだった…当たればだが…

「さあ、ご所望通り一斉に手合わせをしたよ。僕もう疲れたよ！今日はこの辺で野営で良いよね！？」

「…ええ…」

ぐったりしているアルルは、何とか体を起こしリュカの質問に答え

た。
「じゃあ僕はご飯の準備に取り掛かるね！そう言えばすぐ其処に小川が流れているから、女の子達は水浴びでもしてきたらどう？大丈夫、覗かないよ！それにウルフが覗かない様に見張ってるよ」

『俺だつて覗かないよ！！』

と、突っ込みたいのだが疲れきつて突っ込めないウルフ。

何とか体を起こし、着替えとタオルを持って小川へ歩く少女達。

「本当…リュカさんって凄い体力ね…私達がこんなに疲れる程攻撃したのに、汗一つかいてない…」

「まったくや！ベットのの上でも凄かったで！」

「止めて下さい、いやらしい話をするの！」

年頃の女の子が3人集まれば、自ずと話の内容は決まってくる。

「…でも、どうしてリュカさんと…ああ言う状況になったんですか？」

「なんや、ハツキは気になるん？いやらしい話は嫌いなんじゃないん？」

「…いい、意地が悪いです！」

「まあええ…ウチな、利用しようと思ったんよ。」

「利用？リュカさんを！？」

「色仕掛けで迫って、ウチの無料ボディガードとして側に居させようと考えてたんよ！」

エコナは豊満な胸を両手で持ち上げ、体ごと左右に振りながら話す。

「ほんで、リュカはんが一人で村を歩いているのを見つけたから、改めてお礼をしたい言って話しかけたんよ！」

アルルもハツキも黙って聞き入る。

「そしたら『別にお礼なんていいよ。下心ありで助けたんだから』って爽やかに笑いよるねん！普通言わへんよ、下心ありなんて…だから聞いたんよ『下心ってなんですか？』てな。」

「そうしたら何て答えたの？」

「ごっつあつさりと『うん。エッチ出来ればいいな』って笑いながら答えるねん！ウチも最初は処女を守るつもりやったんけど、あの笑顔に落ちてもうた！気付いたらリュカはんに抱き付き、キスしてたんや…」

エコナは自分の体を抱き締め、クネクネしながら語る。

「あの男ズルイねん！他の飢えきつた男みたいに『やらせる！』って、がっついて来ないクセに、自身の欲求はストレートに話すねん！しかも最高の笑顔付きで…」

……

幾ばくかの沈黙が流れる…

「リュカさん…格好いいわよね…シャンパニーの塔でも…」

アルルはシャンパニーの塔でのリュカを思い出す。

「怒ったリュカさんは怖かったですけど…優しいからこそ、あんなに怒ったんですよ…」

ハツキの言葉に皆頷く。

「奥さんて…どんな人なんやろ…？」

「リュカさんが言うには、すごい美人だそうですよ。奥さん以上の美人に出会った事無いって言ってました…」

「ウチ等かてそう悪くないと思うで！」

「リュカさん…元の世界へ帰っちゃうのかな…？」

「…」

アルルの一言に黙りだす。

「させへん！ウチが色仕掛けで落として、この世界に居たいと思わ

せる！」

「私も協力します！」

エコナとハツキが手を組む！

「アルルはええんか？リユカはん帰っても！」

「……………私は…そう言うのイヤ！」

「…そう言うのって？」

キレイに八毛るエコナとハツキ。

さすがにちよつと照れくさかった様で、顔を見合わせ苦笑い。

「色仕掛けよ！私もリユカさんには帰ってほしくないよ！でも、この世界を気に入って帰らないのなら歓迎だけど…女の為にとって言うのはイヤ！それに元の世界には家族が待っているのよ…家族の事を思うと…」

「アルルの言い分も分かるけど、ウチは誘惑を諦めんよ。アルルに手伝えとは言わへんけど、邪魔だけはせんといてね！」

《でも…きつと無駄よ！リユカさんが色仕掛け程度で落ちると思えない…まあ、誘いには乗るでしょうけども…》

奇妙な連帯感が生まれた、かしまし三人娘。（古っ！）

リユカは無事元の世界に戻るのか！？

それより、戻った後が無事ですむのか！？私はそれが心配だ！

「ハツキ達遅いね…」

「じゃあウルフ！『遅くて心配になっちゃった？』とか言って見てくれば」

「殺さるよ！」

「平気だよ。裸の一つくらい見られても」

「リユカさんにはね！」

「みんなの事が心配だったって言えば大丈夫だよ！何だったら、足が滑ったとか言って押し倒しちゃえば？不可抗力なんですぅ〜って」
男共は男共で、しょうもない話を続けている…

このパーティーの男女間の温度差は、結構深刻なものかもしれない。
ない…
リュカが居なければ、もっとまともな冒険が出来たであろうか？

裸の付き合い（後書き）

サブタイトルからエッチな内容を想像したアナタ！

……………仲良くなれそうですね。

今のところ、パーティー内で手を出した女性は1人だけ……
奇跡みたいな数字ですね！？

ノアニール

<ノアニール>

「ここがノアニール…」

溜息を吐き周囲を見渡すアルル。

人々の生活が途絶え、草木が鬱そうと生い茂る村…

その村の各所に横たわり眠り続ける人々…

「何故…こんな事に…？」

「なあ…ここにいたら俺達も目覚めなくならないのか？」

「それは大丈夫じゃ！」

ウルフの疑問に答えたのは、一人の年老いた男性だった。

「俺は皆が眠りについてから10年間、この村で生活をしておるが、呪いの影響を受けた事はない」

「あ、貴方は？…どうして貴方は呪いにかからなかったのです？」

「うむ。俺はイノック。生まれも育ちもこの村じゃ…俺が呪いにかからなかったのは、村に呪いがかかった時にちょうど居なかったんじゃ…家出した息子を捜す為、村の外に出ておった…」

イノック老人は切々と語る。

エルフの姫と恋に落ちてしまった息子ノイル。

エルフの娘は、エルフの里を捨てノアニールに…ノイルの元にやって来た。

しかし村人はエルフの魔力を恐れ、迫害をした…

一緒に住んでいたイノック老人にも被害が及び、居たたまれず息子にエルフと別れる様説得。

しかしノイルは受け入れず、エルフの娘と共に村を出て行ってしまった…

当初は行く当てなど何処にもない息子の事だから、すぐに帰って来ると思っていたが、1週間たっても戻る気配がなく、心配になり近

隣の村や町を探し回ったイノック老人。

2ヶ月探し回ったが消息すら掴めず、ひとまず村へ帰ると、この有様だった…

「どうか旅の方… エルフの隠れ里に行つて、エルフの女王を説得してはくれませぬか…」

アルルに縋り付く老人。

「勝手な事言うな!!」

静かな村内にリュカの怒号が響き渡る!

「アンタ親だろ! 息子が連れてきた彼女を認めないなんて… アンタが息子達を認め… 応援してやれば、こんな事にはならなかつたんじゃないのか!？」

「し、しかし… エルフですぞ!」

「それがどうした! エルフが何だ! 種族の違いがどうした! ! アンタは自分の事しか考えてない! 他の村人に白い目で見られるのがイヤで、別れる様に言つたんだろ! 息子の幸せなんて考えもせず、愛し合う二人を引き裂こうとしたんだ!」

「エ、エルフと人間で… し、幸せになど…」

「やつてみなければ分からないだろ! アンタ、二人の馴れ初めを聞いた事あんのか?」

「……………」

答えようとしないイノック老人…

「ふん! やつぱり… 二人がどれくらい愛し合っているか、どうして惹かれ合つたか知りもしないで… どうしてそれで、幸せになれないつて言い切れるんだ!？」

「リュカさん… それくらいで…」

堪らずアルルが止めに入った。

「…確かに… 不幸になるかもしれない… でも、自分たちで選んだ道だ! 他人の言いなりで幸せになるよりも、自分で決断して不幸になつた方が…」

「アンタに何が分かる…」

イノック老人が絞り出す様に呟く。

「分かるね！僕にも息子が居る！とても真面目な良い子だが、どこか抜けてる感がある息子だ。いつか、どっかのバカ女に騙される様な気がして、ワクワクしてるさ！でも絶対、『別れる』なんて言わない…僕は息子を…ティミーを信じてる！アイツはきっと良い女を連れてくるって…」

リュカは嬉しそうに、自分の息子の事を語っている。

それをイノック老人は見る事が出来ない…自分の息子を信じる事が出来なかったから…

アルル達は村の宿屋を勝手に借りて、今後の事を話し合っている。

「取り敢えず…エルフの里に行ってみましょうか…」

「でも、会ってくれますかね？いきなり攻撃されませんか？」

「それは分からないけど…でもこのまま、ほっとく訳にもいかないし…」

アルルの溜息混じりの提案に、リュカは何も言わない…

視線を向けても優しく微笑むだけ…

「あの…リュカさんは…この村を救うのに反対じゃないの？」

恐る恐るウルフが訪ねる。

「（クス）反対なんかしないよ。さっき怒ったのは、息子の幸せを考えていないジジイに対してだよ。まあ…エルフを迫害した村人達にも、少しは腹が立つけど…誰しも自分たちと違う存在は怖いんだよ…でも、こっちの世界じゃエルフって怖い存在なの？」

「リュカさんの世界じゃ違うの？」

「そうだよ！エルフだよ！人間より遙かに長生きで、とてつもない魔力を持っているんだよ！人間なんて一瞬で滅ぼしちゃうよ！」

ウルフは興奮気味にエルフについての風聞を披露する。

それは、この世界の人々が古くから言い伝えてきた事であり、何ら

確証に基づくものではない。

「…でもウルフ…まだ滅ぼされてないよ。この村も…人間全ても…」

「それは…その…」

リュカは優しく微笑みながらウルフの頭を撫でる。

「そんな思いこみだけで敵対しないでさ、仲良くなる努力をしようよ。……………エルフの里かあ……………楽しみだなあ」

「?…リュカはん…何が楽しみなんや?ウチ、少しばかりビビってるで!」

よく見るとアルルとハツキも、エルフへの恐怖で表情が若干引きつっている。

しかしリュカは気にすることなく語る。

「エルフってさあ…美人が多いんだよねえ。しかもエルフは男の子の出産率が低いんだって!まあその分長寿でカバーしてるみたいだけど…」

「そのの何が楽しみなの?」

「つまりだ、ウルフ君!そのエルフの里は美女だらけて事だよ!

僕の知り合いのエルフも、頭は緩いけどすごい美人だもん!」

常人とは異なる思考回路でものを語るリュカ…

下手に手を出したが為に、物事が厄介にならないか、不安になる4人…

トラブルの予感はいきません。

<ノアニールより西の森>

一行は翌早朝にノアニールを出発し、一路西へ…エルフの隠れ里を目指す。

大勢の美女に出会える事を期待するリュカは、一人ウキウキ気分で『恋のバカンス』を歌い、いつもの様に敵を呼び寄せる。

現れたのは『バリイドック』と呼ばれる、犬のアンデットが4匹。
「あ！ワンコだ！…でも腐ってる。臭いがきついなあ…」

素早く臨戦態勢に入るリュカ以外の4人。

しかし先制したのはバリイドックだ！

バリイドックが遠吠え！

アルル達の体が淡く光る…

「『ルカナン』だ！気を付けろ！」

何故だか動物の言葉が分かるリュカが、アルル達に注意を促す。

それを聞き、ウルフが『スクルト』を唱え、守備力を上昇させた。

「ナイス、ウルフ！じゃあ私も、バギ！」

しかしハツキのバギは効果が薄く、バリイドックにダメージを与えられない。

「ギラ」

続いてアルルがギラを唱える。

真っ赤な炎がバリイドック達を赤く包む。

1匹のバリイドックが炎の中から飛び出し、アルルに襲いかかる！

「甘い！」

だが、アルルの遙か手前でエコナに鉄の槍で突かれ絶命した。

ひとまず戦闘も終わり、再度エルフの隠れ里へと足を進める一行。

ハツキが落ち込んでいるのに気付いたリュカは、彼女に近付き声をかける。

「どうしたのハツキ？何か落ち込んでる？さっきバギが効かなかつたから、落ち込んでる？」

「私…全然みんなの役に立ってない…」

「そんな事無いと思うよ。アルルが怪我したらホイミで治してるじゃない！」

「でも、私じゃなくても…アルルだってホイミ使えるし、リュカさ

「なんんかはべホイミを使えるじゃないですか！本職の僧侶の私はホイミしか使えないのに……」

「でも回復役は多いに越した事はないよ！それに僕を当てにしないで……常に逃げる準備で忙しいから」

リユカは戯けて見せるが、ハツキは俯き表情は暗いまま……

「アルルのギラ、見ました！？本職のウルフと同じくらいの威力ですよ！それなのに……私のバギは……」

「あのねハツキ……アルルは勇者様なんだよ。何でも出来る……それが勇者様なんだよ」

「何でも……やつぱり私……いらないですよ……」

「何でも出来る人間ってというのはね、一人じゃ何にも出来ない人の事なんだ。」

「え！？何でも出来るのに？」

ハツキは顔を上げリユカの瞳を見つめる。

「うん。腕力はあるが戦士程じゃない。素早く動けるが武闘家程じゃない。攻撃魔法を使えるが魔法使い程じゃない。もちろん回復系の魔法も使えるが僧侶程じゃない。いいかいハツキ……落ち込むなどは言わない……でも『自分は役立たずだ』って落ち込んで、何も解決はしないよ。それより『どうすれば役に立てるのか』って悩んだ方が有益だ！」

「……私に、何が出来ますかね？」

リユカの言葉を聞いて、ハツキの瞳に輝きが戻る。

「さあ……僕には分からない……色々試してみるんだね……何か答えが出てくるよ」

人に聞く事では無い……自分の未来は自分で見つける！

リユカの答えは優しくも厳しい。

ハツキなりに答えを見つucker事が出来る様、祈るのみである。

ノアニール（後書き）

珍しくリュカがまともな事を言っていますが、一応素面ですので驚かないで下さい。

エルフの里

<エルフの隠れ里付近の森>

「なあ…俺達…迷ってないか!？」

ウルフが額に流れる汗を拭いながら訪ねる。

「大丈夫、迷ってないよ。僕達は美女の群れに近付いてるよ」

「本当かよ! 何だか同じ所をグルグル回ってる気がするけど!？」

「本当本当! だんだん美女の匂いが強くなってるからね!」

「…なんだよ、それ…じゃあ、その匂いを辿ってみてよ…もう疲れた…」

リュカの言い分に、心身共に疲れ切ったウルフが、やけくそ気味に嫌味を言う。

「ようし! 任せなさい!!」

だがリュカは、気にしないどころか率先して森の奥へ勝手に進んで行く。

置いてかれる訳にはいかないアルル達も、慌ててリュカの後について行く。

<エルフの隠れ里>

どンドン進むリュカの後を、見失わない様について行くと、急に拓けた場所へと出る事が出来た!

「……………本当に着いちゃった…」

「だから言ったる! 美女の匂いがするって!」

「何だよ、美女の匂いって!?! どんなんだよ!」

「そりゃアレだよ! 美人…って感じの匂いだよ!」

リュカの説明になっってない説明で、ウルフはより混乱する…

そんな男二人を無視して、アルル達は村内へと入って行く…そこは…
「ほ、ホンマに美女だらげやん…」

エコナが感嘆の溜息を吐く程、エルフは美人しか存在していない…

近くに居たエルフがアルル達の事に気が付いた。

「キヤー！！人間よー！！攫われてしまうわー！！！」

エルフの少女が悲鳴を上げて腰を抜かす。

「攫ったりしないよ。触ったりはするかもしれないけど」

リュカは腰を抜かした少女エルフに近付き、優しく立たせてながら話す。

周囲を見渡すと、他のエルフ達は皆逃げてしまった様で、村内を静寂が包んでいる。

立たせてもらった少女エルフも、慌ててその場から逃げ出してしまった…

「やれやれ…『人間より強大な魔力を有する恐ろしい存在』ね…人間見ただけで、ビビって逃げ出しちゃったけど…どうなの？」

この世界の常識で生きてきたアルル達には、リュカの言い様には反感を憶えてしまう。

しかし、現実を垣間見てしまった為、反論する事も出来ない。ただ、

「そう…言われ続けてたんだよ！」

と、子供じみた言い訳しか出来ないでいる。

「ま、いいや…そんな事より、女王様を捜しましょうか。一番でっかい建物に居るのがそうだよ。きっと…」

村内の一番大きな建物の前まで辿り着いたアルル達。

門には10人の戦士風エルフが、剣を構えて進入を阻んでいる。

「あ！間違はなく此処にお偉いさんが居るよ！」

リュカは誰が見ても分かる事を言いながら、戦士エルフ達に近付いて行く。

「ちょっと女王様にお話があるから、退いてくれない？」

「人間が何の様だ!？」

戦士エルフのリーダー格の美女が、リュカの喉元に剣を這わせ言い放つ。

「あれ？君が女王様？」

隊長エルフの瞳を真つ直ぐ見つめながら話すリュカ。

「ち、違う！み、見れば分かるだろう…女王様はこの奥にいらっしやる」

リュカに見つめられ、顔を真つ赤にする隊長エルフ。

「僕達、女王様に大切なお話があつて来たんだ。お願いだよ、お目通りをさせてくれないかなあ？個人的には君ともお話をしたいんだけどね…」

喉元に剣が這つてる事を気にもせず、隊長エルフの腰を抱き寄せ瞳を近付ける。

隊長エルフはどうする事も出来ないでいる…剣で喉を切り裂く事も、押しのけて逃げ出す事も、大声で助けを呼ぶ事も…ただリュカの瞳に心を奪われる…一人の女でしかない。

『人間達よ…入室を許可します…』

何処からともなく声が響く。

「……………どうぞ…お通り下さい……………ただ、女王様に無礼な事はするでないぞ!!」

女王の声を聞いた隊長エルフは、リュカの喉元に這わせてあつた剣を放し、通行を促す。

「ありがとう。君、名前は？」

優しく訪ねるリュカ。

「わ、私は…カリーだ…」

思わず答えるカリー…リュカの瞳から目を離す事が出来ないでいる。

「うん。僕は、リュカ。よろしくね」

そう言つと、カリーの頬へ優しくキスをするリュカ。

最早、ただの恋する乙女であるカリーを尻目に、女王の元へと歩み

出すアルル達。

カリーはこの先どうなるのだろうか…

アルル達は謁見の間の様な空間に辿り着く。

間の前には玉座に座る美しきエルフが一人…

「貴女が女王様でしょうか？」

「如何にも…私がエルフの女王です。………して、人間…何用で此処まで参った？私達は、人間なんぞとは関わり合いになりたくない！サツサと出て行ってほしいのだが…」

不機嫌な表情の女王は不機嫌な口調で吐き捨てる。

「此処より東に位置する、ノアニールと言う村の呪いを解いて頂きたい、お願いに参りました。」

アルルは可能な限り恭しく嘆願する。

「ならぬ！その村の男は我が娘を誑かし、エルフの秘宝『夢見るルビー』を盗ませた！断じて許す事は出来ぬ！」

「夢見るルビー！？そんな事は一言も言っただな？あのジジイ…」

「あの…私達はノアニールの村人に…難を逃れた村人に頼まれただけなんです…些か情報不足ですので、何が起きたのかをお教え頂けないでしょうか？」

「主等に教えて何になる？娘を連れ戻せるのか？」

「はい。可能な限り尽力致します。」

「……………」
目を瞑り考えるエルフの女王…

「いいでしょう…」

エルフの女王は静かに目を開くと、10年前に起きた出来事を静かに語り出した。

エルフの女王の娘『アン』は、ある日森に迷い込んだ人間の青年に惚れてしまい、毎日の様に村を抜け出し、人間の青年と逢い引きをする様になる。

その事に気付いた女王はアンに『二度と人間の青年と会う事は許さぬ』と言われ、悲観に暮れてしまった。

しかしアンは、エルフの秘宝を持ち出し、村から出て行ってしまった。

「……………質問が一つ」

女王が話し終わるとリュカが手を上げ質問をする。

「何か…？」

「何故、娘の恋路に反対したんですか？」

「人間なんぞ粗野で度し難い生き物！そんな生物との愛など許せる訳がないであろう！」

「それはエルフ族の総意？」

「そうですね！エルフ族は人間と違い、同族同士で睨み合い殺し合うなどと言う事はしない！比べものならぬ程高等な存在です！」

「つまりアンタは、母親であることより、女王である事を選んだ訳だ。見た目美人だが、最低なブスだな！」

リュカは苦々しく言い放ち、唾を吐き捨てた。

「な、何だと…！」

エルフの女王は怒りに体を震わせる。

「アンタの娘だって人間という存在については聞いていただろう。」

それでも人間に恋をしてしまったんだ！だがアンタは、その人間がどういう人物か知ろうともしてない。もし娘の幸せを願うのなら、娘の恋の手助けをしても良かった！『人間』という全てではなく、その『人間の青年』個人の事を調べ、娘を幸せにする事が出来るか確認すれば良かったんだ。反対するのはその後でも間に合う。」

「そ、それは…しかし、人間は多くの残虐行為を行ってきた歴史が

ある！」

「それは全人類が行った行為ではない！過去の…極めて少数の人々が犯した過ちだ！じゃあ聞くが…今まさに産まれたばかりの赤ん坊が居るとする。その子は極悪人か！？」

「……………いや…違う……………だが、何れ悪事を働くかもしれない！」

「じゃあ、その赤ん坊がこの村に迷い込んだらどうする？殺すか？言っておくが、赤ん坊を村から追い出したらすぐに死ぬぞ。殺したと同じ事だぞ！」

「産まれたばかりの赤子ならば、我らの手で育てる。赤子に罪はない！」

「では、その子が成長しアンタの娘と恋に落ちたらどうする？人間だから反対するか？何れ大悪人になるかもしれないから拒絶するか？」

「我らが育てなのだ！悪事を起こす訳がない！反対などせん！！」
エルフの女王は立ち上がり、リュカをきつく睨み付ける。

「その通りだ！育ってきた環境によって人間は変わる。優しい人に他人には優しくするようにと言われ育ったのなら、他者を傷つける様な事はしない人物になる。その青年だってそうかもしれないだろう！それを調べもしないで決めつけた！エルフの女王という立場だから、娘が人間と仲良くする事を許す訳にいかなかったんだ！アンタは娘より、自分が大切だったんだ！」

リュカの言葉に力無く腰を下ろす女王…

「……………貴様に…何が…分かる……………」

「分かるさ！僕にも娘が居る。もう嫁いでしまったけど…初めて僕の前に彼氏を連れてきた時は、ぶん殴ってやろうかと思ったけど、娘が…ポピーが悲しむからやめた。でも、やっぱり腹立つからね、ちよつと嫌がらせをしてみたんだ。そしたら、その男真に受けちゃってね…本当に危険な地域に赴いて、魔族を倒して来ちゃったんだ。そして娘との仲を認めて貰う為ならって、僕にまで攻撃してきた…これ程ポピーの事愛してるなら、これ以上反対できないでしょ

う…結婚式では凄く幸せそうだったよ」

リュカは嬉しそうに娘の事を語る。

それを見た女王に言葉は無い…

ただ俯き、出て行くようにと手で合図する

エルフの宮殿を後にしたアルル達は、エルフの隠れ里の出口を目指し歩き出す。

「リュカさんの娘さんて、もう結婚してたんだ」

「何だウルフ？僕の娘を狙ってるのか？まだ居るぞ！」

「別にそんなんじゃないよ！ただ、どんな人なのかなと思って…」

「うん。外見は母親似でものっそい美人だよ。性格は僕に似てるっ
てよく言われる。あそこまではっちゃんけてはいないつもりだけどな

あ…」

アルル達は想像をして震え上がった…

リュカのような性格の女が居る事に…

そんな女の存在に…

儂い命、強固な愛

< エルフの隠れ里付近の森 >

「しかし探すとしても何処を探します？10年も前の事ですよ！何処か別の土地に渡ってしまったかもしれないし…」

ハツキの嘆きにエコナも同調する。

「そやで！もうほつといてロマリアへ戻りましょ。そない義理を尽くす必要ないやん！」

「そんな訳いかないわ！イノックさんと女王様に約束してしまったんだから」

「うん。それに、そんな遠くには行ってないよ。この森を探せば、二人ひっそりと暮らして居るよ」

「リュカさん、この森に居るってどういう事！？何でそんな事言い切れるの？」

ウルフだけでなくアルル、ハツキ、エコナもリュカの言葉に興味を持つ。

「うん。それはね…あのジジイが言ってたじゃん。『1週間たつても戻る気配がなく、心配になり近隣の村や町を探し回った』って…しかも2ヶ月間も探したみたいだし。自分の息子の事だからね…そりゃ真剣に探したんだと思うよ。それなのに足取り一つ見つからないって事はだ…近隣の村には近付いてもいないって事だよ。なんせエルフは人間達におそれられてるからね。何処にも行く事なんて出来ないよ」

リュカの説明に納得する4人。

「ほな、この森全体を探さなあかんやん！何日かかる事やら…」

「人間が生活する以上、住処から一步も出ないで生きて行く事は出来ない。食料調達等であつちこつち歩き回ってるはずだから、そんなに大変じゃないよ」

そう言うとリュカはサッサと森の奥へと入って行く…

実を言うとアルル達は、この森に入ってから方向感覚を無くしているのだ。

その為、リュカとはぐれると遭難してしまう恐れがある。

みんな慌ててリュカについて行く。

暫く森の中を彷徨うと、湿っぽい雰囲気醸し出す洞窟が口を開けてるのを発見した。

「さすがにこの中には居ないだろう…」

「甘いなウルフ君。あの二人は誰にも邪魔されない所に行きたいんだ！エルフはもちろん、人間さえも絶対入って来ない洞窟…完璧じゃないか！」

若者4人は不満げだが、リュカがドンドン進んで行く為、ついて行かざるを得ない…

<ノアニール西の洞窟>

此処は有り触れた洞窟だ…

湿気とカビ臭さとモンスターの気配…

テンションの低い4人を励ます為に歌うリュカ。曲目はジユディ・オング『魅せられて』。そして案の定4人は戦闘を強いられる。

一行は幾度も勝利を重ねながら、洞窟内を奥へと突き進む。

目の前に奇妙なモンスターが現れた。

まるでキノコのお化け…『マトango』である。

3匹のマトangoは一斉に『甘い息』を吐き、それを吸い込んだアルル達は簡単に眠り着いてしまった！リュカ以外…

「あれえ…みんなお疲れでしたか？これってピンチじゃ〜ん！」

危機感など感じていないリュカは、ドラゴンの杖でマタンゴを一掃！
眠れる美少女3人と居眠り少年1人を担いで、更に奥へと進んで行く。

最初に目を覚ましたのはアルルだった…

周囲を見回すと、そこは美しい地底湖の畔…

そして少し離れた所にリュカが佇み、何かを読んでいる。

慌てて他3人を起こすアルル。

それに気付いたリュカがアルルに手紙を手渡した。かなり古い手紙だ…

その手紙には【お母様。先立つ不幸をお許し下さい。私達はエルフと人間。この世で許されぬ愛なら…せめて天国で一緒になります。

アン】と…

「これって…」

「…エルフの女王の娘…アンの最後の言葉だ…その宝箱に、ルビ
ーと短剣…それとその手紙が入ってた…」

リュカの頬を涙が伝う…

リュカだけではない…皆、涙がこぼれ出る…

「様子を見守るだけで良かったんだ…誰でもいい、エルフでも人間
でも…親が意固地に反対しなければ…そうすれば…死ぬ事なんて…」

「帰りましょ…そして女王様とイノックさんに伝えないと…」

アルル達は洞窟を後にする…沈痛な面持ちで。あのリュカですら…

<エルフの隠れ里>

アルル達は再度エルフの女王の宮殿へ赴いた。

入口にはカリーの姿がある。

「リュ、リュカ…また来たのか…もう、女王様には会わせぬぞ！」

リュカは悲しい表情のまま、懐から古びた短剣を取り出しカリーに見せる。

「これ…君のだろ…君の名前が彫ってあるよ…アンに渡したのかい？」

それは洞窟でアンの手紙と一緒に入ってあった短剣だ。

「こ、これは！？私がアン様にプレゼントした『聖なるナイフ』だ！ど、何処でこれを？」

リュカは事の顛末をカリーに話した…

「そんな！アン様が…（うっ）…アン様が…！」

カリーは短剣を抱き締め、泣き崩れた。

そしてリュカ達は女王の元へと歩み出す。

「また来たのか！？不愉快な人間め！」

不快感を露わにする女王に、アルルは夢見るルビーを差し出す。

「そ、それは！？いつたい何処でそれを？」

リュカは黙って手紙を渡した。

女王は手紙を読み始めると、体を震わせて泣き出した…

「私が認めなかつたばかりに…私が…（うっうっうっ）…アン…ごめんなさい…アン…！」

ただ黙っていることしか出来なかった…

女王を責める事も、慰める事も出来ず…

リュカ達は目を伏せ、一緒に悲しむ事しか出来なかった…

「世話になったな人間よ…いや、リュカと申したな。カリーから聞いたぞ」

「……………ノアニールの件ですが…」

「うむ。これを持って行くが良い」

リュカは女王より、粉末の入った袋を受け取った。

「それは『目覚めの粉』よ。その粉を風に乗せてノアニールに撒けば、呪いの効果は消え去り、皆目覚めるでしょう」

「ありがとうございます」

「それと、今宵はこの村に宿泊してゆきなさい。もう夜も遅い…もてなす事はしませんが、寝床を一晚提供しましょう」

女王の突然の提案に、驚きを隠せないアルル達。

しかしリュカだけは驚いた風もなく、優しく礼を告げる。

「ありがとうございます。女王様」

そのリュカの一言に、顔を真っ赤に染めて女王が呟く。

「べ、別に…人間を許した訳ではありませんから！こ、今回の事への感謝の気持ちですから！」

これは、もしかしたらツンデレというヤツでしょうか？

今後のエルフ族の未来が心配です。

傳い命、強固な愛（後書き）

二人のエルフの心を魅了したリユカ！

そして夜は更けて行く…

今宵、リユカの隣で寝息を立てるのは果たして誰か！？

女の戦いが今始まる！

闘技場でモンスター同士を戦わせるより、こっちの方が面白そうだ
！

目覚め

< エルフの隠れ里 >

まだ夜も明けきらぬ前に、リュカの寝ている部屋の前に集まる4人。エルフ達を刺激せぬ様、早めに村から出て行く為、身支度を調えたのだが…案の定リュカが起きてこないのだ…

「なあ…リュカはんの事や、誰が女を連れ込んだるんやないか？」

「連れ込むって…エルフしか居ないのよ!？」

「カリーって女戦士じゃないか？剣を突き付けておきながら、抱き寄せられてたぞ!」

「女王様もリュカさんの笑顔で虜になつてた様に見えましたよ!」

ヒソヒソとそんな話をしていると、リュカが部屋から静かに出てきた。

「あれ？みんなどうしたの？」

すぐに扉を閉めた為、中を確認する事は出来なかった…

「リュカさん…中に誰か居るんですか？」

「……………そんな事を聞く必要がある？」

リュカは昨晚の事を教えるつもりはない様だ。

「世の中には知らなくていい事もあるんだよ。それが大人になるって事だよ。諸君!」

リュカは4人を部屋から遠ざけ、退村を促す。

エルフ族と人間との間でトラブルが起きぬ様、祈るしかないだろう…

< エルフの隠れ里近郊の森 >

「ハツキ…」

リュカはエルフの隠れ里よりノアニールへと向かう道中、ハツキに

声をかける。

「はい、何ですかリユカさん？」

「これ…カリーから貰ったんだけど…ハツキが使つてよ」

そう言つて手渡されたのはアンが使用してた聖なるナイフだ。

「こ、これって！？アンさんの形見じゃ…！？」

「うん。カリーに渡したんだけど、僕等が役立てた方がアンも喜ぶからって…」

「で、ベットの中で渡されたんですか？」

「…イッテルイミガワカリマセン」

「……………」

ジト目で見つめるハツキ…

視線を合わせないリユカ…

「ふう…そうですね、アンさんの為に私が使用させてもらいます」

「ありがとうございます」

「でもナイフだと攻撃範囲が狭いから、素早く動ける様に特訓しないと…」

「うん。僕も手伝うよ」

リユカの笑顔と一緒に特訓と言つご褒美に、昨晚の事などどうでもよくなつてしまうハツキだった。

<ノアニール>

アルル達が村へ入ると、奥の方からイノック老人が小走りで近付いてくる。

「おお…アルル殿！エルフの女王には会えましたか？」

側に立っていたリユカとは視線を合わせず、アルルとだけ話を進める。

「はい。呪いを解く方法入手にも成功しました…」

「なんと…！ありがとうございます！では、早速…」

「アンタ、自分の息子の行方はどうでもいいのか？」

冷たい口調でリュカが問う。

「いいわけない！……だが、探しようがないのだ……足取り一つ掴めなかったのだから……」

イノック老人は怒りと悲しみの目で、リュカを睨み付ける。

「何処か別の地で……二人幸せに暮らしていると思ひ、祈るしかないだろう……」

「僕達は足取りを見つけてました……」

「……！本当ですか！？そ、それで何処に……！？」

イノック老人は驚き、絶る様な表情でリュカに詰め寄る。

「………」

だがリュカは答ええない……アルル達も答える事が出来ない。

「………ま、まさか……」

「………この世じゃ添い遂げられないと悟り、二人天国で幸せになる為に……」

「そ、そんな……（うつつ）！」

リュカの言葉を聞き、両手で顔を覆い泣き崩れるイノック老人。

「……貴方が……せめて貴方だけでも味方をすれば……父親である貴方が、自分を犠牲にしても守つてやれば……」

リュカは懐から、目覚めの粉を取り出し空中へばらまく。

粉は風に乗れ、村の隅々まで行き渡る。

すると、其処彼処から人々の声が聞こえだした！

「ジイさん……村の人達への説明はアンタに任せる。呪いで10年間眠り続けた事を、伝えるか伝えないかは……伝えれば、きっと皆怒るだろう！呪われる原因を造ったアンタの息子と……そしてアンタ自身も……責められるだろう……」

リュカ達は泣き崩れるイノック老人を尻目に、その場を立ち去った。心身共に疲れた為、今日は宿屋で休み、ロマリアへ帰るのは明日にすることに……

村中の人々が、荒れ放題の村を見て驚いている…

そんな中、アルル達は宿屋へ赴く。

数日前に勝手に宿泊した為、アルルは少し後ろめたそうだ。

「あ、あの…5人一晩なんですが…大丈夫ですか？」

「もちろんだとも！5人で25ゴールド。…ただ少し待っていてくれ！何故だか客室が荒れててね…急いで片づけるので時間をください。」

「ぜ、全然大丈夫です！どうぞごゆっくり！！」

客室を荒らしたのは、数日前のアルル達…

そんな事知らない店主は、慌てて2階へ行き部屋を整える。

その間、アルル達はロビーの椅子に座り待つ事に…

其処には一人の若い女性が物思いに耽っていた…

無論リユカがスルーするわけもなく、口説き出す。

「お嬢さん、何か悩み事ですか？僕がご相談に乗りますが…ベットの中で」

この男、何時もこんなストーリーなんですかね？

「ありがとうございます…私、失恋しちゃった…」

女性は少し微笑むと、悩み事を語り始めた。ベットの中にはないけれど…

「昨晚、あんなに愛し合ったのに…今朝起きたら居なくなってたの、彼…」

「けしからんヤツだ！貴女のような美しい女性を、黙って捨てるなんて！何てヤツですか！？出会ったらデコピンしてやりますよ！」

「ふふふ…面白いのね、アナタ。」

「ありがとうございます。僕の名前はリユカ。ベットの中では、また違った僕をお披露目出来ませんが…」

「私はジェシカ。そして私を捨てた男はオルテガ…もし、出会ったらデコピンをよろしくね」

「あの…も、もう一度…男性の名前を…」

アルルが立ち上がり、ジェシカへと詰め寄る。

「え！？ええ…オ、オルテガよ…そ、それが何か…」

「ねえアルル…もしかして…あ「それ以上言わないで！」

ハツキの言葉を遮り、考え込むアルル。

オルテガ…それは10年前に魔王バラモス討伐の為に、アリアハンから一人で旅立ち、そして散った男…しかもアルルの父親の名前である！

アリアハン出身のハツキとウルフは、その事を分かっている為、アルルを気遣い心配そうに見守っている。

そんな事知らないリュカは、ジェシカを口説き相部屋の了承を得ていた。

「皆さん、お待たせしました。お部屋のご用意が整いました。どうぞおくつろぎください」

リュカのナンパが成功したタイミングで、店主が2階から下りてきた。

リュカだけが女性を伴い、部屋へと消えて行く…

暗い表情で部屋に入るアルル…

他の3人は、戸惑いながらも旅の疲れを癒す為、各々の部屋へと入って行く。

翌朝、あまり眠れなかったアルルは、皆が起きる前にベットから起き、村内を散歩する事に…

其処には、既に起きていたリュカが小鳥達と戯れている。

父親と関係を持った女性と、昨晚関係を持った憧れの男性…リュカ。アルルの気持ちは複雑になり、リュカにどの様に接しているのかわからない。

「おはようアルル。どうしたの、元気ないね？何か相談事があるなら聞くとよ」

「…………… オルテガとは…私の父なんです…」

「オルテガ？誰？」

さすがにイラつくアルル。

「昨日出会った、ジェシカさんが言ってた男です！」

「…………… ああ！ジェシカさんの元彼ね！へー、さすがアルルのパパさん。趣味が良いね！」

「（イラ）趣味がどうかじゃないです！父は私やお母さんを置いて、旅だったんですよ！それなのにこんな所で浮気をして…」

「イヤイヤ、浮気じゃないよ。ジェシカさんから聞いた話では、モニターに襲われている所を、オルテガさんに助けられて、惚れちゃったジェシカさんが、お礼と称してベットで迫ったんだって。まあ…もちろん、据え膳食わねばってヤツで、やる事はやったみたいだけど…」

「同じですよ！お母さんを裏切ってるじゃないですか！」

「男なんて、そんなもんだよ…」

「父はお母さんの事など愛してないという事ですか？リュカさんもそうなんですか！？」

アルルは泣いていた。

リュカは優しくアルルを抱き寄せ、その場に座ると膝の上にアルルを座らせ宥めながら話す。

「アルルのお父さんは、お母さんの事を愛してるよ。」

「何でそんな事言えるんですか！」

「大好きな人の為に、世界を救う旅に一人で出たんだ！お母さんの事を愛していなければ出来ないよ。」

「じゃあどうして…」

「男つてのはね、欲求を止められないもんなんだ！人によって処理の方法が違うだけで、皆同じなんだよ。」

「処理の方法？」

「そ！自分の手を使う人もいれば、僕みたいに女性をナンパする人も居る」

「そんな身勝手な！」

「身勝手だねえ…僕もビアンカの事を愛してるよ。この世で一番…でも、身勝手なんだ…困ったねえ」

「男の人はズルイです！そんな人、嫌いです！身勝手じゃない真面目な人が私は好きです。」

「うん…じゃあアルルには、僕の息子がお似合いかな？」

「ティミーさんですか？真面目なんですか？」

「うん。父親とは正反対！」

「そうですか…会って見たいですねえ…」

「そうだね、年頃もアルルと同じくらいだし…バカが付くぐらい真面目だからね。もてるのに、摘み食いしようとしらないんだ。男としてどうなの？って思うよ…」

「……（スー）…（スー）……」

気付くとリュカの腕の中で寝息をたてるアルル。

少しだが心の蟠りが解け、安心してしまったのだろう。

リュカが優しく抱き上げ、宿屋までアルルを運ぶ…

どうやら今日の出立は、遅くなりそうだ…

継承

<ロマリア>

「おお！さすがは勇者一行！よくぞ取り戻してくれた！」

アルル達はロマリア城へ入るなり、謁見の間まで急かされる様に通され、今は王様よりお褒めの言葉を賜っている。

「お褒め頂き恐縮です。しかしカンダタ本人は逃してしまいました……申し訳ございません」

「よいよい……女性を助ける為に已むなしと聞いておる！」

「随分と詳しいツスね！？見てたんですか？」

リュカの不躓な質問に、王は笑って答える。

家臣の方々は不愉快極まりない顔をしている。

「お主等が助けた女性から聞いたのだ。窓の外に縛り吊されてた者だ。憶えておるだろ？」

「お元氣ですか？」

「うむ。お主に感謝しておったぞ！」

リュカは嬉しそうに頷く。

「……褒美の件だが……話をまとめると、リュカ……お主一人の力で、なし得た様に思えるのだが……」

「そんな事ないツス！みんなの協力でなし得た事ツス！」

「殊勝な事だ。だが、お主が盗賊団を壊滅させたと、報告がきておるのだよ！」

「その通りです陛下！私達は一緒にシャンパニーの塔まで行きましたが、何も出来ずにいました！彼一人の功績です！」

珍しくリュカが辟易している事に、アルル達は少し楽しんでいる。

「ではリュカに褒美を取らせよう！」

ロマリア王は嬉しそうに立ち上がり宣言する。

「リュカ！お主にロマリア王国の王位を譲ろうぞ！」

「……………どうしてもダメか？」

「しつこいおっさんだな！王になって良い事なんか一つもない！最早誰も言葉遣いを注意しない。」

「……………仕方ない…諦めるとしようか…だがリュカよ！何時でも代わってやるぞ！自由に飽きたら何時でも来い！」

ロマリア王はにこやかに玉座へ戻る。

「飽きないよ！」

「では、他に何か欲しい物はあるか？何も褒美をやらない訳にはいかぬのだが…」

ロマリア王の問いに少し考えたりユカは、アルルを見て問いかける。

「アルルは何か欲しい物ある？」

急に権利を譲られ戸惑うアルル。

「……………そ、そうですね……………あの、可能なら船を頂けますか？今後の旅に必要なと思うので…」

「ふむ…船か…我が国にも無いわけでは無いのだが…我が国の船では、お主等の役には立たんよ」

ロマリア王の言い分では…

船、1隻で大海原へ出ても、海の強いモンスターに沈められるのが落ちである。

船団を組んで航海するのなら何とかなるが、1隻では船自体が丈夫でないと、意味がないと言う。

「そう…ですか…」

「ただ『ポルトガ』なら、造船技術が発達しておる故、強固な船を造る事が出来るであろう」

「ではポルトガへの通行許可を頂けますか！？」

「それには及ばぬ！もう既にお主等はフリーパスだ！ロマリアから何処へ行こうが、私に許可を取り付ける必要はない。だが困った事に、ポルトガへ通じる関所なんだが…」

歯切れの悪いロマリア王。

「何か問題でも……」

「……………鍵が無い……」

「は？」

「モンスターが蔓延っていたのでな……関所の門を閉めてしまったのだが……鍵を無くした……まあ、モンスターの行き来を阻害する為に閉めた訳だから、いいかなと思って合鍵を造って無い……壊されると困るのだ。鍵を開ける事が出来たのなら、自由に通行してくれ！」
結局、アルル達はロマリア内フリーパスの権利以外、何も貰えなかった。

むしろ問題が山積して行く事に、リュカ以外が頭を悩ます……

「どうでしょう？」

宿屋へ戻った一行は、いつもの様にリュカの部屋で作戦会議を行っていた。

「ナジミの塔で貰った、盗賊の鍵じゃ開かないかな？」

「やってみてもいいけど、開かなかった時の為に別の方法も考えとかないと……」

ウルフの提案にアルルは難色を示す。

関所を閉める様な鍵だ。

簡単な造りの訳が無い。

「じゃあ、どうすんのや！」

「……………」

誰も何も思いつかない。

堪らずアルルはリュカに頼る事に……

「リュカさんは……何か打開策がありますか？」

「うん。『魔法の鍵』を探しに行こうよ。『イシス』って国にあるらしいから」

「何でそんな情報を持ってんだよ！」
愚問である。

「ジエシカさんから聞いた。ジエシカさんは元彼から聞いたらしい。その元彼が探しに行ったみたいだよ」
アルルの顔を歪る…

「また女かよ…」

皆、呆れ顔だが他に何も思いつかない為、リュカの情報を頼りにイシスへと向かう事となる。

先ずは『アツサラム』へ向けて…

別世界より？

<ラインハット>

ラインハット謁見の間に、特使として訪れたティミーが傳えている。

「おいティミー！そんな他人行儀に畏まるなよ！」

「いえ、そう言うわけには参りません。私はグランバニアの特使として参りましたので…」

相変わらずバカ真面目である。

「アンタそんなだから彼女が出来ないのよ！もう少し柔らかくならないよ。男が堅いのは一部分だけでいいのよ！」

《この女のこう言う所が嫌いだ！公式の場という事を理解してるのか！？》

イラつきポピーを睨むティミー。

楽しそうに微笑むポピー。

この二人は双子の兄妹である！これでも…

「まあまあ…それでティミー君、どのような用件でいらしたのですか？」

国王のデールが場をまとめる。

・
・
・

「相変わらずトラブルに巻き込まれる男だな…」

ヘンリーが笑いながら感想を述べる。

「ヘンリー様！笑い事ではございません！我が国は現在、国内に敵が多数存在します。ラインハットのご助力が無ければ、我がグランバニアは窮地に陥ります」

「貴族から税金を取るからだ。貴族ってのは気位だけは高いからなヘンリーの笑いは止まらない。」

「ぶつ殺しちゃえばよかつたのよ！拳兵した時に…」
ポピーが笑顔で物騒な事を言う。

「まあ…そう言うわけにもいかなかったのだろう…」
さすがに引くヘンリー…

「（ゴホン）分かりました。我がラインハットは可能な限りグラン
バニアをご支援致します」

デルの力強い言葉に、ひとまずは安堵するティミー…
そして表情を切り替え、もう一つの難題に立ち向かう覚悟を決める！
「さて…ラインハットのご協力を得た所で、ポピーに頼みがあるの
だが！」

ティミーの言葉にポピーの瞳が輝く！

「何？何？何？何？何？愛しのお兄様が私にお願いって？『童貞捨て
たいから体かせ』とか言っちゃう！？やだ、ちょく楽しみ！！」

イライラするティミー、ワクワクするポピー。
拳を握り締め、怒りを我慢しつつ話を続ける。

「父さんを助け出すのに、協力をしてほしいんだ！」
少しキレ気味のティミー。

「あ…！？何言ってるの？わざわざ改まって言う事？言われなくて
も協力するつもりよ私！この後サンタローズへ行くんでしょ！？そ
してマールサお祖母様と一緒にグランバニアに戻るんでしょ！？私は
そのつもりよ」

完全にキレルポピー。

「あ…ああ、よろしくお願いしたい…」

「あのねえティミー…アンタだけのお父さんじゃないのよ。私にと
つても大切なお父さんののよ！」

「うん。ごめんね…じゃあ、早速サンタローズへ行こう！」
少し自分の妹を侮っていた事に、反省する…

「ちよつと待って！着替えてくるから！…あ！私の着替え…見たい
？」

「本気でどうでもいいから、早くしてくれ！」

やはりポピーはポピーだ…

ティミーはもう一人のトラブルメーカーと共に、サンタローズへと向かう…胃に穴が空く思いをしながら。

<サンタローズ>

「あらティミー君、いらっしやい。残念ながらリユリユは出かけてるわよ」

ティミーとポピーはサンタローズに着くなり、シスター・フレアに出会いリユリユ不在を聞かされる。

「残念ねえ〜ティミー！もう帰る？」

《コイツ、弟だったら絶対殴ってるのに！》

「今日はマーサ様に用があまりまして…ご在宅ですか？」

「ええ、マーサ様なら…」

ティミーはシスター・フレアと別れ、サンチョ夫妻と共に暮らす祖母の元へ赴く。

「ティミー様、ポピー様！お久しぶりです。……………ティミー様…リユリユちゃんならご不在ですよ？」

サンチョがティミーの来村を不思議そうにしている。

「何で僕がサンタローズへ来ると、リユリユ目当てと思われるの！？」

「事実だからでしょ！」

ティミーの憤慨に爆笑しながら答えるポピー…

「あら？ティミー、ポピー…いらっしやい。……………でもリユリユちゃんは今村に居ないのよ…」

そこに2階から下りてきたマーサも、リユリユ不在を伝える。

「……………いえ、今日はマーサ様に用があまりまして…」

「まあ、私に…何かしら…リユカの行動なら止められませんかよ」

実の母親にこんな事を言わせるとは…

「実は…」

・
・
・

「あの子は飽きの来ない人生をおくってますね…」

これまでの状況を聞いたマーサは呆れるばかり…

「それで私の異界へのゲートを開ける力が必要と…しかし、私の力は魔界の門を開ける力…今回役に立つかどうか…」

困り顔で答えるマーサ。

「父さんが言ってますました！『行動する前に諦めるのは愚か者だ』と…ともかくグランバニアへ来て頂けませんか？あの不思議な本を調べれば、何か分かるかもしれません」

「行動する前に諦めるのは愚か者ですか…良い言葉ですね」

「お祖母様。お父さんは女性を口説く時に、その言葉をよく使っていましたわ。『口説くだけ口説いて断られたら、諦めればいい。行動する前に諦めるのは愚か者だ』って？」

「なるほど…あの子らしいですね…」

「因みにティミーは、行動する前に諦めるのは愚か者よ。口説こうともしない！」

ポピーの言葉に辟易しているティミーが答える。

「リユリユは妹だ！口説く気は無い！当たり前だろ！」

「あらあら…別にリユリユの事ではないのですが…やっぱり忘れられないんでしょう？」

「こら、ポピー！ティミーが可哀想でしょ！あんまりからかわないの！」

「は…い。ところでリユリユは何処へ行ったの？」

ティミーも行方が気になる様で、マーサの答えを待っている。

「確か…リユカに教わって、ルラフェンって町に行ってみたみたい…何か特殊な魔法を憶える為だって…」

「特殊な魔法…？何かしらね！？」

「父さんは色んな事知ってるなあ…ルラフェンかあ…どんな所だろ？」

「……………さあ、こうしても始まらないわよ！グランバニアへ行きましょう。困った息子を連れ戻す為に！」

ティミーはポピーとマーサを連れ、ポピーのルーラでグランバニアへと戻る。

リュリュに会えなかった事を、非常に残念に思いながら…

別世界より？（後書き）

みんなのアイドル、ポピー様が久しく登場！！

こんな素敵な妹が居て、ティミー君が羨ましいですよね！

ところで…『ついにアツサラームだ！はっちゃけフェスティバル！

！』を期待されていた方にはごめんなさい。

楽しみは次話に持ち越します。

お友達

<ロマリア〜アツサラーム>

アツサラームへと続く大草原に響く歌声…『カントリーロード』を
気持ちよさそうに歌うリユカ。

モンスターの一団に襲われ、戦闘を余儀なくされるアルル達…

「ふう…俺達結構強くなってきたよな！」

戦闘を終え、ハツキのホイミで傷を癒しながらウルフが感想を述べる。

「そうね…戦闘回数だけはい多いもんね…そりゃ強くもなるわよ！」
アルルは、まだ歌い続けているリユカに嫌味を言ったが、気にする様子は微塵もない。

「あ、ある意味リユカさんのお陰で強くなってるんですね！…私達の為に歌ってるのかな？」

自分の歌に浸っているリユカを4人が見つめる…

「…そんなわけないだろ！？」

ウルフの意見が満場一致で可決された。

<アツサラーム>

まだ夕方と呼ぶには早い時間、アルル達はアツサラームへと辿り着いた。

一行は何時もの様に宿を確保し、町へと繰り出し旅に必要な物を購入する。

幾つかの店を見回ったアルル達は、1軒の店で足を止める…

「おお、私の友達！お待ちしております！売っている物を見てい

つて下さい！」

店内へ入った途端、度を越えた愛想の良さで話しかけてくる店主…

「と、友達つて…私達の事？」

「そうです、そうです！皆さん、私の友達！」

「イエーイ！僕達友達！友達価格で売ってちょうだい！」

「はい、私と貴方、友達！買っていつてちょうだい！！」

店主と一緒にしゃぐリュカ。

そんな中、売っている物を見るアルル達。

「結構良い物売ってるわね…」

「この杖…『魔道士の杖』か！？」

ウルフは1本の杖を手に驚いている。

「おお！さすが友達、お目が高い！24000ゴールドです。お買
いになりますよね！」

「に、24000ゴールド！？買えるわけ無いだろ！」

「おお、お客さん。とても良い物上手。私、参ってしまいます。で
は、12000ゴールドに致しましょう。これならいいでしょう？」

「おいおい、いきなり半額かよ！」

リュカが小声で突っ込む。

「それだつて高いよ！」

「おお、これ以上まけると、私大損します！でも貴方友達！では、
6000ゴールドに致しましょう。これならいいですか？」

「おお、友達！僕達にはこの杖が必要。友達を救うと思って、もっ
と安くしてえ！」

リュカが調子に乗って値切り出す。

「おお、貴方酷い人！私に首吊れと言いますか？分かりました。で
は、3000ゴールドに致しましょう。これならいいでしょう。」

当初の8分の1に値さがった魔道士の杖…

「おお、僕達モンスターと戦うのに、この杖が必要！それなのにこ
んな高値で売るなんて！アナタこそ僕達に死ねと言いますか！？」
リュカが楽しそうに値切り続ける。

「そ、そんなつもりは…わ、分かりました…1500ゴールドで…
どうでしょう?…こ、これ以上は安く出来ませんよ!」

店主の口調が変わり、表情も引きつっている。

「おいおい!僕達友達だろ!アナタが最初に言い出した…友達だつたら、もつと安く出来るよな!?」

リユカは満面の笑みで店主の肩を抱く…ただ、声のトーンが笑って無い!

「し、しかし…私にも生活が…」

「僕達には旅が待っている!旅先では危険が付き物だ!折角出会えた友達だが、今日で最後かもしれない。そんな友達を見捨てるなよ!…安くできないのなら、その『マジカルスカート』を、オマケにつけてよ。いいよね!」

「……………そ、それは……………」

「と・も・だ・ち…だろ!!」
半ば脅しである。

「分かりました…魔道士の杖とマジカルスカート…1500ゴールドです…」

店主が力無く承諾する…しかしリユカの攻撃は止まらない!

「おお、友達!ありがとう、さすが友達!じゃあ、はい。1500

ゴールド!杖とスカート3着貰って行くよ!」

「さ、3着!!?な、何で3着も!?」

「だって女の子3人居るんだよ。3着必要でしょ!じゃあ友達!またね」

「に、2度と来るな…!!」

店主の悲痛な叫びが店内に木霊する。

「ほらウルフ。大事に使えよ!」

店から少し離れた所で、先程の戦利品をみんなに配るリユカ。

「しよ、商人顔負けの値切りっぷりやな!店のおっちゃんに同情し

てもうたわ！」

「魔道士の杖とマジカルスカート3着を、鉄の槍より安く買うなんて……リユカさん買い物上手！」

「最初に吹っ掛けてきたのはあつちだ！」

「それにしても、やっぱり凄いなリユカさんは！勉強になるよ」
羨望の眼差しでリユカを見るウルフ。

「さあ、取り敢えず買い物は済んだでしょ？一旦宿屋へ戻ろうよ。
お腹空いちちゃった」

アルル達はリユカの希望で宿屋へ戻る。

少女3人は、リユカがくれたスカートを穿き、宿屋1階のレストランへ現れた。

「ど、どうですか……似合います？」

少し恥ずかしそうにハツキが訪ねる。

「このスカート、防御力があるのね……この先、重宝するわ！」
照れ隠しをしながらアルルが喜ぶ。

「戦闘で激しく動いたら、パンチラし放題やな……リユカはん、それが目当てなん？」

リユカの前で一回転してエコナが可愛く微笑む。

「うん。僕の思った通り、みんな可愛い！値切って良かった……！」

「俺の所にはスカート見せに来ないのは何故？」

ウルフの寂しそうな問い掛けにハツキが答える。

「だってアンタ、購入に何も寄与してないでしょ！リユカさんが買ってくれたんだから！」

「出だしは俺の魔道士の杖からだろ……！」

「まあまあ……そんなに拗ねるなよウルフ。後で一緒に『ベリーダンス』見に行こうよ！」

「……………リユカさん、ベリーダンスって何ですか？」

「うん！アツサラムの劇場でね、毎晩裸同然のねーちゃんが踊るんだって！さつき町の人に聞いたんだ！だからさっさと夕飯済ませ

て、町に繰り出さないと！」

「何や！ダンスならウチがリュカはんの上で、幾らでも踊るねんで！」

「うん。それはまた今度楽しませてもらうよ」

本当にさっさと夕飯を済ませたリュカは、ウルフを伴い町へと繰り出す。

アルルとエコナは夜間営業の武器屋に行く為、男二人のお目付役はハツキになった。

「あー…楽しみだな〜！どんなダンスなんだろう？ブルンブルン揺れちゃうかな!？」

「もう！リュカさんエッチすぎです！ウルフもそう言うのが好きなの？エロガキね！」

ウルフは何も言えず黙り込む…

幼い頃から面倒を見てくれたハツキには、やはり逆らえないのだ。

「あ〜ら、素敵なお兄さん！ねえ、パフパフしましよ。いいでしょ？」

リュカ達は不意に女性に声をかけられた。

「…パフパフ〜？」

怪訝そうなりユカ。

「…パフパフって何ですか？」

本気で知らない純情ウルフ。

「きつと如何わしい事よ。相手しちやダメ！」

決めつけるハツキ。

リュカは女性の胸を注視して呟く。

「それで出来んの？足りなくね？」

「な！！失礼ね！」

「あの、パフパフって何ですか？」

「あら、坊やは興味あるの？お姉さんが優しく教えてあげるから、

私の部屋に来ない？」

女性はウルフを妖しく誘う…

「よしウルフ！何事も経験だ！行ってこいよ！僕はベリーダンスを堪能してくるから！」

そう言うトリユカはその場を立ち去ってしまった…もちろんハツキも一緒に…

そして残されたウルフは、女性に手を引かれ彼女の部屋まで付いて行く事に…

大人の階段を登りきる事が出来るだろうか！？

ウルフに幸せは訪れるのだろうか！？

砂漠

<アツサラーム>

まだ日も昇りきらない早朝、ささやかな事件が発覚した。

昨晚の体験を追い払うが如く、一人で魔法の特訓をしていたウルフが、特訓を終わらせ割り当てられた自室に戻ろうと宿屋の廊下を歩いていると、リュカの部屋から1人の女性が気配を消しながら出てきた。

「あれハツキ？何やってんの？…そこ…リュカさんの部屋だろ…え！？ま、まさか…うぐっ！」

リュカの部屋からこっさり出てきたのを、ウルフに目撃されたハツキは、慌ててウルフの口を手で覆い喋れない様に羽交い締めにする。そしてそのまま宿屋を出て、人気のない物陰へと連れ込む！

「…つぶは！ハ、ハツキ…お前もしかしてリュカさんと…」
ハツキの怪力から逃れたウルフが、ハツキに問いかける…

「そ、そうよ…だって…リュカさん…格好いいんだもの…」
俯きモジモジするハツキの顔は、薄暗くてもハツキり分かるくらい真っ赤だ。

「あ、あのね…みんなには…黙っててほしいの…」
「何で？」

「だって…その…恥ずかしいし…」
「俺は構わないけど…すぐにバレると思うけどね…」

「い、いいの！それより、アンタこそ昨日はどうだったのよー！」
ともかく話題を変えたくて、ウルフの昨晚の事を聞き出そうとするハツキ。

「……………頼む…聞かないでくれ…お願いだ…」

どうやらトラウマになる様な事があつたらしく、ウルフは半泣きで頼み込む……………いったい何が？

<砂漠>

アルル達一行は灼熱の砂漠を突き進む。

サンサンと輝く太陽の光を遮る物は何もない…

ただ、いつの間にも買ったのか、リュカが青く大きなパラソルを差し日陰を作り出している以外は…

しかしパラソルで作られた日陰に居ても、体力の消耗は著しく、リュカに合わせて歩くだけで精一杯の様だ！……リュカ以外！

リュカは異様にテンションが高く、パラソルを上下に揺らして歌っている。

歌うは『東京音頭』……ツバメ好きか？

だが誰も文句を言わない…この暑さで文句を言う気力も無くなっているのだ。

小さなオアシスを見つけた一行は、側に生えてある木を利用して簡易テントを作り、休める場所を確保する。

「ちょっと早いけど、今日はここで一晩明かすか…」

木陰でへたばるアルル達の為に、野営の準備を黙々とこなすリュカ。簡易食を手早く作り、皆を起こして食事をさせる。

「リュカさん…ありがとうございます…でもリュカさんは元気ですね」

「ほんま…何でそんなに元気なの？」

「僕は寒いのが苦手なんだけど、暑いのは平気なんだ！女性が薄着になるしね！それに以前、砂漠より暑いダンジョンを探検した事があるんだ！あそこは凄かったよ！」

昔を語り調子に乗ってきたリュカは、元の世界での冒険談を話し始める。

殺された父の遺志で、伝説の勇者を捜す冒険談を…

攫われた母を助ける為、伝説の勇者を探す…その為に天空の武具を見つけ手に入れる事…そして天空の盾を手に入れる為に挑んだダンジョンの事…

「ほなりユカはんは、盾を手に入れる為にフローラっちゅう娘と結婚したんか？」

「ううん。フローラとは結婚してないよ。滝の洞窟へ向かう前に再会した、ビアンカって言う幼馴染みと結婚したんだ！」

「でもフローラさんと結婚しないと、天空の盾が手に入らないんですよね！？それじゃお父様の遺志を果たせないじゃないですか！？」
「アルルも父の遺志を継いで、バラモス討伐に旅立った為、思わず過敏に反応する。」

「うん。そうだね…でもね、ビアンカが言ったんだ『リユカは沢山不幸な目に遭ってきたから、もう幸せになるべきだ』って…確かにフローラと結婚すれば幸せになったかもしれない…莫大な財産、巨大な権力、美しい妻…そして父の遺言の天空の盾」

「じゃ何で結婚しなかったんだよ！」
「簡単だよウルフ…僕を最も幸せに出来るのはビアンカだけだからね！」

皆がリユカの話を噛みしめている…納得できる部分も出来ない部分も…

「じゃあ…結局、伝説の勇者様は見つからなかったのですか？」
そんなハツキの質問を受け、リユカが笑い出した。

「あはははは！それがさ、笑っちゃうんだけどね…もし僕が真面目に勇者様捜しを続けていたら、永遠に見つける事は出来なかったんだよ！」

皆、不思議そうな顔でリユカを見続ける。

「僕が自己の欲望に負けてビアンカを選んだからこそ、勇者様と出会えたんだ！」

「ど、どういうことや？」

「なんと！伝説の勇者様は………僕の息子なのさ！あはははは、ち

よ〜うける〜！勇者を見つける為に…天空の盾を手に入れる為に、フローラと結婚してたら、伝説の勇者は誕生しなかったんだ！『伝説の勇者なんかどうでもいい！ピアンカと結婚できれば、世界なんてどうでもいい！』って結論に達したから勇者に出会えるなんて…何なのこの嫌がらせ？だから僕は神なんて信じないんだ！」

リユカという男の人となり、皆がそれぞれ驚いている。

特にエコナにとっては…

金儲けを夢見ているエコナ…何れは大きな権力を手中に入れたいと思っているエコナには…

《ウチには考えられへん！金と権力を手に入れた後に、愛人にすればええやん！それで全てが手に入るやん！》

「なあリユカはん…こんな事言うたら怒るかもしれへんけど…金と権力を手にした後で愛人にすれば良かったんとちゃう？奥さんもリユカはんの事好きなんやし、問題無かったと思うんやけど？」

人は誰しも、自分の思考の範囲内でしか物事を計る事は出来ない。エコナもまた人である。

「う〜ん…出来なくは無かったと思うけど…」

「なんや、煮え切らんない！」

「……………心は…どうなつてただろうね？」

「……………心？」「……………」

アルル達が一斉にハモる。

「僕はピアンカの心も愛してるんだ。でもピアンカを選ばなかったら、彼女の心はどうなつてただろう？その後で『一番愛してるのはピアンカだ』と言っても、愛より金や権力を選んだ僕の事を、心から愛してくれるだろうか？」

リユカは怒るところか、優しく問いかけてきた。

「…そ、そうは言うても、全てを手に入れるなんてムリやん！金、権力、美女…それに伝説の勇者！こんだけ手に入れば十分やん！」

「全然十分じゃないよ…美女の…ピアンカの心が手に入らなければ

……………」

エコナの瞳を見つめ、悲しそうに語るリュカ…

「逆に言えば、ピアンカと彼女の心が手に入れば、その方が十分満足なんだ！他の物は…まあ、何とかなるでしょ！？」

そんな満面の笑みで妻の事を語るリュカ…そして話は、惚気話へと発展して行く。

ウルフにはともかく、少女3人には苦痛となる時間だった！

ハツキの後日談だが…

『エツチの時の話まで、する必要は無いと思います！』

……あの男、何考えてるんだ！？

砂漠（後書き）

いったいウルフはどの様な体験をしたんでしょうかねえ？
きつと素敵な青春の1ページになったのでしょうかねえ！

砂漠の王国、砂漠の女王

<イシス>

イシス：其処は大きなオアシスの側に造られた砂漠の町。
町の奥には大きな城がそびえ立っている。

アルル達が到着したのは夕刻だった…

リュカ以外、疲れ果ててはいたが宿を確保すると、町へ出て様子を伺う事に…

「魔法の鍵の事を知っている人が居れば良いけど…」
そんなアルルの不安はすぐに解消される事となる。

曰く、「魔法の鍵？ああ！それなら此処より北の『ピラミッド』に保管されてるらしいよ」

曰く、「『ピラミッド』に入るのなら、女王様の許可が必要ね！勝手に入ったら、墓荒らしとして拘まりますよ」

曰く、「『ピラミッド』には、様々なトラップが仕掛けられている！頼まれたって入りたくないね！」

曰く、「女王様の美しさには、モンスターをもひれ伏すであろう！」
等々…

大まかに情報を仕入れたアルル達は、宿屋へ戻り作戦会議を行う事に。

此処は宿屋のアルルの部屋。

リュカ以外が集まり明日の予定を話し合う。

「これで、目的地が定まったわね！」

「そうですね。では、明日朝一で女王様へ謁見を致しましょう。許可を戴かないとピラミッドへは入れませんから」

「な、なあ…リュカさんは置いていった方が良くないか？」
ウルフが小声で話す。

「そやで！町でも美しいって評判の女王やで！下手したら、下手するやん！」

皆、見つめ合い頷く。

美女で女王…最悪の組み合わせだ。

どう転んでも碌な事にはならないだろう…

(コンコン)

「みんな、明日の予定は決まった？」

其処へ現れるリュカ。

実に良いタイミングである。

「あ！実はリュカさん、あ、僕、明日は町を探索してるよ」

リュカに留守番を頼もうとしたが、リュカの方から残留を表明してきた。

「え！？そう…リュカさん…残るのね…」

「うん。だから4人で謁見してきてよ」

アルル達にとつては願ってもない事だ。

そして宿屋から出て行くリュカ…

いったい何処へ行くのやら…

翌朝、リュカとの鍛錬を終えたアルル達は、女王へ謁見する為に城へと赴く。

城へ着き、係の衛兵に用件を伝えると、

「只今、女王様は別件にて政務中である！暫し此処で待つ様、仰せつかった」

と、待ち惚けを喰らう事に……しかもかなりの時間。

一方リユカは砂漠の美人を求めて、町中を彷徨っている。

《砂漠の国の女王様：きつとアイシスみたいな女だろう…：だいたい
イシスとアイシスって似てるんだよね！いくら美人でも、近付きた
く無い女だ！町でナンパしてる方が100倍マシだ！》

「ねえねえお嬢さん！僕とエッチしない！？」

「何だコラー！？俺の女房に何の様だ！」

「おおつと、ごめんなさ〜い！素敵な旦那が居るとは知らなかった
ので〜じゃあね〜」

そんな感じで表通りから裏通りへと…

そんな時！

「きゃ〜！！誰かタスケテ〜！変な男に攫われるう〜！」

すぐ近くで美女（リユカ曰く）の悲鳴が聞こえた！

新たな出会いを求めてリユカがダツシユで赴くと…

其処には、紛う方なき美少女が3人の男に腕を引つ張られ、攫われ
そうになっている現場だった！

「コラー！お父さんにナンパの仕方も習わなかったのか！？女の子
を口説くなら、もっと優しく口説くもんなんだぞ！パパとママに聞
いてみる！」

いきなり現れ意味の分からない事を叫ぶ男に、戸惑った男達…

男達が戸惑った際に、襲われてた少女はリユカの方に逃げ寄り抱き
付いた。

「どなたかは存じませぬが、助けて下さいまし！あのぶ男達が『へ
つへつへつ、ねーちゃんあつちの物陰で良い事してやんぜ！』って
言つて、イヤらしい手で私を触るんですう」

「な、何勝手な事を〜うるさい！痛い目に遭いたくなければ、今す
ぐ失せる！僕は暴力事が嫌いなんだ！」

女性を庇う様に立ちはだかるリユカ。

「ちい！仕方ない…大事にするわけいかないな…おい！手早く始末
するぞ！」

3人の男のリーダー格が、他2人に指示を出し、リュカに襲いかかる！

「ちょ、女の子1人に大袈裟じゃない？何、殺気立ってんだよオマエら！もしかして地雷踏んじゃったのかな、僕…」

3人の攻撃を余裕で躲しつつ少女を守るリュカ。

自身の技量には多少の自信があつた男達は、全く掠りもしない現状に焦りだした！

「メラミ」

そして焦つた男の1人が思わず魔法を唱える！

「バギ」

しかしリュカのバギで四散され実力の差を思い知る事に…

さらにリュカは素早く3人の懐に飛び込み、強烈な一撃を食らわせる！

メラミを放つてから、一瞬の出来事だつた…

「凄い…あの3人を一瞬で…」

少女が驚き呟く。

3人を気絶させたリュカは、少女の元へ近付くと、

「やあ…改めましてこんにちは。僕の名前はリュカです。エッチする事を前提に、一緒にお茶でもどうですか？」

こんな状況でふざけたナンパをするリュカに、更に驚く少女…しかし直ぐにそれが笑いに変わる！

今までこんな男に出会つた事がない…

不思議そうな顔で微笑むリュカを見つめ少女が…

「よろしくねリュカ。私はレイチエル。何処かお茶の美味しいお店知ってるの？」

こうして2人はその場を離れて行く…

気絶する男3人を置き去りにして…

一方アルル達は、半日待たされ続けたのにも拘わらず、『申し訳ありませんが、本日の謁見は出来ません。また後日お越し下さい』と追い返された。

入城した時は、朝日が眩しかったのに、今では夕日が輝いている…

「ああ…何にもしてないのに疲れたわ…」

「本当だな…」

「でもリユカはんを置いてきて正解やったね！」

「ええ！侍女の方々も美人揃いでしたもんね…」

「一緒だったら、もっと疲れてたよ…きつと…」

みんな溜息と共に宿屋へと戻って行く…

リユカに今日1日は無駄であった事を伝え、明日の予定を伝えねばならない。

今日と同じではあるのだが…

命中率(前書き)

今回は出だしからです！

あの野郎…

初っぱなからやらかしています！

命中率

<イシス>

「な…何やってんだよ!」

アルル達は宿屋へ戻り、状況説明をする為リュカの部屋に訪れた。ドアを開け入室すると、中ではリュカと見知らぬ少女（レイチエル）が閨事の真つ最中であつた!

「全く!こつちは大変だつたんだぞ!1日待ち惚けで!」

「あはははは。そんなに怒るなよお。…で、女王様には会えたのかな?」

数分後、ともかく行為を止めさせ、二人が服を着るのを待つてから状況の報告に入る。

「会えなかつたわ!忙しいんだつて!リュカさんと同じで!」

トゲのある発言をするアルル。

「へー、大変だつたね」

しかし全く堪えてない。

「貴女達は女王に会つて何をしたいの?」

不意にレイチエルが会話に割り込んできた。

「何や!?急に会話に割り込んで!だいたいアンタ何なんや!?」

「ああ、ごめんね。私レイチエル!今日危ない所をリュカに助けられたの!そんで、今さっきお礼をしていたところよ」

「何でリュカさんはそうやってトラブルに遭遇するの…凄いな命中率よね!」

「何でだろ?面倒事嫌いなんだけどね?」

笑っているリュカに呆れるアルル。

「で、何で女王に会いたいのよ!」

「私達、バラモス討伐の旅に出ているんです。その為にピラミッド

にあると言われる、魔法の鍵を入手したいんですけど……」

「なるほど……ピラミッドへ入る許可を、女王に貰いに行ったのね……
勝手に入っちゃえば良かったのに……」

「アホか！そんな事したら墓荒らしとして、手配されてまうやん！
ウチらは魔法の鍵が欲しいだけや！墓、荒らしたい訳とちゃう！」
エコナはジェラシーから、レイチエルにきつく言い放つ。

「私、城には顔が利くんです！何だっいたら今から謁見できる様、計
らいましょうか？」

「ほ、本当ですか！？しかも今からでも良いんですか？」

「ええ！リュカがどうしてもって言うなら、私頑張っちゃうなあ」
そう言い、リュカの首に腕を回し甘えるレイチエル。

それを見て、一気に苛つくアルル・ハツキ・エコナ！
そんな女性陣に怯えるウルフ。

「じゃあレイチエル……お願いするよ」

リュカは気にもせず、レイチエルにキスをする……
砂漠に血の雨が降るのは、時間の問題だろうか……？

リュカと腕を組み、イチャイチャしながら城内を歩くレイチエル。

そんなレイチエルを見て、啞然とする人々……皆、言葉を失っている
様だ。

そんな状況を感じ取る余裕のない少女3人。

そんな少女3人のイラつきに、怯える少年が1人。

この奇妙な男女6人は、誰にも止められることなく、イシス城謁見
の間へと入室して行く。

謁見の間に入ると、既に幾人かの側近等が待ち構えており、皆驚い
た様子でリュカ達を見ている。

その中にはリュカが昼間に気絶させた3人の男も含まれている。

「ただいま〜！久しぶりの城下は凄く楽しかったわ！」

レイチエルはリュカの腕から離れると、軽い口調で今日の感想を語り、玉座へと腰を下ろした。

「女王様！お戯れが過ぎますぞ！」

側近の一人：多分、最も位の高い大臣がレイチエルに向けて苦言を呈す。

「偶にはいいじゃない！」

それを軽い口調で流すレイチエル。

「ちょ…じよ、女王様！？貴方、イシスの女王だったの！？」

「口を慎まんか！」

アルルの発言に激怒する側近達…

「黙れりなさい！この者達は良いのです！私は身分を秘匿して、この者達と接していたのです…！」

「し、しかし！」

レイチエルが許しを出しても、不満を口にする側近…恰好からして軍人であろう。

「女王がいつって言ってんだから、黙れよハゲ！」

「な、何だとお！こ、この無礼者め！」

爽やかな笑顔で無礼な物言いのリュカに、ブチ切れる軍人！

腰から剣を抜き放ち、リュカに襲いかかってくる！

「ブレイザー、お止めなさい！」

ブレイザーと呼ばれた軍事は、リュカまであと3メートルの所で止まる。

そして苦々しい表情のまま、剣を鞘に戻し下がった。

「ごめんなさい、皆さん。ちょっと気が短いのよ、彼…」

今にも血管がキレそうな程、顔を赤くしているブレイザー…

「茹で蛸みたいだね」

リュカとレイチエルが揃って笑い転げる！

アルル達は傅き、胃痛に悩まされている！

「さて…十分笑ったところで、本題に入りましょうか！…確か、ピラミッド探索の許可が欲しいんですね！？」

「はい。バラモス討伐の為には、ピラミッドに保管されている、魔法の鍵が必要です。どうか我々に許可を…」
恭しく嘆願するアルル。

「……………条件が1つあります！」

宿屋での気さくさが微塵もなくなったアルルを見て、意地悪をしたくなったレイチエルは、素直に許可を出さない。

「条件とは何でございましょう」

「ふふっ…簡単よ…リユカが私と結婚する事よ！」

一人傳いてないリユカを見つめ、国家の行く末が左右されそうな条件を提示するレイチエル！

「な！！そんな横暴な！」

「せや！そんなん認めへん！」

急に立ち上がり、レイチエルに向けて苦情をぶつけるハツキとエコナ。

「ハツキ、エコナ、黙って！！」

「…っ！」「…」

アルルに怒鳴られ、再度傳く二人。

「女王様…その条件は、私の一存では答えられません…当人の意志を尊重致します」

「……………なるほど…では、リユカ。私と結婚して下さいますか？」

先程までは冗談半分の表情だったが、今は真面目な表情で求婚するレイチエル…本気でリユカの答えを待っている。

「えー？ヤダよ！」

この場にいた誰もが驚く発言をするリユカ…

「き、貴様ー！！女王様の気持ちを踏みにじるとは…「…っさい！黙れよ！お前には関係ないだろうが、ハゲ！」

また一人激怒するブレイザー！（国家の重鎮だし関係なくは無いいんだけどね）

頭皮の事をかなり気にしているらしく、先程よりも勢いを増してリユカに襲いかかる！

レイチエルも求婚を断られたショックで、少し呆然としていた為、今回は止める事が出来なかった！

ブレイザーはリユカに向けて剣を振り下ろす！

しかしリユカは、表情一つ変えることなく、右手の親指と人差し指で摘み受け止めた！

「オイオイ…女王の前で流血沙汰は拙いんでない？」

「ブ、ブレイザー！退きなさい…私の客ですよ！」

しかし退かないブレイザー…いや、退けないのだ…全体重をかけて剣を引き戻そうとしているが、リユカの手から剣が離れない！

「リユ、リユカさん！手を放してあげて下さい！」

気が付いたアルルがリユカに告げる。

「あ！そうか…」

リユカは慌てて手（指）を放す…すると、ブレイザーが勢い良く後方へ吹っ飛んだ！

何やら何処かで見た様な光景だ…

凄まじい勢いで壁に叩き付けられたブレイザーは、そのまま気を失い壁際に崩れ落ちた。

「…やつと静かになったね」

リユカの一言に、騒ぎ出しそうになった側近達を手で制し、穏やかにリユカへと語りかけるレイチエル。

「リユカ…何故、私と結婚してはくれないのですか？私と結婚すれば、イシスの王になれるのですよ？」

「ヤダよ！王様になったら自由に冒険出来ないじゃん！」

「……………では、ピラミッドへの探索許可は認めません！…困るのではないかしら？魔法の鍵が手に入らないと」

レイチエルは少し意固地になっていた。

「僕は困らないよ。ただ、バラモスを倒せなくなるだけだし！」

そう…バラモスが倒されないと困るのは、この世界の人々だ…

イシスの女王として例外ではない。

「……………」

「……………」

リュカとレイチエルは見つめ合いながら沈黙を続ける。

「ふふふ…分かりました。諦めます！あゝあ…私、本気でリュカの事好きになっちゃったの…」

「ごめんね。初めから敵わぬ恋だったんだよ…僕、奥さん居るし！」

「え…！？奥さんが居るのに私の事ナンパしたの？」

謁見の間に側近達のざわめきが広がる！

それに比例して、アルル達の胃の穴も広がる様だ！

アルル達が胃潰瘍で倒れる前に、ピラミッド探索の許可を貰えるの
だろうか？

命中率（後書き）

女王に手を出しといて、無事に城から出れるんですかね？
リュカさんの未来が心配です。

王家の墓

<イシス>

「え？！奥さんが居るのに私の事ナンパしたの？」
謁見の間に側近達のざわめきが広がる！

「うーん…まあ…ね！美人に逢ったら口説けて家訓だから！」
「き、貴様！女王様に変な事はしてないだろうな！？」
一番偉そうな大臣がリュカの胸ぐらを掴み問いつめる。

「変な事などしていない！普通にエッチしただけだ！3発程…」
真面目な顔で言い放つ！

「なあ……………！！！」
大臣は大きく口を開けて絶句する。

「やっぱりリュカには責任を取ってもらいたいわ！そうでしょ…」
「結婚は出来ん！愛人で良ければOKだけど…ただ、女王を辞める事！必須条件ね」

どう考えても条件を提示できる立場ではないのに、何故か偉そうな男だ。

「うーん…今、私が辞任したらイシスが混乱するのよねえ…でもリュカの愛人にはないたいなあ…」

「……………じよ、女王様！！」「……………」
家臣の皆さんが泣きそうな声で叫ぶ！

「冗談よ！残念ではあるけど、女王を辞めるわけにはいかないわ！」
「で、ピラミッド探索許可は貰えるのだろうか？」

リュカは悪びれもせず、何時もと変わらぬ口調で許可をせがむ。
間違いなくイシスのお偉いさん方を敵に回しただろう！

「ええ！勇者アルルとその一向に、ピラミッド探索許可を与えます。ピラミッド内で入手したアイテムは、自由に使って下さい。バラモス討伐に役立てば幸いです」

「ありがとう」

<ピラミッド>

「何や！？アイテムは自由に使って良い言うとして、ダンジョン内の宝箱はカラヤン！あの女、何も無いの分かってて言うたんちゃうか？」

エコナはピラミッド内で見つけた宝箱を無造作に開け、不機嫌な声で愚痴をまき散らす！

「そりやそうだろ！王家の墓って言ったら、財宝が沢山ある物だど誰もが思ってるよ！こんな入口付近に残ってるわけないって！」

「ほな『アイテムは自由に使ってえ』とか言うなや！！期待してまうやん！！」

ウルフの冷静なツツコミに、一層ご立腹のエコナ…

「そんな事を俺に怒るなよ！それに、奥の方の超危険な場所の宝は残ってるかもしれないだろ！女王様はその事を言ったのかもしれないだろ！入口付近如きで結論出すなよ！あと俺に八つ当たるなよ！まだまだ女の扱いが雑である…」

エコナとウルフが口論をしていると、珍しく大人しくしていたリユカがポツリと囁く様に喋る出す。

「宝箱を不用意に開けない方がいいよ…王家の墓って言ったら、トランプが満載だろうから…危険だよ。それに僕達の目的は『魔法の鍵』だろ！墓荒らしみたいな事するの止めようよ。お亡くなりになった方に失礼だよ…」

「何言うてんねんリユカはん！？女王自ら許可したんや！墓荒らしにはならんて！平和の為に使う事こそが、女王の願いや！その思いしかと汲んでやるうやないの！」

「勝手だなあ」

そしてリユカは、また大人しくなった…

普段なら、陰気なダンジョン内では歌い出すはずなのに、終始付近を警戒し歩いている…

モンスターの出現率も上がらず、本来はこれで当たり前なのに、何故だか不安が増すアルル。

「あの…どうかしたんですかりユカさん？何か心配事でも……………？」
「ん？ああ…ちよつと……………」

「何や、今更王位が惜しくなったん？」

「うっん、そんなんじゃないよ…ただ、僕…アンデット系、嫌いなんだよね！」

「はあ！？アンデット系が嫌い？」

怪訝な表情で聞き返すウルフ。

「此処…お墓でしょ！出てくるモンスターってアンデット系でしょ！ぼく、アンデット系には近付きたくないから、危なくなっても助けないからね。危なくならないでね！」

「何だよ！そんなの何時もの事じゃん！何時も戦闘には参加しないじゃん！アンデットとか関係ないじゃん！」

「……………まあ、そう言う事だから…妙な仕掛けに引つかからない様に注意して進もうよ」

「またカラヤ！」

リユカが注意する様に言ったにも拘わらず、宝箱を開けまくるエコナ。

ピラミッドを奥へ進みつつ、目に付く宝箱は全て開ける。

「お！？あつちには3つも宝箱があるやん！今度こそ何か入ってるかも！」

一人小走りで3つの宝箱に近づくエコナ…

「まったく…あれが商人魂…なのかしら？」

アルルは勝手な行動をするエコナに呆れながら、はぐれない様に彼女の元へ近づく。

同じくエコナの元へ進むリユカは、周囲の異様さに気付कि警戒し始めた…

「エコナ…気を付けろ！何かヤバイぞそれ！」

「何が？…またカラヤで！」

リユカの忠告を気にせず、さっさと宝箱を開け始めたエコナ…しかし、2つ目の宝箱に手をかけた瞬間、宝箱が自ら動きエコナに襲いかかってきた！

「キヤー！！！」

それは鋭い牙を携えた『人食い箱』である！

人食い箱の牙が宝箱を開けようとしたエコナに襲いかかる！

（ガシュ！！）

肉を裂く鈍い音が響き、エコナの顔に真っ赤な血しぶきが飛ぶ！

しかし、その血はエコナの物ではない！

いち早く異変に気付いたリユカの血だ！

リユカはエコナに噛み付こうとした、人食い箱と無防備だったエコナの間に左腕を入れ、エコナの変わりに人食い箱の攻撃を受けている。

「痛いだろ！コノヤロー！！」

リユカは人食い箱ごと腕を壁に叩きつけ、噛み付いた人食い箱を叩き壊す！

「怪我は無いエコナ？」

人食い箱がコナゴナになったのを確認すると、へたりこむエコナに近寄り優しく問いかける。

「ウ、ウチは…へ、平気や……………それよりリユカはんの方が怪我してるやん！」

リユカの左腕から滴る血を見て、血相を変えるエコナ。

アルル達も、泣き出しそんな表情でリユカに近づく！

「そんなに心配しないで大丈夫だから……………ベホイミ……………ほら」

傷口の塞がった左腕を見せるリユカ。

そんなリユカに抱き付き、泣きながら謝るエコナ。

「ごめんなさい！リユカはんが注意してくれたんに…ウチ…ウチ…」
「うん。これに懲りたのなら、宝箱を開ける時は注意して開けようね。一人で先走らない事！」

エコナの頭を優しく撫で、隊列を乱さぬ様注意を促す。

「でも何で危険だつて分かったの？」

ウルフがリユカに疑問をぶつける。

「うん。見てごらん…此処の宝箱の周りには、人骨が沢山落ちてるだろ。他の宝箱の周りには無かったのに…だから、此処で死ぬ人が多かったんだと思ってね…案の定、こんな事になったけどね」

「さすがリユカさん！凄いです！格好いいです！」

ハツキがリユカに抱き付き、褒め称えてる！

「そう言う状況の変化を、見逃さない事が重要なんだね！」

ウルフも瞳を輝かせ、リユカを師と仰ぐ！

「そつだぞウルフ！常日頃から変化に気付ける様にするんだ！」

「はい！」

「特に女の子は直ぐ髪型とかを変えるからね…変化に素早く気付き、褒めちぎるんだ！そう言う細かい事に気付く男はもてる！」

「はい！！！」

最早、旅の仲間というより、師匠と弟子の関係になりつつある。ウルフの未来はある意味明るい！

トラップ

<ピラミッド>

アルル達はトラップに気を配りながら、ピラミッドを更に奥へ進んで行く。

火炎ムカデやミイラ男・マミーと言ったモンスターの攻撃を打ち破り、奥へ奥へと突き進む。

言うまでもない事だが、リュカは宣言通り何もしない。何時もと同じ…

エコナも人食い箱を警戒して、宝箱を見つけてもいきなり開けなかった。

まあ…人食い箱だった場合を想定して、身構えながら宝箱を開けるのだが…

暫く進むと、大きな石の扉が一行の前に立ちはだかる。

「なんやここ？随分と嚴重やね！」

「これだけ嚴重にしてるって事は…」

「ええ…多分この奥に魔法の鍵があるのよ！」

少女3人は重厚な石の扉を調べながら言葉を交わす。

「これ、どうやって開けんねん！」

「何処かにスイッチみたいのがあるんじゃない!？」

「そうですね、とても人力じゃ開きませんよね！」

少女3人が扉を調べるのを止め振り返ると、居るはずのリュカとウルフが居なくなっているではないか！

「え!?!ちよっ…リュカさん!」

リュカが居なくなった事に不安を感じたアルルが、涙声で叫ぶ。

「な〜に〜?」

奥の方からリュカの声が聞こえる…

「どうしたの?」

リュカの声とは別方向からウルフが現れる。

「ちよつと!勝手にフラフラしないでよ!」

「せや!不安になるやん!」

責められるウルフ…

「だ、だってリュカさんが『何処かにボタンがあるから探そうぜ!』
って言うんだもん!」

「……………で、あつたの?」

「う、うん…向こうに2つあつた…」

「あつちにも2つあるよ」

戻ってきたリュカが申告する。

「つまりボタンが4つあるのね…」

「どのボタンが正解やる?」

流星は王家の墓…一筋縄ではいかない様だ。

「リュカさんはどれだと思います?」

困ったアルルは、事態の解決をリュカに押し付ける様に訪ねる。

「さあ…どれだろうねえ…でも僕が思うに、どれか1つが正解では
なく、4つのボタンの押す順番が重要だと思うよ」

「何でそう思うんですか?」

「だってさ、1つのボタンが正解だったら、偶然に正解する人も居
ると思うんだよね!でも今まで正解した人は居なさそうだし…」

「じゃあ…その順番は?」

「おいおい…幾ら何でもそんなの知らないよ!」

アルルは困るとリュカに頼る様になっている…あまり良い事では無
いです。

「闇雲に試すのは危険だし、一旦イシスへ帰ろうよ。レイチエルな
ら何か知っているかもしれないし…」

「此処まで来て町へ戻るのはシャクやな!取り敢えずボタン押して

みようやないか？偶然正解するかもしれへんやん！」

「え〜…危険だよお〜」

「私もエコナの意見に賛成よ！」

パーティーリーダーのアルルがエコナの意見を推奨する。

「此処まで来たんだもの…何もしないで帰れないわ！」

「じゃあ…どのボタンを押します？」

少女3人はレイチエルに会いたく無いらしく、町へ戻る事を拒否して
る。

「ほな、端から押して行くで！」

エコナがボタンを押そうとし、アルル達が敵の出現に警戒をする。

(リュカ以外)

(ポチ)

すると突然床が抜け、一行は一人の例外もなく落下して行く！

「『きゃー！！！！！！』」

(ドサ！)

「いてててて…何だ？此処！？」

たいした高さでは無かったが、不意を突かれた為受け身をとる事が
出来ず、予想外に痛い思いをしたリュカ…

「みんな…無事？」

ひとまず少年少女を気遣い手を差し伸べる。

「…いたたた…リュ、リュカさん…どうしよう…あ、足の骨が折れ
ちゃった…」

なんと、落下の衝撃でアルルが足を骨折してしまった！

「だ、大丈夫ですかアルル！今すぐホイミを「ダメだ！」

「『え！？』」

ハツキがアルルに近付きホイミを唱えようとしたが、リュカに阻ま
れてしまう。

「変な状態でホイミをかけると、そのままの状態で骨がくっついて

しまっ！まずは骨を真っ直ぐな状態にしないと……アルル、ものっそい痛いよ！我慢出来る？」

リユカは涙目のアルルの瞳を覗き、優しく脅す。

「お、お願いします……………」

リユカは自分のハンカチを取り出し、アルルに噛ませ骨折箇所を手を当てる…

そして…

(ゴリッ!)

不格好に曲がったアルルの足を、真っ直ぐに戻すリユカ！

「(ん~~~~~!!!!!!)」

アルルがくぐもった叫び声を上げ、激痛で気絶する。

「ベホイミ」

リユカはベホイミで骨折を治療する……………が、魔法が発動しない…

「な、なに!?ベホイミ!……………ベホイミ!」

「な、何で魔法が発動せんのか?」

「ウルフ…ちよつとメラを唱えてみる!」

「う、うん…メラ!」

ウルフが通路の奥の方目がけ、メラを唱えてみる…が、やはり魔法が発動しない!

「ど、どうなってるんですか!?!」

「……………きつと、フロア全体に『マホトーン』の魔法がかかっているんだ!…このフロアから脱出しないと魔法は使えない…」

「じゃあ早く逃げようぜ!魔法が使えないと、俺何も出来ないんだ!今戦闘になったら俺は戦力外だから!」

「うん。じゃあ、取り敢えず此处から脱出!その後は一旦町へ戻る…いいね!?!」

エコナもハツキも黙って頷く。

「…つと、その前にアルルの骨を固定したいな。ウルフ、何が添え木になる様な物無い?」

リユカに訪ねられたウルフは、周囲を見回し大量に散乱している骨

を1本拾い手渡す。

「ちよつと気持ち悪いけど、これで我慢して貰うしか…」

「ありがとう。しょうがないよ……でも……このフロア、骨だらけだな……何があるんだ、此処には？」

気絶したアルルの足を拾った骨で縛り固定する。

戦闘になった場合、参加出来ないウルフにアルルを担がせ、一行は通路を向かって右へと進んでみる……どちらが出口か分からない為、勘を頼りに進み行く。

《あゝ……やだなあ……敵、出てこないといいなあ……特にアレ！腐った系！アレ攻撃すると、杖が臭くなるんだよなあ……そうだ、アルルの『鋼の剣』を借りよう！……ああ……戦うのやだなあ……》

女の意地が招いてしまったこの状態……ある意味リュカのせいなのでは……？

王家の秘宝

<ピラミッド>

珍しくリユカを先頭に隊列を組む一行。

モンスターに発見されぬ様、物音を立てない様に歩く……しかし、足下には大量の白骨体が散乱し、実質音をさせずに歩く事は出来ない。

「しくじったな……」

不意のリユカの咳きかみんなを不安にさせる。

「ど、どうしたんですか？何をしくじったんですか!？」

アルルを担ぎリユカの直ぐ後ろを歩くウルフが、震える声で訪ねた。

「足下を見る……白骨体が増えている」

「そ、それが……？」

「つまり……こつちで死ぬ人が多いって事だよ！」

「じゃ、じゃあ……今からでも引き返しませんか？」

「何言っねん！出口に近付いてるから、トラップが発動してるのかも知れへんやろ！」

「そうだね……ウロチヨロしても危険だ……取り敢えずは進んでみるしかないね」

そしてリユカは進み出す。

トラップが何時発動しても対応できる様に、慎重に……ゆっくりと……

一行は行き止まりの部屋で立ち尽くしている……其処には大きな石棺しかない。

「ちいっ！こつちじゃなかったか！」

リユカが踵を返し、元来た道に戻ろうとすると、エコナが声をあげ皆を止める。

《何であの娘ミイラに平気で触れるの？俺、ヤダなあ…》

「おおおお！見てみい！ごつついお宝を抱えてるでコイツ！」

そう言うとミイラが抱き抱えていた『黄金の爪』をリュカ達に見せつけはしゃぎ出す。

すると何処からともなく不思議な声が聞こえてきた。

『黄金の爪を奪う者に災いあれ！！』

「な、何や！？何処から聞こえんの！？」

みんなが周囲を見回していると、突然石棺の中のミイラがエコナの腕を掴んできた！

「ぎゃー！！！」

慌てたエコナはミイラの手をがむしゃらに払いのけ、半泣きでリュカの後ろに隠れる。

しかしミイラは執拗にエコナを追いかけてきた！

「ふん！」

しかしリュカが鋼の剣で細切れにし、ミイラはその場に崩れ去る。

「何でウチを狙うねん！絶世の美少女やからか？」

「……………その黄金の爪が目当てじゃないの？返したら？」

「何言うてんねん！ピラミッド内で見つけたアイテムは、ウチ等の自由にしてええねん！女王様のお許しがあつたやん！だからこのお宝は、ウチのや！」

どうやらエコナは黄金の爪を手放すつもりは無い様だ。

(ゴソゴソ……………)

「ん！？」

行き止まりであるはずの石棺の部屋の奥から、何やら蠢く影が……………

「な、何でしょうか？」

奥から現れたのは、火炎ムカデや大王ガマといったモンスター達だつた！

しかも途方もない数が…

「げ！！さすがにヤバいつて！逃げるぞ！」

リュカ達は一斉に元来た道を走り出す！

しかし前からもミイラ男やマミーが大量に襲いかかってくる！

「くっそ！」

前方から襲い来る敵をリュカが薙ぎ払い、後方から追い続ける敵をエコナとハツキが連携して撃退する！

ウルフは気絶しているアルルを背負い、敵の攻撃を避けまくる！心なしか動きがリュカに似てきた様な……………

「なあ、エコナ！」

「な、何やあ！」

「コイツ等の目当てって、その黄金の爪じゃね？捨てちゃえよそんなの！」

「イヤや！！！！これはウチんや！」

その間もモンスターは絶え間なく襲いかかってくる！

さすがにエコナとハツキは押され気味だ…しかしリュカには疲れが見えない！

既に100体以上ものモンスターを倒してるのに、顔色も変えずに前方の敵を倒し進み続けてる！

刃こぼれの生じてしまった鋼の剣をアルルに返し、ドラゴンの杖でミイラ男やマミーを倒しまくる！

後方からの敵に押し潰されないでいるのは、リュカが前方の敵を駆逐し、逃げ道を作り出しているお陰である。

「おい！逃げ道は僕が作るから、遅れるなよ！」

ウルフ達は必死でリュカについて行く！

<イシス>

「…うつ…こ、ここは…？」

イシスの宿屋でアルルは目を覚ました。

「おはよ。足の具合はどう？」

リュカは優しくアルルの足を気遣う。

アルルは慌てて折れてた足を触り確認する……だが、痛みはなく骨折も完治している。

「私…どうなったの？」

「え…憶えてないのお…結構大変だったんだよ！」

そうは言うが、リュカは笑顔でアルルに説明してくれた。

「……………それでみんな疲れ切って寝てるのね…」

部屋の中を見渡すと、ウルフ達が薄汚れた恰好のまま、床やソファにだらしなく眠っている。

「ごめんなさい…迷惑かけちゃったね…」

「うん。大迷惑だよ」

リュカは笑いながらアルルの頭を撫でる。

しかし急に真面目な表情になり、アルルに苦言を呈す。

「アルル！あんまり僕を当てにした作戦を立てないでくれ！確かに僕は年長者の為、君達よりは多少強い…」

イヤ、多少ではないだろう…アルルはそう思ったが、あえて口には出さなかった。

「でも僕はこの世界の人間じゃない！元の世界に帰る術が見つければ、直ぐにでも帰るだろう…もし、あのピラミッド内にそんな装置があったのなら、僕は直ぐさま帰るだろう。僕の事を当てにして、ダンジョンの奥に進んだ場合、急に僕が居なくなったらどうする？僕が居なくても町まで帰れる様にしないと…」

アルルはこの時初めて分かった…リュカが戦闘をしないのは、自分たちがリュカに依存しない為だと…

「焦っちゃダメだよ。一旦退く事も大事だよ。アルルは勇者なんだから、みんなを導かないと…」

そしてリュカは自室へと引き上げた。

床等で泥の様に眠る仲間を…ボロボロに薄汚れるまで戦った仲間を見て、涙を流すアルル…

自分が彼等の命を握っている事に気付き、責任の大きさに涙が止まらない…

アルルは思う…

リュカに出会ってなければ、アリアハン大陸で命を失っていただろうと…

童歌

<イシス>

「まん丸ボタンは不思議なボタン。まん丸ボタンで扉が開く。東の西から西の東へ。西の西から東の東。」

アルル達はイシス城内を歩きながら、先程子供達に教わった童歌を確認する様に歌っている。

イシスの女王に…レイチエルにピラミッドの仕掛けの秘密を訪ねた所、『子供達の童歌にヒントが隠されていると聞きます』と、ヒントのヒントを賜った。

「まん丸ボタンは不思議なボタン。まん丸ボタンで扉が開く。東の西から西の東へ。西の西から東の東。」

「変な歌…リユカさんが歌う歌より、変な歌!」

「失礼だなウルフ君!僕の歌う歌は名曲揃いなんだぞ!」

「私、リユカさんの歌は大好きですよ?」

「そんな事より、ホンマにピラミッドと関係あんの?あの女、自分も知らんからって適当な事言っただんじや…それとも、結婚してくれへんリユカはんに嫌がらせか!」

「エコナ…お願いだから、せめて城内では不穏な発言は控えて!」
どうもエコナはレイチエルに対して、あまり良くない感情を持っているらしく、ついつい発言が不穏な物になっている様だ。

一行が不毛な会話を続けながらイシス城の入口エントランスに差し掛かると、其処には3人の屈強な男が待ち構えていた。

町中でレイチエルを強引に連れ去ろうとしていた男達だ。(実際は女王直属の護衛官である)

「……………?…あの…何かご用ですか?」

訝しげにアルルが訪ねる。

「お前等に用は無い！そっちの紫のターバンの男に用がある！」

「僕には無い！」

即答するリュカ：

「ふ、ふざけるな！！我々と正式に勝負しろ！！」

3人それぞれ武器を構え、殺気を漲らせている。

「何言ってるの？君達既に負けたじゃん！あの時幼気な少女を守る
と言う名目で、殺しても良かったんだよ。でも君達が悪質なナンパ
野郎じゃないのは気付いてたからさ、命までは取らなかったんだよ」

「黙れ！あの時は町中故、全力を出し渋った結果だ！」

「はあ？さてはお前等バカだろう！女王様を守ろうとする特務部隊
が、全力を出さないで負けてどうする！僕が女王の命を狙ってたら、
レイチエルは既に死んでたんだぞ！それにお前等、町中でメラミ使
ってたじゃん！大事だよ、町中でメラミって！」

リュカの正論という侮辱に、耐えられなくなった1人が、もの凄い
勢いでリュカに襲いかかる！

しかしリュカはその男の顔面にカウンターで拳をめり込ませる…

その男は、襲いかかった時の倍の勢いで仲間の2人の元へ、弾き飛
ばされる！

「あれえ〜…今度は城内だった故に全力を出し渋ったって言っちゃ
うう〜？おいおい…何時になったら全力を出せるんだよ…女王が死
んだ後か？イシスが滅んだ後か？世界が無くなった後か？おせーん
だよ、それじゃ！」

リュカは3人に唾を吐き付けイシス城を出て行く…

アルル達もリュカに襲いかかった3人を、不安そうに意識しながら
リュカに続く…

男達は力無くその場にへたり込むしか出来なかった…

アルル達はイシス城を出ると、城下にある武器屋へと訪れる。

先のピラミッド探索で、ボロボロになってしまった武具を修繕に出していた。

それを引取に来たのだ。

「おじさ〜ん！出来てるかしら？」

「おうよ！キレイに修繕しておいたぜ！しかし、どっだけ戦闘すればこんなにボロボロになるんだか……」

「それ程、激戦を潜り抜けてきたちゅー事や！」

リユカとウルフ以外がそれぞれ武具を受け取る。

「しかしよお……女の子が武具をボロボロにする程戦ってたのに、男共は何やってたんだ！？安全な所で高みの見物か？」

詳しく状況を知らない武器屋の店主が、推測からリユカとウルフを批判する。

「あはははは……僕、戦うの嫌いなもの！」

「かー！情けねー男だ！」

「ちやうね……むぐう！」

店主に対し異論を言おうとしたエコナの口を手で塞ぎ、エコナの懐から黄金の爪を取り出す。

「おいさん、これ幾らで買ってくれる？」

「むー！むーむー！！……ぱはっ……そ、それはウチんやー！勝手に売らんといてー！」

「でも気にならない？あんな思いをして手に入れた物が幾らするか？」

「……………おっちゃん……幾らや？」

「どうやらエコナも気になる様だ……」

「う〜ん……凄い品だが……6000ゴールドだな……」

「た、たったの6000？アホくさ、絶対に売らんで！」

「どもどうすんだよ！それ持ってピラミッドへ入ったら、またモンスターまみれだぞ！売っちまえよ！6000ゴールドでも無いよりマシだろー！」

ウルフが苦々しくエコナに言い放つ。

「うん。僕が預かっておくよ。ピラミッドに持って行かなければ大丈夫だろ！」

「……はあ？」

4人の怪訝そうな反応を無視して、黄金の爪を懐にしまい店を出て行くリュカ。

店に取り残される4人を気にせず、宿屋へと戻るリュカを慌てて追うアルル達……

「なあ……どういう事なんや？リュカはんも一緒にピラミッドへ行くんやろ？せやったら誰が持っても一緒やんか！」

宿屋へ戻るとみんなリュカの部屋に集まり、先程の続きを始め出す。

「もう……あそこに行きたくないんだ……僕……だから留守番をしてるよ！」

「何言うてんねん！リュカはんが来てくれんと、ウチら死んでまうかもしれんやんか！」

「そうだよ！この間も、魔法の使えない地下から脱出出来たのも、リュカさんが居てくれたからなんだよ！居なかつたら俺達死んでたよ！」

「うん、それぞれ！君達は僕が居るから、敵に襲われても、トラップが発動しても大丈夫と思ってるでしょ……僕に依存しまくりでしょ！」

「そ、そんな事あらへんで！そりゃ、リュカはんが居れば安心感があるけど、リュカはんは相当危なくならないと、戦ってくれへんやんか！せやから自分たちで何とかしようと、何時も思ってるで！」

「そうかなあ……？……気を付けるって言ったのに、気にせず宝箱を開けたじゃん！偶然2個目がトラップだったから良かったけど、1個目だつたら僕間に合わなかったからね。それにボタンの事もそう

だよね！一旦帰ろうって言ったのに、偶然何とかなるかもって…僕が居なくても同じ事してたあ？してないよねえ…」

エコナ・ハツキ・ウルフは何も言えなくなる…

「確かに私達はリュカさんに依存してました…でも私達は弱いんです、リュカさんが頼りなんです！」

「アルル…君達は弱くないよ。ピラミッド内であれば、モンスター如きには負けないよ。下手にトラップを発動させなければ…ね！」

「そ、そんな…偶然トラップが発動したらどうすんだよ！」

ウルフはリュカを当てに出来ない事に不安を感じ、泣き言を言い始める。

「そうならない様に気を付けるのが冒険だよウルフ！僕は何時までも、君らと一緒に旅が出来るとは限らないんだ。自分たちで何とかするのも必要だよ」

「…」

リュカはピラミッドへの同行を、頑なに拒み続ける…

「1ヶ月待っても帰って来なければ、みんなは死んだものと考えてからね。そしたら僕は、アリアハンにでも戻って、ミカエルさんとイチャイチャ過ごすよ」

「な！死ぬわけないだろ！トラップを発動させなければいいんだ！簡単じゃねーか！」

アルル達は初めて、リュカという保険を携えず冒険をする事となった。

今回の事はアルル達の成長に寄与するのだろうか？

そして一人残るリュカは、どの様なトラブルに巻き込まれるのだろうか…

狡猾な罠

<ピラミッド>

「な、なあ… やっぱりリュカさんが居ないと… 不安だよなあ…」
ウルフが必要以上に警戒しながらピラミッド内を歩いている。

彼だけではない、アルルもハツキもエコナですら、緊張した面持ちでダンジョン内を進んで行く。

前回来た時にトラップは無い事を確認した場所ですら、慎重に慎重を重ねて警戒をしている。

アルルは思う。

《何でリュカさんは何時も平然として居られたの？ 1度来た事がある所なのに、凄く怖い！ どうしてリュカさんは初めて訪れる場所でも、平気なの？》

思いの外、リュカへの依存心が大きかった事に、後悔をしているアルル達…

たいして戦闘は行わなかったけど恐怖と後悔の中、どうにか魔法の鍵が安置されてるであろう石戸の前まで、再び訪れたアルル達。

まん丸ボタンは不思議なボタン。まん丸ボタンで扉が開く。東の西から西の東へ。西の西から東の東。

イシス城の子供達が歌っていた童歌を思い出し、ボタンの前へと移動する…

<イシス>

一方そのころイシスに残ったリュカは…

無理矢理レイチエルに呼び出され、女王の自室で甘美で大人な一時をおくっていた。

「ねえ、リユカ…私と結婚できなくても、愛人になれなくても、イスに居る間は、私の恋人でいてくれるでしょ!？」

「それは構わないけどさあ…僕は城に居たくないよ!さっきの見たでしょ…大臣さん達、一齐に僕の事を睨むんだよ!視線で人を殺せるのなら、僕は惨殺されてたよ」

大臣達だけではない…下級兵士もリユカの姿を見るなり、武器を構えて睨み続ける有様だった。

アイドルの女王を寝取った恨みは計り知れない。

「あはははは。私が自由に逢いに行ければ良いんだけど…仕事が忙しくってね!」

「じゃ、忙しい女王様のお邪魔をしちゃ悪いから、僕はこの辺で帰るとするよ」

リユカはベットから起き上がり、自分の服に手をかけると、

「ああん!そんな事言わずに、もう一回だけシよ?ねえ、もう一回だけ…ね!？」

と抱き付かれ、そのまま大人な世界へと旅だつて行く…
男ってヤツは…

<ピリミッド>

(ゴゴゴゴゴゴ………)

重厚な石戸が開き、アルル達は奥に奉られてある魔法の鍵が眼前にある。

「やった!やっぱりあの童歌は、ボタンを押す順番を歌ってたんだ!」

「リユカはんが居なくても、何とかなるもんやな!」

「エコナさん！油断は禁物ですよ！」

「そうね…魔法の鍵を手にした途端、トラップが発動するかもしれないしね！用心しましょ！」

アルル達は四方を警戒しながら、魔法の鍵の元まで慎重に進んで行く。

そして魔法の鍵を持ち上げた途端、先程苦労して開けた石戸が突然閉じてしまった！

「あ！？」

「な、何や！？閉じこめられてもったのか？」

皆、慌てて石戸へと駆け寄る。

しかし重厚な石戸を人力で開ける事など出来ず、絶望感にさいなまれる。

「みんな落ち着いて！こう言う時こそ冷静に他の出口を探しましょ！」

「あの…………」

アルルがリーダーらしくみんなを奮起させたが、ハツキが間の抜けた声で水を差す。

「…何？どうかしたの？」

「あのね…あそこに扉があるんだけど…出口かな…？」

ハツキが指さす先…部屋の反対方向には、やはり頑丈そうな鉄の扉が備え付けられている。

「えらい！さすがハツキ！良く見つけたな！」

「みんな魔法の鍵しか見てなかったんですか？この部屋に入って正面ですよ！見つけるとか、そう言うレベルじゃないと思います」

皆がハツキの言葉に顔を逸らし、石戸の反対側の扉の前に早足で集まる。

そして扉のノブを回し開けようとするが、鍵がかかって開かない。

「何や！結局閉じこめられてるやん！ぬか喜びやん！」

「エコナ落ち着いて！冷静に対処しましょ！焦ったら終わりよ！」
再度叫び出すエコナをアルルが宥めようと声を荒げる！

「なあ…今手に入れた魔法の鍵を使ってみようぜ！」

今度はウルフが冷静に事態を見定め、有効な手立てを提示する。

「ああ…そっか！」

「頼むよリーダー！一番パニックってんじゃないの？」

「せやで！リーダーが落ち着いて対処せなあかんやろ！リュカはんに頼りすぎちゃうか？しっかりしてやあ」

「な…！エコナがそう言う事言わないでよ！貴女が日々金切り声をあげるから、思わず焦っちゃうんでしょ！」

アルルとエコナで口論が始まる！

「落ち着けよ、2人とも！ケンカしてる場合じゃないだろ！エコナも騒ぎすぎだし、アルルも過敏に反応しすぎだよ！リュカさんは何時も冷静だったろ…あれを見習おうよ！」

流石は男の子！最年少ではあるが、皆を纏めようと頑張っている！

<イシス>

そして一方のリュカは、レイチエルと共に豪華なディナーを楽しんでいる。

「う〜ん…おいしー！」

レイチエルはリュカに寄り添い、食事を口に運び感嘆の声を上げる。

「大袈裟だな…何時も食べてるんだろ！？」

「そりゃ何時もと変わらない食事だけど、何時もは1人で食べるか、私に気を使っている人達と食べるかで、美味しいと感じた事がないの！」

そう言いながらリュカに口移して料理を振る舞うレイチエル。

「そつだ！ねえリュカ…凄く美味しいワインがあるのよ！一緒に飲も！」

「あゝ…酒は…遠慮する」
「あら？飲めないの？そつちも凄そうに見えるけど…」
「うゝん…飲めなくは…ないんだけど…好きじゃないから、お酒…
良い思い出もないしね！」
こうして2人の夜は更けて行く…
アルル達とは対照的に。

<ピラミッド>

新たに入手した魔法の鍵を使い、ピラミッド内を更に進むアルル達は、あからさまに奇妙な部屋に侵入していた。

其処には多数の宝箱と、更に多数の棺桶が整然と並ぶ空間。
部屋の奥には上階へ登る階段があり、アルルは迷わず階段へと移動する。

「な、なあ…一個くらい開けてもええんちゃう？」

「はあ？バカなの？どう見たって罨じゃない！」

「確かにあからさまに罨や！でもな、罨を仕掛けるのに、こないあからさまなのも変ちゃうか！？第一この部屋に入る事の出来る人間は居ないはずや！そんな所に罨を仕掛けて何になるんや！？それに、ごつついお宝があるかもしれへんやろ…伝説の武器とかが…」

「う、うゝん…」

悩むアルル。

「何、悩んでんだよ！罨に決まってるだろ！早く行こうぜ！」

ウルフは先を急がせる。

「でも確かに、こんな所に罨を仕掛ける意味が分かりませんよね…
それに凄いアイテムがあつたら嬉しいですよね！」

ハツキも宝箱を開けたい様だ。

実はアルルも宝箱を開けたいのだ…でもトラップが怖い…何より先

日リユカに言われた事が、脳裏にこびりついている…

『僕が居なくても町まで帰れる様にしないと…』

今、パーティーの命を握っているのはアルルなのだ！

アルルの判断一つで、生死が決まるかもしれないのだ！

もしリユカだったらどうするだろうか…しかし、それは明白だ！リ

ユカだったら宝箱には手を付けない！

それはリユカにとって、宝箱の中身は必要ない物だからだ！

リユカはバラモスを倒す事への執着はない。

何故なら、この世界の住人ではないから…

しかしアルルにとっては重大な事だ！

少しでも強い武器を手に入れ、少しでも早くバラモスを倒さなけれ

ば…

自分と家族の住むこの世界に、少しでも早く平和を訪れさせなけれ

ば…

アルルは悩む！

アルルは迷う！

世界の為に、仲間の為に、そして自分の為にはどうすれば良いのか…

果たしてアルルはどうするのか…

そして快楽に負けるリュカ。

「ふふふ…5日間でしたっかりと学んだから！」

・
・
・
凡そ3時間後…

レイチエルから離れ、そそくさと服を着るリュカ…それを恨めしそうに眺めるレイチエル…

「ともかく、僕は町に戻るから！もうそろそろアルル達も戻って来るだろうし！」

「もう2度と戻って来ないかもしれないじゃない？」

「だとしたら、ピラミッドへ探しに行かないと…」

「あら？1ヶ月で戻って来なかったら、見捨てるんじゃないの？」

「あれは脅しだよ…ただの…見捨てるわけにはいかないだろ！あのダンジョンは、トラップにさえ気を付ければ、モンスターは大したことはないんだ。今のアルル達でも問題はない！でも欲を出して宝箱などを開けまくっていると、痛い目に遭うだろうね！」

「お優しい事で…それとも私から逃げたいから、そんな事を言うてるのかしら！？」

体中に付着したリュカの体液を、拭き取るうともせず睨み続けるレイチエル。

リュカを手放したくない一心の様だ。

「美女から逃げたいと思った事はないよ。でも僕は、自由が好きなんだ！贅沢でも束縛されるのはイヤなんだ！」

そしてリュカはレイチエルの自室から出て行った。

一人残されたレイチエルは、リュカが出て行った扉を見つめ涙する。そして、その涙は次第に量を増し、レイチエルの顔を濡らして行く。本当はリュカの後を追って行きたい…全てを捨てて、愛する男と共に

に自由になりたい…
しかし国民を見捨てて、自分だけの幸せを求める事は出来ないのだ…そんな事、彼女には出来ないのだ！
だから我が儘を言っつてリユカを束縛した！
そしてリユカは、それを承知で付き合っつてくれた。
そんなリユカの心が、嬉しくて…悲しくて…切なくて…もどかしくて…

一頻り泣いた彼女の顔は晴れやかだった。

彼女はある決意を胸に宿していた。

それはリユカへの愛を貫く事…

たとえ結ばれる事がなくとも、彼の為に尽力しよう！

女王の地位を最大限に活用し、リユカの為に情報を集めよう！

彼女の決意がアルル達を救うだろう…

<ピラミッド>

「たあ！」

(ザシュ！)

襲いかかってきたマミーを切り捨て、アルルが息を乱しながら呟く。

「はあ…はあ…い、今ので…何体目…」

「せ、せやな…50体までは…数えとつただけど…はあ…はあ…
アルル達は、この部屋に入っつて丸1日経つ…

多数の宝箱に目が眩み、思わず開けてしまった為、多数の棺桶から
ミイラ男やマミーが襲いかかってきたのだ！

宝箱を1つ開けると、棺桶から10体前後のミイラ男やマミーが起
きあがり、襲いかかってくる！

「も…もう、いいだろ！宝箱は諦めて、先に進もうよ！」

寝れきつたウルフが、涙声で嘆き嘆願する。

「何言うてんねん！まだ半分しか開けてへんやんか！こんなに嚴重に保管してんのや、ごっついアイテムがあるんやで！」

「まだ開けるのかよ……俺もう魔法力が底をついたぜ……」

「そうね、少し休んでからにしましょうか。幸いな事に、ここは宝箱さえ開けなければ、モンスターは出てこないみたいだし……」

アルル達は宝箱と棺桶が安置される部屋でキャンプの準備を進めている。

準備と言っても、携帯食を食べ、眠るだけだ。

さすがに全員で寝るわけにもいかないので、交代で1人ずつ見張りながら……

最初の見張りはエコナ……

「エコナ……絶対に宝箱を開けないでよ！触るのもなしよ！ともかく今は休憩するんだからね！」

「分かつとるって！」

「もし万が一モンスターを起こしたら、先に貴女を殺すわよ！脅しじゃないからね！本気だからね！絶対宝箱には触らないでよ！」

「……………信用ないなあ……ウチ……」

そして数時間後……アルル達は宝箱開けを再開する……

順調に宝箱を開け、戦闘に勝利し、大したことはないアイテムを手に入れ続け6時間……

残り宝箱が2つになった時に、事件が起きた！

2つの内1つを開けようと、エコナが宝箱に近付いた時、タイムラグ（出遅れた）でマミーの不意打ちを食らい、派手にスツ転んでしまった！

そしてその拍子に宝箱を2つとも開けてしまったのだ！

それにより20体以上のミイラ男とマミーが棺桶から蘇り、襲いか

かっってきた！

「こ、このバカ女！何してんだ！」

「しゃあないやん！いきなり攻撃されて転けてもったんだから！ワザとやないで！」

「当たり前です！ワザとやってたら殺してやるところです！」

ウルフがブチ切れ、エコナが言い訳をし、ハツキが物騒な事を言う。

「そんな事はいいから、逃げるわよ！」

「に、逃げるって何処へ！」

しかしウルフが訪ねた時には、既にアルルは逃げ出していた！

元来た道を逆送する様に…

重厚な石戸が閉まった、行き止まりのあの部屋へ…

安心感

<ピラミッド>

アルル達の逃亡は短時間で終わった。

何故なら、直ぐに行き止まり追い詰められたからである。

もう既に、体力も魔法力も尽き、戦う気力も尽きかけている状態だが、容赦なく襲い来るモンスター達に向け剣を構えるアルル。

重く閉ざされた石戸を背に、最後まで抗ってみせるつもりだ。

「みんな…私が敵を引き付けるから、隙が出来たらさっきの部屋の更に奥まで逃げて！」

満身創痍…今のアルルがまさにこれだ！いや、アルルだけではない…みんな戦える状態ではないのだ…

「アルルを置いて逃げ帰ったら、リュカさんに殺されちゃうよ！最後までみんなで頑張ろうぜ！」

「ウルフ…」

「そうよ！私達は仲間なのよ。見捨てる事なんて出来ません！」

「ハツキ…」

「元はと言えばウチが招いたピンチや！逃げる訳にはいかんやろ」

「エコナも…」

全員が見つめ合い頷く。

「じゃあ、行くわよ！…！」

「…」

アルルの掛け声と共に、全員が踏みだそうとした次の瞬間……

(ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ………)

背にした石戸が開き、其処には優しい表情のリュカが立っていた！

「リュ、リュカさん！…！」

「やあ…あれえ！？やっべえ…ピンチじゃん！」

そう言いながらも表情は変わらない。

「リュカさん！？来てくれたんですね！リュカさんが来てくれれば、ピンチなんて吹き飛びますよ！」

現金な事にウルフがはしゃぎ出す。

しかしリュカの後ろから大量のモンスターが迫ってきている！

「喜んでいるとこ悪いんだけど、僕も大量のモンスターに追われているんだ！黄金の爪を持って来ちゃったから…テヘ？」

リュカは肩を竦め笑いながら話す。

「………」

「『テヘ？』じゃねえー！！そんな物置いてこいよー！！」

ウルフの突っ込みは尤もだ！

ピンチを脱し、更なるピンチに陥ったアルル達…

しかしリュカが側に居るだけで、こんな状況でも生き残る希望が心に灯り、絶望的だった思いが消え去ってしまった！

「リュカさん！この部屋の奥から、新鮮な空気が入って来てます！間違いなく出口が存在しますよ！」

「そうか……では戻るより進んだ方が早いね！目の前の敵を突破するぞ！」

「……おお……！！」「……」

リュカの力強い言葉に、皆力が漲る！

<ロマリア>

アルル達はリュカのお陰でピラミッドから脱出し、リュカが用意しておいたキメラの翼でロマリアまで戻ってきた。

ロマリアの宿屋へ着くなり、みんな泥のように眠ってしまった。…リュカ以外…

その間リュカは、自身のルーラをコツソリ使い、アルル達に内緒で

「汗かくのだった！」

丸一日休み、今回の反省会と称しリュカの部屋に集まるアルル達…使用した形跡のないベットが気になるも、リュカにお説教を受けている一行…

「……………ともかく、今回は運良く助かったけど、僕が現れなかったら死んでたんだよ、みんな！わざわざ罫を発動させるなんて、正気の沙汰とは思えないね！」

「でも…冒険に役立つアイテムが…見つかるかもしれへんやんか！」「エコナ…じゃあ聞くけど、役立ちそうなアイテムはあったの？」

「……………そ、それは……………」

「この黄金の爪だって、使いこなせる人が居ないじゃないか！売ったって6000ゴールド…大変な思いまでして得るモノはあったのか？」

「……………」
皆黙る…

「あるわけないよな……………まあいい…魔法の鍵は手に入った事だし、明日ポルトガへ向けて出発だね！」

リュカはお説教を切り上げ、今後の予定を確認する。

「は、はい！魔法の鍵で関所の扉が開けばですけど…」
落ち込みモードから脱してないアルルが、ネガティブ発言を力無くする。

「開かなかつたら、ぶつ壊しちゃおうぜ！もうめんどくせーよ！」

「そんな事したらダメですよ！モンスターの行き来を阻害する為に設置されているんですから！」

リュカの無責任な発言に突っ込むアルル…少しだけ元気が出てきた様だ。

「あはははは！じゃあ開く様に祈らないとね！」

明るく笑い、話を切り上げるリュカ…そして懐から綺麗なリングを3つ取り出し、アルル・ハツキ・ウルフに手渡した。

「リュカさん…これは？」

リングを受け取ったウルフが訪ねる。

「うん。それは『祈りの指輪』と言って、魔法力を回復してくれるらしいんだ」

「それは本当ですか！？」

食い入る様に訪ねるアルル。

「つて、言ってたよ」

「誰が！」

思わず突っ込むウルフ。

「え」と…くれた人…」

「くれたつて…2500ゴールドって値札が付いてますよ！これ、何処で買ったんですか！？」

指摘するハツキ。

「入手先なんてどうでもいいじゃん」

「ウチにはくれへんの？」

ねだるエコナ。

「エコナは魔法を使えないじゃん！意味無いじゃん！」

「……………リュカさん……………もしかして昨日はエルフの里に行つてましたか？エルフの女王様が、こんな指輪をしていた様な気がするんですが……………」

「……………そうだったけ？知らないなあ……………」

アルルの鋭い観察力を見くびっていたリュカ。

「と…ともかく、それがあれば安心でしょ！魔法力が尽きても、回復できるから保険にはなるでしょ！」

「…ありがとうございます。でも、リュカさんが何時も一緒に居てくれる方が、安心なんですけど……………」

ハツキが上目遣いでリュカに迫る。

幼い頃からよく知っているウルフですら、ドキッとしてしまう様な仕草で……………」

「それは断る！僕は常に自由に居たいから…僕の自由意志を阻害す

る者は敵だ！」

相変わらず我が儘である。

しかし、大好きなリュカからのプレゼントに、心を躍らせる3人。

唯一プレゼントを貰えなかったエコナが、甘えた風にリュカへ迫る。

「なあリュカはあゝん！ウチもリュカはんから、プレゼントほしい？」

その大きな胸を押し当てて、リュカを誘惑する。

だがリュカは、そんなエコナを押し離す。

「エコナはダメです。欲張りだからダメです。ピラミッドでは欲張りすぎて、みんなを危険にしたからダメです」

数日間、肉欲に溺れる生活を送っていた為、ちよつとやそつとの色仕掛けでは落ちなくなつたリュカ。

《うそ！？あのリュカさんが色仕掛けに動じないなんて！今回の件相当怒っているのかしら？私もパーティーリーダーとして気を引き締めないと…》

事実を知らない者には、効果てきめんだつたらう…

ポルトガ

<ポルトガ>

アルル達は海風香る港町を、ポルトガ城へと歩いている。

この世界でも屈指の造船技術を誇る国だけあり、この港町は活気に溢れている。

それでも、この国の人間に話を聞けば、10数年前より衰退していると答えるであらう……

「しかし、頑丈そうな船がいっぱいあるねえ。1隻くらい貰えるといいね！」

「そうだよな！世界を救う為に過酷な旅を続ける勇者一行なんだから、船ぐらいくれても罰は当たらないよなあ！」

リユカの無責任な願望に、ウルフが本気で同意する。

「また馬鹿な事を……そう簡単に船なんかくれるわけ無いでしょ！」

「せやで！アルルの言う通りや！きつと『面倒な問題を解決したら、考えてやる』的な事を言われるで！」

「ええ………めんどくせえ………」

それ程高くないリユカのテンションが、極端に下がったところで、一行はポルトガ城へと辿り着いた。

ポルトガ城謁見の間控え室で待つ事数10分……

長時間待たされる事を覚悟していたアルル達だが、予想に反し待つことなく謁見が叶った。

「うむ。面を上げよ……お前等が勇者一行だな。」

謁見の間の玉座に座るポルトガ王に対し、片膝を付き恭しく頭を垂れるアルル達。（さすがのリユカも、まだ恭しくしている）

「は！私はアリアハンより魔王バラモスを討伐するべく、旅立ちましたアルルと申します。この度はお目通りを賜り、感謝致します」
アルルが形式的（常識的？）な挨拶をし、話を進めていく。

「そんなに畏まる事は無い！もう少し楽にして良いぞ」
ポルトガ王はある種の禁句を言ってしまった。

すかさず立ち上がり、体を揉みほぐすリユカ：（案の定…）
そんなリユカの行動を見て、胃を押さえるアルル達。

「ふお〜ふおふおふお！ロマリア王の言った通りだ！お主がりユカだな！何でも、ロマリアの王位継承を断つたと聞くが：本当か？」

「つまらない事を知ってますねえ王様は：ロマリア王とは親しいのですか？」

家臣達が怪訝な顔で睨む中、涼しい顔で会話を続ける…

行く先々の王室で、家臣や側近達に敵意を芽生えさせる男…

「まあ…お互い王だから…ある程度は親しいな。少し前にロマリア王から書簡が届いてな…お主達の事を高く評価している様だぞ！その書簡に船を与えてほしいと、熱心に嘆願が書かれておった」

「そうなんツスよ！船を1隻貰いたいんですよ！バラモスを倒す為には必要なんですよ！王様も平和になつてほしいでしょ？」

「リユカさん…お願いだから言葉を選んで下さい！」
堪らずにアルルが小声でリユカに注意する。

「良いのだ勇者アルルよ！何者にも媚び諂わないのが、その男の良さだ！側近達にも言い聞かせてある…激怒し襲いかかる愚行はせぬよ。イシスでは襲いかかった男を、吹っ飛ばしたと聞いているぞ！？本当か？」

「レイチエルとも知り合いですか？やはり書簡が？」

「うむ！あのお嬢ちゃんがお主の事をベタ褒めしておるぞ！どうやら惚れた様だな！やるのお〜色男！」

「いやあ〜イケメンですから！」

《何なのこの2人！同じ波長で話してる！！この国、大丈夫！？》

「しかしなあ……そう易々と船はやれんよ！我が国の船は丈夫で値が張るからなあ……」

「ええ……マジツスカあ……」

「マジマジ！だから頼みを聞いてくれんか？」

「ええ……面倒事ツスカあ……ヤダなあ……」

「そう言つなよ……余とお主の仲だろ！」

「う……ん……じゃあ、しょうがないツスね！」

《どんな仲よ！今日会つたばかりでしょ……！》

思わず突つ込みそうになるのを、我慢するアルル……しかし我慢できなかつた者も居た。

「どんな仲ですか……！今日が初対面でしょ、リユカさん……！」
ウルフである！

これが若さか……

「ナイス突つ込みウルフ君！」

「良い仲間が居るなあ……余の部下は、碌な突つ込みも出来んよ！」

「使えないツスね！」

家臣達が拳を握り締め、ワナワナ震えている！

「あ、あの王様……！王様の頼み事とは……？」

耐えきれなくなったアルルが、泣く様に訪ねる。

「うむ。実はな、アツサラムの東の山脈を越えた地に『黒胡椒』

なる珍味があるのだが……それを買ってきてほしい！」

「え……？マジで、そんな物と船を交換してくれんの？」

「うむ。マジマジ……！」

「やった！ちょ……簡単じゃあ……ん！ラッキー！」

「そりやムリやでリユカはん！」

今まで黙って傳っていたエコナが、慌てて発言する！

「アツサラム東の山脈は険しすぎて、人間には超えられんはずや！せやから船が無いと東の地には行けへん！」

「ええ……そうなの……じゃあ船が先じゃん！船頂戴！」

「そう慌てるでない！方法はある！アツサラムより東へ半日程行

った所に、洞窟があつてな、そこに『ノルド』と言うホビットが住んでおる！この手紙をノルドに渡せば、抜け道を教えてくれるだろう…」
そう言つて懐から手紙を取り出したポルトガ王は、リュカに手渡す。「ふ〜ん…そこまで準備出来てたんだ…じゃあ、いっちょ頑張りますか！」
リュカは手紙を受け取ると、軽く片手をあげて挨拶し、ポルトガ城を後にする。
アルル達はポルトガ王へお辞儀をして、慌ててリュカの後を追う！ポルトガ王の優しい眼差しと、家臣達の厳しい眼差しを背中に感じながら…

ポルトガ城下町の宿屋…
何時もの様にリュカの部屋で今後の方針を話し合う。

「まあ…明日になったら、キメラの翼でアッサラムへ…そしたらノルドさんを訪ねて東の地へ…って事でいいよね！」

「ええ…それで構いません…」
力無く答えるアルル。

「どうしたのアルル？元氣ないね？お腹痛いの？オツパイ揉んであげようか？」

「どうしてお腹痛いとオツパイ揉むんですか！？関係ないでしょ！」

「イヤ…僕が揉みたいだけなんだが…ダメ？」

額に血管を浮き上がらせる程イライラするアルル。

「リュカはん！そない洗濯板より、ウチの爆乳があるやん！」

「な！！？せ、洗濯…私だつて大きいですよ！リュカさん以前褒めてくれたじゃないですか！何時でも良いですよ、私！」

エコナの無礼な発言に、アルルが激怒するがハツキのアピールに阻まれ取り残される。

「アルル…気にするなよ…その内大きくなるよ！」

(ゴツ!!)

やり場のない怒りを、ウルフにぶつけるアルル！

かなりの力で、ウルフの脳天に拳骨を落とした！

「いいつてええええ…：…：…：俺、フオローしただけじゃん！」

頭を押さえ、蹲るウルフを無視して、アルルがリュカに詰め寄った！

「そんな事よりリュカさんに言いたい事があります！」

「何でしょう？アイラブユーですか？」

「違います！！いい加減、王様相手に軽口を叩くの止めて下さい！」

「な〜んだ…そんな事かあ…あはははは！…：…：…いい加減慣れてよ」

「慣れるわけないでしょ！」

アルルの怒りは収まりそうに無いが、夜も更けてきたので、今宵の

会議は解散となった…

王様の我が儘の為…黒胡椒を求め新たなる地へ…

アルルのストレスは止まる事は無いだろう…

バーンの抜け道

<ノルドの洞窟>

日が最も高い位置に登った頃、アルル達はホビットのノルドが住む洞窟に到着した。

今まで探検してきた洞窟とは違い、モンスターも気配が全く無い。そんな洞窟を奥へと進むアルル達…

かなり奥へ進んだ場所に、小柄で筋肉質な男性が一人、この洞窟内で暮らしている。

質素だが、とても洞窟内とは思えない程、整頓された部屋でくつろいでいる…

「お前さん方…いったい何用かね？私はホビット族のノルド。見ての通り人間ではない…お前さん方に危害を加えるかもしれないぞ…そうなる前に、出て行くが良い！」

静かだが、力強い口調で威圧するノルド…

「あ、あの…私た「僕達しがないメツセンジャー！君はノルドさんですか！」

人外のホビット族を前に緊張しているアルル。

そんなアルルを遮り、リユカが軽い口調で話し出す！

「君に手紙を持って来ました！取り敢えず読んで下さいな！」

ポルトガ王より渡された手紙を、ノルドに押し付けるリユカ…

怪訝そうな表情で手紙を読むノルド…

しかし手紙を読んだ途端、笑顔になる！

「お前さん方はこの手紙を読んだかね？」

「失礼な！人様の恋文を読む程、落ちぶれちゃいない！」

「別に恋文ではない！これはポルトガ王からの手紙だろう？」

「は、はい…そうです！」

ノルドはケラケラ笑いながら、手紙を見せてくれた。

【ノルドんへ　コイツ等ちよゝ良いヤツだからあ、バーンの抜け道を教えてあげて。　親愛なる　ポ　より】

「……………これ……………リュカさんが書いたんですか？」

「アルルは時々失礼だな！……………僕の字はこんなに汚くない！」

「イヤ…そうじゃなくて、内容の話なんです！」

「お嬢ちゃん、安心したまえ！その字は間違いなくポルトガ王の字だ…内容もヤツのものだ！」

そう言つて楽しそうに手紙を読み直すノルド。

「あの男が信用できると言うのなら、間違いないだろう。では、ハーンの抜け道へ案内しよう…付いて来なさい」

ノルドはアルル達を、洞窟内のある場所へと誘つ…

「あのお…ポルトガ王とノルドさんつて、どういった仲なんですか？」

ノルドの後を追いつながら、気になつた事を訪ねるハツキ。

「ふむ…ヤツとはな、王位を継ぐ前の若い頃…一緒に連んでヤンチヤした仲でな…ヤツの奇抜な行動に、何時も胃を痛めていたものだよ！当時の懐かしいなあ……………」

《それつて殆どリュカさんじゃない！！私にも今が懐かしくなる時が来るのかなあ…？》

「ノルドさんはポルトガ王と仲が良かったんですね！それじゃあ何でこんな所で暮らしているんですか？ポルトガに行けば、良い暮らしが出来るんじゃない？」

「私はホビット…ヤツが良くても、他の人間が忌み嫌う…ポルトガの為にヤツは王位を継ぐ事になった…その日から私は此処で暮らしている。ヤツの邪魔にならぬ様にな…」

無邪気なハツキの質問は、ノルドの心に悲しみを思い出させてしまった。

「…、ごめんなさい…私…」

「な…に…気にする事は無い…もう慣れたのでな…」
それでも悲しそうに俯くノルド…

「しかし変な世界だな此処は！僕の居た世界では、エルフも、ホビツトも、人間も…みんな仲良く暮らしているのに！僕になんか、人間の奥さん以外に、エルフとホビツトの愛人が居るからね！みんな仲良くやっっているからね！」

悲しそうなノルドを、励ますかの様に明るく自分の世界の事を話すリユカ…が、内容が…

「何で結婚してるのに、愛人が居るんだよ！」

「バカだなあウルフ君は！結婚したから愛人が出来たんだろ！結婚してなかったら、みんな恋人だよ！」

「そう言う事じゃねーよ！」

「お前さんは別の世界から来たのかな！？」

「そーなんツスよお…向こうで楽しくやってたのに、いきなりこの世界へ放り出されちゃって…あゝ…ビアンカに逢いてえゝ！！」
「そうか…戻れると良いな…」

洞窟内の変哲もない岩壁の前にやって来ると、ノルドはアルル達の方へ振り返りにこやかに話し出す。

「此処の岩壁を崩せば『バーンの抜け道』だ！ちよつと待ってなさい！」

そう言うとノルドは、岩壁に向けて肩からタツクルを行った！

(ドン！…ドン！…ドガン！…！)

「さあ…遠慮せずに通りなさい。洞窟を出て、南に行くと『バハラ』だ」

「あ、ありがとうございます！」

アルル達はノルドに深々と頭を下げ、バーンの抜け道へと進んで行く。

新たな土地…新たな冒険を思い、洞窟を突き進む…

<バハラタ地方>

洞窟を抜け平原を歩いていると、アントベアや腐った死体・メタルスライムなど…これまでに戦った事のないモンスターが襲いかかって来る！

しかしピラミッドでの度重なる戦闘が、アルル達を大幅に強くした！ウルフの『ベギラマ』や『メラミ』で敵を弱らせ、ハツキの『ルカナン』で防御力を落とし、アルルとエコナが連携してトドメを刺す！………因みにリュカは歌っている！

曲目は『Beauty & Stupid』

もはや誰もリュカに突っ込みを入れない。

言うだけ無駄な事は分かっているから…

そんな時だ、不思議な事件が起こったのは…

気持ちよさそうに歌うリュカの後頭部目掛け、天から『愚か者はお前だ！』と言わんばかりに腕輪が落ちてきた！！

(ゴツ！！)

「いつてえええええ！！何だ！？いつたい何だ??」

涙目になりながら頭を押さえるリュカ…

ハツキは落ちてきた腕輪を拾い、不思議そうに空を見上げる。

「大丈夫ですか！？何処から落ちて来たんでしょうね？とても綺麗な腕輪…」

「ほんまや！綺麗な腕輪やね！天からの思し召しかなあ？」

「ずいぶん痛い思し召しなんだけど………ん？…ちよつと見せてそれ！」

痛みで半べそをかいていたリュカだが、ハツキの持つ腕輪を見て、何やら顔を顰める…

「これ『星降る腕輪』じゃん！何で空から落ちて来たの?」

「リュカさんは、これの事を知ってるんですか?」

「うん。これは『星降る腕輪』と言って、装備者の素早さを上げるアイテムって言われてる…でも僕が装備した時は素早さが上がった気がしなかった！」

「それってリユカさんの素早さが、既にMAXだったからなんじゃ…」

ウルフの突っ込みを無視し、腕輪を眺めるリユカ。

「だからさ…仕事の時に書類が飛ばされない様、ペーパーウェイトとして使ってたんだ！……それが何故ここに？」

「そんな凄いアイテムを、文房具代わりに使ったから、罰が当たったんじゃないですか？」

「おかしいなあ？…この世界に飛ばされる直前は、確かに机の上になっただけどなあ？」

アルルの突っ込みも無碍にする。

「ほな、やっぱリユカはんはんに意趣返しに追って来たのとちゃう？」

「うん。その腕輪はハツキにあげる！大事にしてね」

リユカに冷たい3人を無視して、ハツキに向き直る。

「ちょ、何でハツキなんや！？ウチには？」

「ハツキだけが僕を心配してくれたからね！ハツキにあげちゃう！そう言いながら、ハツキの腕に優しく装着するリユカ。

「くっ！しくじったわあ…ウルフとアルルが良い突っ込みを入れるから、ノってしてもた！ハツキはするいわあ…指輪も貰って、腕輪も貰う！ウチは何も無しやで！」

一人ふて腐れるエコナを無視して、また歌い出すリユカ。

そして戦闘に巻き込まれる一行！

素早さが倍になったハツキは、敵の懐に入り込み、聖なるナイフで切り裂いて、直ぐさま間合いを空ける戦い方を披露する！

バーンの抜け道（後書き）

星降る腕輪が落ちてきた理由は、何れ『別世界より？』で書きたい
と思います。

過度の期待はせずに、少々の期待で待っていて下さい。

hideさんがお亡くなりになってから13年も経ちますね…
好きだったのになあ…未だに残念です！

バハラタ

<バハラタ>

美しく大きな川の畔で、営みを続ける町バハラタ。

アルル達は、この町の特産品である黒胡椒を求め、町人達から情報を集めている。

そして集めた情報を頼りに、1軒の店の前にやって来た…

「…………… 此処で…間違いないよな…」

「わ、私に聞かないでよ！」

「きつと此処ですよアルル。ほら看板があります！」

そうハツキが指差した所には【黒胡椒直売所】と看板が…

「……………でも店閉まつてるやん！」

「でも中から人の声が聞こえるよ」

そう言つてリュカは勢い良くノックする。

(ゴンゴンゴン)

「すんませえ〜ん！黒胡椒をくださいなあ〜」

暫くすると中から老人が一人顔を出し、警戒しながら訪ねる。

「…あの…お客さんですか？」

「あれ？もしかして耳が遠いの？」

リュカは小首を傾げると、大きく息を吸い、

「そうでえ〜す〜！お客さんですよ〜！！」

と、かなりの大声で老人に話しかけた！

「うるさい！！聞こえとるわい！！耳は正常じゃ！」

老人も負けずに大きな声で怒鳴り返す！

「いや…失礼しました！少し立て込んでおりまして…」

暫く店先で叫び合っていたが、互いの状況を理解する為、店内へと移動し状況を聞く事になった。

「いえ…こちらこそ申し訳ありません…」

耳鳴りが治まらないが、平静を装って謝罪するアルル。

店内には先程、怒鳴り合いをした店主の老人『ターゲル』と、店員の『グプタ』の二人が神妙な面持ちでアルル達を見つめている。

「あの…何か問題事でも…？」

「……………実は…私の孫娘のタニアが盗賊に誘拐されてしまいました…莫大な身代金を要求されております…」

「わお、一大事！じいさん、その孫娘は美人か？」

「え？…ええ…まあ…」

リユカの緊張感のない質問に、思わず呆れ顔くターゲル。

「ターゲルさん！こんな誰か分からない旅人に、話す事はないでしょう！タニアは僕が助けます！」

リユカの態度にグプタが怒る。

「そツスよ！他人に言う事じゃないツスよ！……………でも美人なのかあ…今頃、むっさい盗賊共に　　な事されて、　　になっただろうなあ…　　や　　を　　されて、　　で　　なんだよ、きつと！こう言う時、美人は損だよね！ま、ヤツらにしたら女だったら何でもいいのかな！？」

「うわー！！！タ、タニアー！！！」

リユカの無責任で無慈悲な発言を聞いたグプタは、泣き叫びながら店を出て行ってしまった！

「あ、行っちゃった！まあいいや。…そんな事よりじいさん、黒胡椒を売ってくれよ」

「ちよつと、『行っちゃった』じゃないだろ！あの人タニアさんを助けに行っただんじゃないのか！？」

「あはははは、まさか！だって居場所が分からなきゃ、タニアは此

処より北東の『バラモス東の洞窟』に囚われております！」

何処までも無責任なりユカの発言を打ち砕く様に、ターゲルは説明をする。

「居場所が分かっているのに、何故助けを出さないのですか？」

「もちろん助けは出しました！町の警備や傭兵団を雇い……しかし全て返り討ちに合い、全滅しました……」

ハツキの疑問に、ターゲルは力無く答える……

「へー……じゃ、ヤベーじゃん！アイツ一人で行っちゃったよ。まあいつか！それより黒胡椒売ってよ。それがあれば船を貰えるんだよね！そうしたらバラモス討伐に、また一歩近付くんだ！」

「バ、バラモス討伐……！……貴女方は勇者様ですか！？」

リユカの言葉にターゲルは瞳を輝かす。

「ま、まあ……建前は……」

アルルが辟易した表情で肯定する。

「ど、どうか勇者様！タニアとグプタを助けて下さい！あの二人は恋仲なのです！故に私はグプタにこの店を託すつもりだったので……しかし二人が居なくなってしまうては、こんな店………どうかどうかお願いします！二人を……」

ターゲルはアルルの手を握り、涙ながらに懇願する。

《ち、近い！顔、近いから！！》

「わ、分かりましたから……その……は、離れて……」

「おお……どうか頼みますぞ！」

ターゲルは満面の笑みで頷き続ける。

「あのお………黒胡椒は？」

しかし全く空気を読まないリユカは、黒胡椒の事しか気にしてない。………二人が無事戻って来れば、好きなだけお譲り致します！ですから、どうか……」

「うん。そう言う事なら、早速行かないと！あの突っ走り小僧がぶつ殺される前に、追いつかないと大変な事になっちゃうね！」

「そ、そうね……ターゲルさん、その洞窟は遠いのですか？」

「大人の足で半日くらいです…しかしグプタの事だから、きっと馬を使って向かっているでしょう！どうか急いで下さいませ！」
それを聞きアルル達は慌てて出発する！

「しっかし、あのガキ突っ走りやがって！迷惑だな！」

「リュカさんの所為でしょ！酷い事言うから…」

「だあって…盗賊なんて馬鹿な事やってる連中がやりそうな事でしょ？」

「ほら！リュカさんもウルフも…喋ってないで走るわよ！」

アルルが皆に走る事を指示する。

「ええ…走るのお…めんど」は・や・く・す・る！！」

人命救助という使命を前に、妙に迫力を増したアルルに逆らえず、みんな大人しく走り出す。

「いい、正面に立ちただかる敵だけを相手にして！他は無視よ…そうすれば追いつけるはず…彼はモンスターを避けながら進むはず…馬を使ってもモンスターを避けてじゃ、そんなに早くは進めないはずよ！私達は最短距離を突っ走るわよ！！」

そしてアルル達は走り続ける…

若者を救う為…

恋人達を助ける為…

そして、黒胡椒の為…（リュカのみ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6325x/>

ドラゴンクエスト? そして現実へ...

2011年12月11日05時46分発行